

MI • KU • MI

(ううん、困ったなあ……)

朝、学校へ向かう電車の中。

あたし、岡村美鳩みくはすごく困っていた。

電車はいつものようにぎゅうぎゅう詰め満員で、ろくに身体を動かすこともできない。

そんな中、先刻からあたしのお尻のところでもぞもぞと動いている手がある。

偶然手が触れている、というのではない。明らかに意志が感じられる動き。

痴漢、だ。

この時間帯の電車はいつもすごく混んでいて、ミニスカートの制服でそれに乗っている女子高生のあたしは、どうしても痴漢に遭いやすい。

今日が、初めてというわけでもない。

別に慣れているわけではないけれど、いつもなら大きな声で「止めてください」って言うくらいはできる。

だけど今日は事情が違った。

あたしが困惑している理由は、単に「痴漢に遭っているから」ではない。

今日の痴漢は、いつもとはちょっと違う。

前に立って身体をびったりと密着させているその人は……なんと、女の人の人だ。

普段、朝の電車に乗る時は、できるだけ女の人の隣に立つようにしている。少しでも痴漢に遭う確率を減らすために。

まさかそれが裏目に出るなんて、誰が思うだろう。

すごく、きれいな人だった。

整った顔立ちをしている。

歳は二十代半ばくらいだろうか。

背は高めで、長い栗色の髪は軽くウェーブがかっている。

Tシャツとジーンズというラフな服装だけど、それがすごく格好いい。スタイルも良さそうだ。

こんな人が、痴漢だなんて……いや、女の人の場合は痴女っていうんだっけ？

まあとにかく。

こうして触られていても、なんだか信じられない。
い。

だけど、間違いない。

その女の人の手が、私のスカートの中にまでも
ぐり込んでいる。

内腿を指先でくすぐりながら、ゆっくりと上
上がってきている。

(……どうしよう)

普通の痴漢なら、周囲に聞こえるように「止め
てください」って言うのに。

なんだか躊躇してしまう。

だって、誰が信じるって？

こんなきれいな女の人が、女子高生相手に強制
猥褻行為を働いているなんて。

されている本人、半信半疑だった。

でも、それが事実。

「……っ、くっ……んっ」

思わず、声が漏れてしまった。

下着の上から、エッチな部分を触られてしまっ
た。

指の動きはすごく繊細で、微妙なタッチであた
しに触れている。

くすぐったくて、むず痒くて。

そして……気持ちイイ。

頬が紅潮してしまう。

汗ばんでいるのは、五月後半の陽気のためだけ
ではなさそうだ。

(ヤダ……)

痴漢に触られて、感じてしまうなんて。

だけど、これまで遭った男の人の痴漢とは全然
違う。

相手が女性だからだろうか。いつものような生
理的な嫌悪感が湧いてこない。

すごく優しく、丁寧に触れている。

あたしが反応する部分がわかっていているみたいに、
弱い箇所を重点的に攻めてくる。

認めたくはないけれど、あたしは感じていた。

女の子の部分が反応し始めて、普段とは違った
潤いを帯びている。

「やめて……ください……」

その人にだけ聞こえるように、小さな声でささやいた。

これ以上触られていたら、どうにかなくなってしま
いそうだ。

「やあ……、やめて……」

「い、や」

女の人が、耳元でささやく。息を吹きかけるよ
うにして。

悪戯な笑みを浮かべて目を細めると、最初の印
象よりも子供っぽい顔になった。

「や……だ……」

「うふん」

あたしの抗議を無視して、指の動きはかえって
激しさを増した。

パンツの上から、あの部分に指が押しつけられ
る。

ナイロンの薄い生地がくい込んでくる。

「やっ……んっ！」

そのまま、小さな円を描くように動く指。それ
に合わせて、身体がビクッ、ビクッと震えてしま

う。

「……お、ねがい……もう、……やめて……」

「なに言ってるの。これからがイイんじゃない」

「……っ！……だめっ」

指が、下着の中にまで入ってくる。

直に、触られた。

生まれて初めての経験だった。

一番恥ずかしい部分を、他人に触られるなんて。

恋人でもなんでもない相手に。

しかも、同性なのに。

「やっ……いやっ」

身体を振ってその指から逃れようとしても、す

し詰め的車内ではほとんど身動きがとれない。

あたしはなすがままに触られていた。

中指が、割れ目の中にもぐり込んでくる。

ひとりエッチで自分で触る時のように、前後に

擦っている。

そこは理性に反してすっかり濡れてしまってい

て、指はなんの抵抗もなくつるつると滑っていた。

「は、あ……やっ、くっ……んっ！」

ぎゅつと歯を喰いしばっていても、指先がクリトリス あたしの一番敏感な部分 に触れる度に、唇の隙間から切ない声が漏れてしまう。その度に、あそこの潤いが増していくのがわかる。

だんだん、頭がぼーっとしてきた。

「可愛い反応。君って、すごく感じやすいのね」
耳元でささやかれる声が、どこか遠くから聞こえる。

指の動きは、単純な前後の往復から、もっと複雑なものへと変化しつつあった。

指の一本は、クリトリスに微かに触れてゆっくと擦っている。

もう一本の指が、一センチくらいだけあたしの中に入ってきて、小刻みに動いている。

さらにもう一本の指は、あろうことかお尻の穴の周りをくすぐっている。

「やっ！ ……ふっ ……うっ ……い、や ……」

脚ががくがくと震えて、力が入らなくて、立っているのが辛くなっていた。制服のブラウスの下

は、汗びっしょりだ。

声も、もういつまでも抑えていられそうにない。泣き出しそうだった。

いつまで、こうしていなければならぬのだらう。

「もうすぐ、イっちゃうかな？」

女の人のそんなつぶやきと、次の駅名を告げるアナウンスが重なった。

電車が減速していく。

ホームの風景が、徐々に速度を落としながら後ろへ流れていく。

ちらりと見えた駅名は、あたしが通う女子校の最寄りの駅のもの。

最後に電車は小さくガタンと揺れて、ドアが開いた。

「 ……お、降ります！ 降りしてください！」

会社員の利用は少ない駅なので、ここで降りる人はそう多くない。

あたしは必死に人波をかき分けて、ホームへ降りた。

背後で、ドアが閉まる音がする。

ふう　と、大きく息を吐き出した。

助かった、と。

ひどい脱力感に襲われて、そのままホームのベンチに腰を下ろす。

頭がぼーっとして、呆けたようにしばらくそこに座っていた。

濡れた下着の冷たい感触が、少し気持ち悪かった。

「ハト、今日はなんだか元気ないね」

クラスメイトの真澄ますみが声をかけてくる。

学校に着いても、あたしはまだ完全に復活して
いなくて、自分の席でぼんやりしていたから。

ハトってというのはあたしのおだ各。

本名は「みく」だけど、漢字では「美鳩」と書くので、昔から、仲のいい友達からは「ハト」って呼ばれている。そして真澄は、中等部入学当時からの親友。

「ん？ …… ちょっと、ね」

あたしは力のない笑みを返した。真澄は心配そうに訊いてくる。

「何かあった？」

「う、ん……。朝、痴漢に遭っちゃってさ……」

「またあ？ しよっちゆうだよー。ハトの乗る電車、混んでるもんね」

「無理ないって。ハトってば童顔で可愛いし、小柄なのにこの胸だし」

「みやあああつっ？」

もう一つの声が割り込んでくると同時に、いきなり背後からむんずと胸を掴まれて、思わず悲鳴を上げた。

「んー。相変わらず、サイズ、揉み心地ともにベリグッド！ おはよ、ハト」

「……聖せいさん、やめてよあ」

あたしは振り返らずに言った。

突然触られればどうしてもびっくりするけれど、実はこれは毎朝のこと。あたしを背後から襲っているのは、クラスメイトの佐崎ささき聖子せいこだった。

あたしは胸が大きめのせい、よくふざけて触られたりもする。だけどここまで露骨に、揉むように触ってくるのは彼女しかない。

「また痴漢に遭ったって？ よしよし。ロクでもないエロオヤジに触られて傷心のハトちゃんを、おねーさんが慰めてあげよう」

なんてこと言って、ぎゅうって抱きついてくる。

真澄が呆れ顔で言った。

「おねーさん、って。聖さん、あんた十二月生まれ

れでしょ。ハトよりも、半年ちょっと年下じゃん？」

「細かいこと言いつこナシ。ねー、ハト」

聖さんはあたしの胸を掴んだまま、頬ずりしてくる。

つまり、まあ。聖さんって、こんな人なのだ。

真澄の言うとおり、誕生日はあたしよりも後だけど、背が高く、私服で歩いていると女子大生に間違われるくらい大人っぽくて、なかなかの美人。

本名は聖子だけど、容姿も性格も、なんとかって小説に出てくる「聖^{せい}」っていう名前の女子高生にそっくりだって誰かが言い出して、同学年なのに「聖さん」って呼ばれてる。

女子校にはよくいる「下級生にもてるタイプ」で、中等部三年生だった去年なんて、校内にファンクラブまであったくらいだ。

別に、レズってわけじゃないんだろうけれど、自ら「可愛い女の子が大好き」と公言してはばからない。

そのせいか、いつもこんな風にあたしにちょっかいをかけてくる。今朝の痴漢みたいに、これ以上変なことするわけじゃないからいいんだけど。

「……でも、その痴漢の気持ちもわかるなあ。ハトって可愛いし」

そう言って、指先であたしの頬を突つついた。

「その上、百五十四センチ四十キロの華奢な身体で、この豊満な美乳は反則だって。しかも現在進行形でさらに成長中」

「成長するのは、聖さんがそうやって毎日触ってるからじゃないの？」

「こんな素敵なおっぱい、触らずにいられますかって」

「やあん、もおー！」

身体をよじらせて抵抗すると、ようやく聖さんはあたしを解放してくれた。

「とゆーわけで、もしも私が男で、ハトと同じ電車に乗り合わせたりしたら、絶対に痴漢しちゃうね。もう間違いなく！」

「はは……」

「そこまで力いっぱい断言しなくても」

あたしは力なく笑い、真澄が呆れ顔で言う。

それに、男じゃなくても痴漢する人はいるんだ

よ……とは、さすがに言えなかった。

その日は結局、夜になっても精神的ダメージが残っていた。

ずっと、朝のことを引きずっていて。

お気に入りのハーブの入浴剤を入れたお風呂にゆつくりと浸かっても、気分はなんだかもやもやしたまま、全然すっきりしない。

お風呂から上がって、バスタオル一枚で自分の部屋に戻る。

ふと、壁に掛けた大きな姿見が目に入った。

なんとなく、鏡の前でバスタオルを取ってみる。一糸まとわぬ姿のあたしが、鏡に映っている。

長湯したせいで、肌がほんのりと赤みを増していた。自分で言うのもなんだけど、ちよっぴり色っぽい。

背はやや低めだけど、きゅっと締まったウエストと細い脚はあたしの自慢。

そして、細身の割には大きめの胸。

(これのせい、なのかな……)

痴漢に遭いやすいのは。

そつと、手で触れてみた。

柔らかくて、弾力があって。

指先に少し力を込めると、ふにふにと軟体動物のように形を変える。

(うーん……)

この触り心地は、確かに楽しいかもしれない。

聖さんでなくても、触りたくなる気持ちもわかるような気がする。つい、自分でも楽しんでしまう。

(あ、でも……)

今朝の女の人は、胸には触れてこなかった。

触っていたのは、スカートの中ばかり。身体をぴつたりと密着させていたから、胸は触るに触れなかったのかもしれないけれど。

(そう……ここ)

自分の指で触れてみる。今朝、さんざん弄ばれていた部分に。

「あ……」

その前に胸を触っていたからだろうか。それと

も、今朝のことを思い出していたからだろうか。

そこは、熱い潤いを帯びていた。

「濡れて……る……」

そのことを意識すると、どんどん、変な気持ちになってくる。

身体の奥が、火照っているみたい。

あたしの中の、エッチのスイッチが入ってしまった。
う。

「ん……、ふ……うん」

中指を前後に滑らせる。あの部分から滲み出てくるぬめりを帯びた液体が、周囲に塗り広げられていく。

摩擦係数が減って、指がよりスムーズに滑るようになって、どんどん気持ちよくなってくる。

左手で、胸を掴んだ。興奮してくると、少し力を入れた方が感じてしまう。

「……や……あ」

顔を上げると、目の前の鏡に自分の姿が映っている。
いる。

あそこ胸に手をやって、赤い顔をしているあ

たしがいる。

「……ヤダ、もう！」

自分がひとりエッチしているところなんて、恥ずかしくて見ていられない。

立ったままというのも辛くなってきたので、あたしはベッドに身体を投げ出した。

本格的に、自分への愛撫を開始する。

「んっ……」

指先で、乳首を摘む。そこはすぐに固くなって、つんと突き出てきた。

下の方からは、くちゆくちゆという湿った音が響いてくる。

「や……だ……、もう……」

すごく、感じちゃってる。

いつもより敏感に反応してるみたい。手の動きが止まらなくなってしまった。

「は……あ……。ん……くうん」

右手を、顔の前に持ってきてみた。ぬるぬるに濡れて、指の間で透明な糸を引いている。

「やあ……こんなに濡れちゃってる」

こんなこと初めてだ。まだ、始めてからそんなに時間も経っていないのに。

自分がすごくいやらしい女の子になったみたいで、恥ずかしくなる。

それでも、もう止められない。

右手はすぐに下半身へと戻り、あたしの女の子の部分への愛撫を再開する。

「あ……は……あ、気持ち……イイ」

思わず、うっとりとうつぶやいた。

こころした行為を意識してするようになったのは、確か中学二年生の後半だったと思う。

それまで痩せっぽちだったあたしの胸が、急に成長を始めた頃。

膨らみはじめた胸がなんだか不思議で、鏡で見ながら触ったりしているうちに、だんだんとそれが気持ちよくなってきた。

それで『性』というものはっきりと意識するようになったのだ。

やがて、触るのは胸だけではなくなって。

今ではだいたい週に一回くらい、この背徳的で

魅惑的な行為に耽っている。

雑誌に、エッチな記事が載っていた時とか。

兄弟のいる友達がかっそり持ってきたアダルトビデオを、みんなで観た日とか。

すごくハードなボーイズラブ小説を読んだ後とか。

そんな日の夜はベッドの中で、なんだかもやもやした気分になってしまっ

つい、手がパジャマの中にもぐり込んでしまう。恥ずかしいけれど。

でも口には出さないだけで、きつとみんなやっていることだと思っ

とはいえ

「んっ……ふう、んっ……」

今日は、いつもよりずっと気持ちよくて。あそこも、いつもよりずっと濡れている。

どうしてだろう。

やっぱり、今朝のあねのせいだろうか。

(……気持ち、よかったもんなあ)

認めるのは癪だけれど。

あの人の指が与えてくれる刺激は、自分の指でするよりも気持ちよかった。

すごく、ドキドキした。

あの人が大人で、まだ高一でバージンのあたしよりもずっと経験豊富で、その分いろんなテクニクを知っているからだろうか。

「こ、こう……だったっけ？」

今朝、電車の中でされたことを真似てみる。

「うっ、……くっ」

親指と人差し指で、クリトリスを摘むようにして。

「んん……あ、んっ……あっ」

中指の先を、ほんのちよつとだけ中に入れて。

「や……だあ、こんな……あんっ！」

そこはちよつと抵抗があつたけれど、お風呂に入った後だからと自分に言い聞かせて、小指の先でお尻の穴を刺激する。

「あっ……ふ、んっ……くう……うん、あ……」

びりびりと、背筋が痺れるような快感が走る。

これまでやってきたような、単純な指の動きで

得られる刺激とはまるで違う。これに比べたら、あんなのは本当に子供の遊びだ。

何倍も気持ちいい。

(でも……)

今朝の方が、もっと気持ちよかつたような気がする。

(……そんなこと、あるはずない！)

あたしは頭を振って、その考えを追い払った。

痴漢に触られるのが、そんなに気持ちいいなんて。

そんなこと、あつていいはずがない。

気を紛らわせるように、指の動きを激しくする。

「あっ……あっ、はあっ！ あああっ！」

痛みすら感じるほどの強い刺激に、思いがけず大きな声が出てしまった。反射的に、手で口を押さえる。

だけど、大丈夫。

いま家にいるのはあたし一人。どんなに大きな声を出しても、人に聞かれる心配はない。

(そっか……。声、出してもいいんだ……)

痴漢に触られたことを思い出して、それで興奮してひとりエッチ。

ぴちぴち食べ頃の女子高生。自惚れ抜きに充分可愛いと思っているのに、彼氏もいなくてオナニーに耽っているなんて。

「……ばかみたい」

虚しくて。

悲しくて。

あたしは立ち上がると、気分を紛らわせるために、シャワーを浴びにバスルームへと戻った。

いつもと同じ、朝の電車。

乗ってすぐに、あたしは周囲を確認した。

大丈夫、昨日の女性は見あたらない。

まあ、同じ車両で毎日痴漢行為を働いていては、捕まる危険も高くなるのだろう。

あたしはふうつと安堵の息を漏らすと、素敵なスーツをびしっと着こなした、一流企業のOL風の女の人の横に立った。

今日は、安心していられる。

そう思つて電車で揺られていると。

突然、身体がびくつと痙攣した。

誰かに、お尻を触られたのだ。

(また、痴漢……?)

いったい誰が……と周囲を見回そうとした時、耳に息が吹きかけられた。

「ひっ……」

思わず首をすくめる。

「自分からすり寄ってくるなんて……昨日の気が

に入った？」

耳元でささやく声。

聞き覚えのある声。

あたしは驚いて、その人の顔を見た。

「っ！」

横に立っていたOL風の女性は、実は昨日の人だった。

昨日とは違い、スーツを着て髪をアップにしていたので、ちよつと見ただけでは同じ人と気付かなかったのだ。

あたしは蒼白になる。

「そんなに気持ちよかった？ またして欲しいの？」

「ち……違います！」

逃げ出したかったけれど、混んだ電車の中では身動きがとれなかった。女の人の手が、スカートの中にもぐり込んでくる。

「や……んっ、う、ふ……んんっ」

触れられた部分に、電流が走つたみたい。

「いい反応するね、君。すごく可愛い。それに、

胸も大きいし」

胸も触られてしまう。

聖さんのおふざけとは違う。ゆっくりと、だげど力強く、念入りにこね回している。

「やあ……あん……」

「ここも、柔らかくてぶくぶくしてる」

「あつ」

スカートの中の手が、下着の上からあそこに触れる。一番敏感な部分に、指が押しつけられる。

二度、三度。くいくいと押されて、柔らかい割れ目の中に指先がもぐっていく。

「あつ……あつ……」

「ほおら、もう濡れちゃってる」

「そ、そんな……」

あたしは耳まで真っ赤になってしまう。

恥ずかしいけれど、まったくその通りで。

指先で押されるたびに、身体の奥から蜜が滲み出してきていた。

「や……めて、ください……」

蚊の鳴くような声で、それだけ言うのが精一杯。

だけど。

「いや。こんな楽しいこと、止められるわけがないじゃない」

「そ……んな……」

にやつと意地の悪い笑みを浮かべて、かえって指をの動きを速くしていく。

指が、下着の中に入ってくる。

「やつ……ダ、メ……」

パンツの中にもぐり込んだ指先が、あたしの入口をくすぐっている。

ゆっくりと、濡れた粘膜をかき分けて。

少しずつ、奥へ侵入してくる。

「だ、ダメっ……そこ……はっ」

あたし、まだバージンなのに。

自分でも、指なんて入れたことないのに。

だめ、そんなところ。

それ以上されたら……。

「や……めて、ください…… 大声、出しますよ」

「出せば？」

勇気を出して言ったのに、全然堪えてない。平

然と笑っている。

むしろあたしを挑発するように、指先をこちよこちよと動かした。

「んっ……くっ、くうん……」

あたしは唇を噛みしめて、肩を震わせて、声が漏れそうになるのを堪える。

「ほ……ホントに大声出しますよ……。いいんですか、捕まっても？」

「その時は諦めましょ。でも……」

「ひっ……」

指が、少しだけ深く入ってくる。あたしは悲鳴を呑み込んだ。

「君が叫んだら、この指を奥まで入れちゃうからね。人差し指も、薬指もまとめて」

耳元でささやく声が、少しだけ低くなる。

脅すように。

背筋がぞくりとした。

「君、バージンでしょ？ 電車の中で処女喪失しなくてはならぬ、大人しくしてなさい。それとも下半身血まみれの姿を、ここで皆さんに披露す

る？」

「や……」

今、中指が二センチくらい入ってきている。そして、もう一本の指が入口に押しつけられた。

本気だ、と。そう感じた。

抵抗すれば、本当にあたしの初めてを奪ってしまふ。

脚ががくがくと震えた。

怖くて、声も出せなくなる。

怯えた目で、相手の顔を見た。

その人はあたしと目が合うと、ふっと目を細めた。

「そうそう、いい子ね」

声が、笑いを堪えているような優しいものに変わる。

指が引き抜かれ、割れ目の上を優しくなぞっていく。

「冗談よ。私も女だからね、それがどれほど大切なものかはわかってる。君のバージンを奪ったりはしないから、安心して」

「ただ触れることを止めてはくれず、指全体を使つて濡れた粘膜を擦りあげる。」

「安堵感と共に、また激しい快感が襲ってきた。」

「ひ……うっ、ん……」

「前には入れられないからね。今日のところは、こつちで楽しみましょう」

「ひゃっ！」

濡れた指先がお尻の穴に触れて、驚いたあたしはぴよんと飛び上がった。

「一瞬遅れて、「今日はこつちで楽しむ」の意味を理解する。」

かなり力の入った指先が、ぐいと押しつけられた。

「やっ……そんな……」

「昨日は、ここもけっこう感じてたみたいじゃない？ 大丈夫。痛くしないから」

「や、だ……め……」

その部分が、エッチなことにも使われるというのは、知識では知っている。ボーイズラブものの文庫とかはよく読むから。

「ただ自分のこととなると、信じられない。指が入ってこようとしている。」

「あたしはお尻に力を入れてそれを拒もうとしたけれど、ぬるぬるに濡れて滑る指を完全に食い止めることはできなかつた。」

「じわ……じわ……」

「お尻の穴が広げられていく。」

「力、抜きなさい。じゃないと痛いよ」

「やあ……やめて……」

「大丈夫。慣ればここもすぐ気持ちいいんだから」

「やだ……いやあ……あ！」

「こら、強情張らないの」

「別な指の爪先が、クリトリスをぴんと弾いた。」

「微かな痛みを伴って脊髄を走った刺激に、一瞬、身体力が抜ける。」

「ひっ、いいっ！ うっ……くっ！」

「そのわずかな隙に、指先に侵入されてしまった。先刻までは、単に指先が押しつけられているだけのような状態だったのに、今ははつきりと、第

一関節のあたりまで中に入っている。

「や……やああ……。く、ふう……。んっ！
い……いやあ……」

異物の侵入に対してお尻の穴は反射的にすばまって、指をぎゅうつと締めつけている。それで余計に、強い刺激を受けてしまう。

「あ……。あ……。や、ぬ、抜いて……」

初めての感覚。

舌が震えてうまく喋れない。一瞬でも気を抜いたら、悲鳴を上げてしまいそうだ。

あたしの意志とは無関係に、お尻の穴は異物を押し返そうとするかのように、ぎゅう、ぎゅうと伸縮を繰り返している。

その、一瞬力が緩むのとタイミングを合わせて、指はミリ単位で奥へと進んでくる。

「あ……。は、あ……。ああ……」

少しだけ痛くて。

少し苦しくて。

そして、なんだかもやまとした不思議な感覚。前の方を触られた時のような、はつきりとした

快感とは違う。

だけど指が動くたびに、思い切り喘ぎ声を上げなくなるような。

それを堪えるために、あたしはだらしく口を半開きにして、荒い呼吸を繰り返した。叫び声を、音のない呼気に変えて吐き出す。

指は、もう第二関節くらいまで入っているようだ。中をかき混ぜるように動きながら、まだ奥へと進み続けている。

「や、だ……。ねえ、お願い……。もう……」

「まだまだ、これからよ。ほら、もっと奥まで入っちゃう」

「や……。あつ、イタ……。あ……。あ」

掌が、お尻に触れる。そのままぴつたりと押しつけられる。

中指は、根本まですっぴんあたりあたしのお尻に呑み込まれてしまっていた。

そのまま、掌全体でマッサージでもするように円を描く。

お尻の穴の部分と、中の直腸と。

その全体に刺激が伝わる。

「んー、君ってけっこう素質アリかな？」

女の人は、なんだか嬉しそうに笑っている。

「こーゆーのは、どう？」

二、三センチ、指が引き抜かれた。入ってくる時よりも、ずっと速い動きで。

あたしの直腸もお尻も、それに同調する。ちよつど、排泄の時と似たような感覚だった。

しかし指はそこで止まり、また、ゆつくりと奥へ戻ってくる。

「ひっ、あ……う……んっ」

指を排出しようとする腸の動きに逆らって、さらに押し込まれる指。先刻よりも強い刺激を感じてしまう。

また、指は根本まで入って。

また、途中まで引き抜かれて。

何度も何度も、繰り返される。

少しずつ、動きが速くなっていく。

たまらない感覚だった。

あたしは今、指でお尻の穴を犯されているのだ。

「や……めて……。や、おね……が……あっ」

いつの間にか涙が溢れて、頬を濡らしていた。

どんなに堪えても、微かな嗚咽が漏れてしまう。

だけどその指は、あたしを犯し続けている。

頭がぼうつとしてきた。

気が遠くなりそうだ。

腰に腕が回されていないければ、立っていることもできなかったかもしれない。

いつしか時間の感覚もなくなって、あたしはただ唇を噛んで、下半身に加えられる凌辱に耐えていた。

それがどのくらい続いただろう。

不意に、指が引き抜かれた。犯され、広げられていたお尻が、完全にその入口を閉じる。

絶え間なく加えられていた刺激がなくなったことが、朦朧としていたあたしの意識を引き戻した。はっと我に返ると、女の人の手が、乱れたあたしの下着を直してくれている。

それから、ハンカチが濡れた頬に押し当てられた。

「…………？」

ためにトイレへ向かった。

あたしはまだ、事情が飲み込めていなかった。

「さ、着いたわよ。行ってらっしゃい」

電車のドアが開いて、ぽんと背中を押されて、それでようやく理解した。

いつの間にか、あたしが降りる駅に着いていたのだ。

ちらりと、女の人の顔を見る。目を細めて、優しげに微笑んでいた。

ふいつと顔を背けると、あたしは逃げるように電車から降りた。

ホームに降りても、すぐには動けなかった。

昨日と同じように、安心してしばらくベンチに座っていた。

濡れた下着が、ひんやりと冷たくなっていく。

だんだん、羞恥心が甦ってくる。

痴漢の指でお尻を犯されていたというのに、あそこはエッチな蜜を溢れさせていたのだ。

「…………きもち…………わるい」

あたしはふらふらと立ち上がると、下着を拭く

次の日も。

また次の日も。

あの女の人は、あたしに触ってきた。

近くに立たないように気をつけていても、向こうは服装や髪型、お化粧の仕方を毎日変えてくるので、混んだ電車の中をちらっと見渡したくらいでは見つけられないのだ。

それに、ちよつとくらい離れたところにおいても、器用に人混みをすり抜けてあたしの横に来てしまう。

すっかり、目を付けられてしまったらしい。

心底楽しそうに、あたしの身体を弄んでいる。

さすがに、二日目の「お尻」ほどハードなことはされなかったけれど。

最初に会ったのが今週の月曜日で、木曜日まで毎日痴漢されて。

いい加減なんとかしなきゃいけないなあ、と思
い始めた金曜日のこと。

電車に乗ったあたしは、おやつと思った。

あの人の姿がない。

いやいや。油断させておいて背後から襲ってくるつもりかも、と注意深く周囲を見渡したが、それらしき人は見当たらなかった。いくら服装や髪型を変えて変装したところで、年齢と性別はごまかせまい。

なんだか拍子抜けした。

もちろん、痴漢に遭わないのはいいことなんだけれど。あれだけ執拗にあたしを狙っていたのに、急にいなくなるというのも不思議な気分だった。

それに、これでもう触られずに済む、と喜ぶのはまだ早い。たまたま今日だけ、なにか用事があつてこの電車に乗れなかっただけかもしれない。あるいは、他に可愛い女の子を見つけつけて標的を変えたのかもしれないが、だとしたら他に犠牲になっっている女の子がどこかにいるわけで、自分が触られないからといって素直には喜べない。

しばらく、そんなことをぼんやり考えていると。

「……あ」

お尻のあたりで、もぞもぞと動く手があった。

(あーあ、やっぱり来たよ)

でも、どこから？ どこに隠れていたんだろう。

そこで、はっと気付いた。

なにか、感触が違う。

あの人はいつも、なんの躊躇いもなしに図々しく触ってくる。だけどこの手は、あたしの反応をうかがうように、こそこそと動いている。

(……！ あの人じゃない！)

急に、身体が強張った。

痴漢、だ。いや、あの人も痴漢なんだけど、そうじゃなくて。

普通の……というか、男の人の痴漢。

迂闊だった。

ここ数日、あの人にばかり気を取られていて。

電車に乗る時は女の人の横に立つ、とか。

鞆で胸やお尻をガードする、とか。

そういった痴漢対策の基本を忘れていた。

なにしろあの人は、そんな防御策などお構いなしに触ってくるから。

(……やだ)

気持ち悪い。

ごつごつした男の人の手の感触に、全身に鳥肌が立っていた。

こそこそとした、いやらしい動き。

それでいて、優しさや繊細さなど微塵も感じられない。

あの人も痴漢には違いはないけれど、触られた感じは全然違った。正直に言ってしまうえば、あの人の指は気持ちがいい。

下着の中まで触られるのは、恥ずかしいんだけど。

もちろん嫌なんだけれど。

それでも、身体は反応してしまふ。

だけど、今日の痴漢はまったく違う。

これっぽちも気持ちよくなんかない。

気持ち悪くて、鳥肌が立って。

触られるほどに、具合が悪くなってくる。

(や……ヤダ！)

内股に、なにかが押しつけられた。手とは違う

感触。柔らかくて、熱くて。

それが何か、わからないほどには子供じゃない。

(この……調子に乗って……)

吐き気がしてくる。

汚れた欲望で膨らんだ器官が、あたしの内股を擦っている。

その動きが、どんどん速くなっていく。

荒い息が、うなじにかかる。

(な、なに考えてんのよ。この変態……)

嫌悪感と共に、怒りが込み上げてくる。

いったいどうしてくれよう、と考えていると、

電車が途中の駅に止まった。

(つつっ！)

内股に、なにか熱い液体が飛び散ったのはその時だった。

瞬間、あたしはキレていた。

「なにすんのよっ！ この変態っっ！」

数人の乗客が降りて生じたわずかなスペースを利用して、鞆を痴漢の顔面に叩きつける。

今日の鞆は、六時間分の教科書と英語と古文の

辞書、そして聖さんに貸す約束をしていたマンガとお弁当が詰まったスーパードビー級。それが、あまり背の高くない中年男の顔を完璧に捉えた。痴漢は股間の汚らしいものをさらけ出したまま、鼻血を噴き出してその場に崩れる。

まだ降りる駅ではなかったけれど、あたしはホームに飛び降りた。そのまま無我夢中で改札を突っ切り、駅のトイレに駆け込む。

個室の一つに入って鍵をかけ、ようやく息をついた。荒い呼吸を繰り返す。

内股を流れ落ちる液体の感触に、はっと我に返った。白濁した粘液が、肌の上をゆっくりと流れている。

あたしはトイレットペーパーを山ほど掴み取り、その汚液を拭き取った。

むつとした、生臭い臭いが鼻をつく。

青臭い、栗の花にも似た異臭。

拭き取ったトイレットペーパーをトイレに流し、さらに持っていたウェットティッシュで拭く。その上で、臭い消しに香水を振りかける。

それでも、あの臭いが残っているように感じた。
また、胃の底から突き上げてくるような吐き気が起こる。

手で押さえる隙もなく、あたしは朝食を戻していた。

いつも朝食はほんの少ししか食べないから、胃はすぐに空っぽになる。それでも吐き気は治まる心配を見せず、胃液が逆流してくる。

口中に苦酸っぱい味が広がる。

いつまでもいつまでも。

何度も何度も。

あたしは、トイレの中で吐き続けていた。

青い顔をして教室に入ったあたしは、隣の席の真澄ますみも同じような顔をしていることに気がついた。

「……どしたの？」

「聞いてよー、ハト。今朝、痴漢に遭っちゃってさー」

「あらら」

「ここにもお仲間が一人。」

「あんなの初めてだけどさ。すっげー気持ち悪いー！」

「うんうん、そうだろう。」

「何度も痴漢に遭っているあたしだって気持ち悪いのに、慣れていない真澄ではなおさらのこと。」

「真澄は、怒っているような泣いているような、複雑な表情をしている。」

「あんなに気持ち悪いものとは思わなかった。ハトに同情するわ。あーもう！ 思い出しても鳥肌立つー！」

「よしよし、真澄ちゃん。私が慰めてあげましょ

う」

「きゃあつ！」

「こーゆーことは聞き逃さない聖さんがどこからともなく現れて、背後から真澄に抱きついた。」

「さりげなく胸の上に手を置いている。」

「ちよ、ちよつと聖さん！ こーゆーことはハトとやってよ。私はそんな趣味ないんだから」

「なんであたしに振るの？ あたしだってそんな趣味ないよ」

「あ、冷たい言葉」

「聖さんはわざとらしく傷ついた振りをした。」

「でもさあ、どうしてあんなに気持ち悪いのかね、痴漢って？」

「痴漢ってそーゆーものでしょ？」

「だってさあ。彼氏に同じことされたら、すごい気持ちイイのに」

「そりゃあ、愛があるからでしょ」

「ぷうつと膨れている真澄の頬を、聖さんが指でつつきながら笑う。」

「彼氏のは、あんたを愛するための行為。痴漢は、

ただ自分の性欲を満たすための行為。そこで違いが出るんじゃない？」

「そうかなー？ うん、そうだよ。私、行雄に愛されてるから」

「今度はのろけかい」

聖さんは肩をすくめて、興味の対象をあたしに移してきた。

ぎゅっつと抱きついてくる。

「私のは気持ちいいよねー、ハト？ 溢れんばかりの愛があるもん」

「やぁん、もぉ、聖さんてば」

「んー、可愛い可愛い」

あたしの胸に顔を埋めるようにして頬ずり。

そんな聖さんの頭をぽかぽかと軽く叩きながら、あたしは今の台詞について考えていた。

愛しているから、気持ちいい。

そんな聖さんの言葉が事実だとしたら、どうしてあの人に触られるのはあんなに気持ちがいいのだろう。

他の痴漢は比べるまでもない。そして、自分の

指でするよりも気持ちいいのだ。

（聖さんの言うことだもんね。あまり真に受けない方がいいのかも）

愛する彼氏に触られるのが、本当にそれほど気持ちのいいことなのかどうか。

彼氏イナイ歴十六年のあたしには、真実はわからないことなのだ。

土曜日の朝。

電車に乗ると、正面にあの人がいた。

あたしの顔を見て、にこにここと楽しそうに笑っている。

なんだか無性に腹が立った。八つ当たりに近いけれど、昨日痴漢に遭ったのはこいつがいなかったせいだ、と思ってしまう。

いてもいなくても、あたしに迷惑をかける奴なんだ。

あたしは自分から近付いていくと、むっとした顔でまっすぐに彼女の顔を睨みつけた。

「どうしたの、そんな顔して？ あ、私がいなくて寂しかったんだ？ ごめんね、昨日はどうしても外せない用事があった」

まるで友達との約束をすっぱかしたみたいに、ぺろつと舌を出している。

なにを言ってるんだらう。誰も、あんたなんか待ってないって。まったく、図々しいつたらあ

りゃしない。

「一人で寂しかったでしょ？ 今日、昨日の分まで可愛がってあげる」

聖さんがするみたいに、あたしの身体に腕を回してくる。

「なに寝言いつてんのよ、バカ」

あたしは心底不機嫌そうに言った。

「それに、一人じゃなかったからね」

「え？」

「誰かさんがいないおかげで、久しぶりに痴漢に遭ったよ。フツウの、ね」

「……」

嫌みたつぷりに言うと、彼女は見ていてはつきりわかるくらいに表情を曇らせた。

あたしを抱いている腕に、少し力が込められる。

「……ごめん」

低い声で、耳元でささやく。

「ごめんね。嫌な思いさせて」

それは本当に済まなそうな口調で、あたしは呆れてしまった。自分も毎朝嫌な思いをさせている

とは、微塵も思っていないらしい。

両手を、スカートの中に入れてくる。

「お詫びに、今日はうんと感じさせてあげる」

指先が、下着の上を滑っている。

「……やめてよ、この変態」

あたしは怒りの表情を崩さずに言った。だけど、向こうはまるで気にしちやいない。

あの部分の割れ目の上を、指でなぞっている。

薄いナイロンの生地を通して与えられる刺激に、身体がぴくりと反応する。

一番敏感な、小さな突起。

あたしの、クリトリス。

その上で、微かに触れるか触れないかという位置で動いている指。

たった四日間で、あたしの弱い部分はすっかり

見抜かれてしまったようだ。

「んっ……くっ……うんっ！」

固く閉じたはずの唇の端から、切ない声が漏れる。

指は執拗に、あたしの弱点を攻め続けている。

「ふっ……んっ、……や……だ……」

「もっともっと感じちやいなさい。嫌なこと全部、忘れるくらい」

「や、だ……ってば……やっ……」

パンツがずらされ、指が直に触れてくる。溶けたバターのようになっているあの部分に。

「だ……め……だ、って。お願い……いや……」

中指と人差し指が交互に動いて、絶え間ない刺激を送り込んでくる。

両手を使っているから、それが二組。四本の指が濡れた粘膜をくちやくちやに弄ぶ。

あそこ、すごく濡れている。

溢れ出してくる。

水をいっぱいに含んだスポンジみたい。指先で軽く押されただけで、じわっと滲みだしてくる。

液。だけどそれは水じゃなくて、あたしのエッチな

熱い蜜が、とろとろと流れ落ちていく。

あたしの身体、あの部分から溶けていってしまいたい。

指先で丹念に揉みほぐされて、とろとろにとろけて。

溶けてなくなってしまうそう。

意識も朦朧としてくる。

顔が熱い。

冬に、インフルエンザで高熱を出した時よりもっと熱い。

「んっ……ん……やっ……いっ」

「すごいすごい。こんなに濡れちゃってる」

なんだか、はしゃいでいるような声。

面白そうに、楽しそうに。

あたしのエツチな部分を弄んで、切ない嗚咽を上げさせている。

涙が出てきた。

脚に力が入らなくて、彼女にもたれかかるような格好になってしまふ。

「気持ちいいでしょう？ ほあ……」

「……っ！」

反射的に、身体が硬直する。

「だ……め……そこは……」

指が、入ってこようとしている。

あたしの中に。

二本の指が。

前と、後ろの入り口からそれぞれ同時に。

あたしの扉を押し開こうとしている。

「だ……めえ……や、だ……」

とろとろ、ぬるぬるに濡れたその部分は、固くすばまっていても指の侵入を止めることができなかった。

「や……あ……」

別な指が、クリトリスへの刺激を続けている。

だから、抵抗しようにも力が入らない。

入ってくる。

指が、あたしの中に入ってくる。

前の方の指は、一、二センチくらい入ったところでそれ以上進むのを止めた。代わりに、中をかき混ぜるような円運動を始める。

どうやら「バージンを奪ったりはしない」というこの間の言葉を、今日も守ってくれるらしい。

だけど後ろへの侵入を果たした指は、まだ奥へ

と進んでくる。

「や……あ、いた……い」

この間と同じように、すらりと長い中指が奥深くまで差し込まれてしまう。

「あ……ぐう……う……」

あそこ、お尻と、そしてクリトリスへの愛撫。それぞれが意志を持った生き物のように動く指。三カ所の刺激は、大きな一つの塊となつてあたしを責め苛む。

あたしは鞆を持っていない方の手で、彼女の服をぎゅっと掴んだ。そうしないと、立っていることもできなかつた。

お尻は苦しいような、痛いような、だけど少し気持ちいいような。

あそこはすごく気持ちよくて、だけど指が少しでも深く入るとちよつと痛くて。

そしてクリトリスは、気が遠くなるほど気持ちよかつた。

「ふっ、んっ……んっ、う……」

絶え間ない指の動き。

耳やうなじに吹きかけられる息。

「や……おねが……い。あつ、んっ……声……出ちゃう……」

あたしは泣きながら懇願する。

本当にもう、耐えられない。

これ以上、我慢できない。

声、出ちゃう。

周りの人に、気付かれちゃう。

「お……ねが……いつ……くっ」

早く。

早く、駅についてほしい。

今、どの辺なのだろう。

駅まで、あとどのくらいなんだろう。

頭がぐちゃぐちゃで、何もわからない。

絶え間なく与えられる快感と、それに抗おうとするわずかな理性。

あたしの全神経は、その二つに支配されていた。

一瞬だけ、窓の外の景色に意識が向く。

次が、降りる駅。

もう少し。

もう少しだ。

だけど、あたしの中で指の動きが速くなっている。

あたしの快感のセンサーが、焼き切れようとしている。

もう……もう……。

「声……出ちゃう……声……でっ！」

甲高いブレーキ音。

急減速でぐらりと揺れる電車。

その刺激が、とどめとなった。

あたしの中で、なにかが弾ける。

だめ。

だめ。

壊れちゃう。

「いいっ……っ！」

頭の中でフラッシュでも光ったみたいに、意識が真っ白になった。

あたしは、悲鳴を上げていた。

だけど唇から発せられるはずだったその声は、重ねられたもう一つの唇に押し止められていた。

(っ?)

キス、されていた。

恥も外聞もなく声を上げるために開かれたあたしの唇を、あの人の唇がぴったりと塞いでいた。

脊髄に電流を流されたみたい。

全身がぶるぶると震えている。

力が抜けていく。

ガタン！

小さく揺れて電車が止まり、ドアが開く。

意識が遠くなって、その場に崩れ落ちそうになった。

その身体を、誰かの腕が支えてくれる。

「君、大丈夫？」

優しい、女の人の声。

あの人の声。

あたしの身体を支えて、ホームへと降ろしてくれる。

いかにも親切そうに、傍目には、貧血を起こした女子高生を助けているのしって構図だったろう。自分でやったくせに。

こーゆーの、なんて言うんだっけ？ 盗人猛々しい……だったろうか。

ホームのベンチに座らされながら、朦朧とした意識の片隅でそんなことを考える。

そのまま、何もできずにぼんやりと座っていた。ひどい脱力感に襲われていた。

頭の中が、ぐるぐると回っているみたい。

全身汗ばんでいて。

心臓の鼓動は、数え切れないくらいに速い。

パンツは、粗相しちゃったみたいに濡れている。脱いでぎゅっと絞ったら、ぽたぽたと雫が落ちそうに思えるくらいだ。

(あたし……あたし……)

いつちゃった、のだろうか。

電車の中で。

痴漢に弄ばれて。

お尻まで犯されて。

それなのに、いつちゃったのだろうか。

最期の一瞬、今まで感じたことのない快感だった。

この間、一人えつちで「いったのかな」と感じたのすら、子供だましに思えてしまう。

生まれて初めて体験する感覚だった。

ベンチに座って、あたしは耳まで真っ赤にして俯いていた。

「ひゃっ……！」

突然、頬に冷たいものが押し当てられる。びっくりして、座った姿勢のまま跳び上がった。

顔を上げると、前にあの人立っている。両手にそれぞれ、飲み物の缶を持っていた。

「烏龍茶とアイス・カフェ・オ・レ。どっちがいい？」

数秒間、ぼんやりとしていたあたしは、無言で烏龍茶の缶を指差す。すると、わざわざ缶を開けてから渡してくれた。

そつと口をつける。

缶はよく冷えていて、火照った身体には心地よかった。

女の人は、アイス・カフェ・オ・レを飲みながら隣に腰を下ろす。二、三口飲んでから、にこつ

と笑ってあたしを見た。

「可愛かった。いっちゃったんだね。……ひよつとして、初めて？」

「……」

あたしは黙っていた。

なにも言えなかった。

彼女は、それを肯定の印と受け取ったらしい。

確かに、その通りではある。

満足げな笑みを浮かべている女の人を、あたし

は横目で見た。

「……どうして」

蚊の泣くような声で訊いた。ことさら小声で話そうとしたわけではない。それ以上、大きな声が出せなかった。

「……どうして、こんなことするんですか？」

言いながら、また涙が溢れてきた。どうしてなのかはよくわからない。

「私は可愛い女の子が好きで、君がすごく可愛いから。それ以上の理由が必要？」

「……レズ……なんですか？」

「そうとも言っわね。百合って言葉の方が、綺麗な雰囲気があって好きだけど」

あたしの質問に対して、平然と肯定する。こうあっさり認められてしまうと、二の句が継げなくなってしまう。

「……もう……やめてください。こんなの……」

「いや？」

「決まってるじゃないですか。……痴漢に遭って嫌じゃない人なんて」

「そうかな」

その人はベンチの背もたれに寄りかかるようにしてアイス・カフェ・オ・レを飲み干すと、横にあつたゴミ箱に空き缶を投げ入れた。

「ま、やめてあげてもいいけど。本当に君が、やめて欲しいと思っっているのなら、ね」

「……どういう、意味ですか？」

それじゃあまるで、あたしがして欲しがっているみたいに聞こえる。

そりゃあ、感じてしまっっていることは事実だ。

だけどあれは不可抗力で、好きでされている訳

じゃない。

だけど。

彼女は、悪戯な笑みを浮かべてあたしを見た。

「本当に嫌なら、どうして毎日、同じ電車の同じ車両に乗るの？ 一本前か後の電車にするだけで、私には遇わないのに」

「……っ！」

あたしは言葉を失った。

指摘されるまで気付かなかった。

どうしてだろう。

こんな簡単なこと。

それを思い付かなかったなんて。

同じ電車の同じ車両に乗ったまま、どうすれば痴漢に遭わずに済むかは嫌というほど頭を悩ませたというのに。

「本当は、して欲しかったんでしょ？」

太股の上に手が置かれた。

ぴくつと、身体が小さく震えた。

探るような目で、あたしの顔を覗きこんでくる。

「……もっと、気持ちいいことしてあげる。学校

なんてさぼって、これからホテルに行かない？」

横から、顔が近付いてくる。

唇が耳たぶに触れるようにして、そうささやく。

一瞬、背筋が凍り付くように感じた。

この人は、ただ電車の中で触るだけの痴漢ではない。

本気で、あたしを犯そうとしているのだ。

あたしは、反射的に駆け出していた。

背後で、放り出された烏龍茶の缶が転がる音が聞こえていた。

駅からずっと全力疾走してきたため、学校に着いたときにはもう汗だくで、そのうえ具合が悪くなってきた。

だから教室へは向かわず、あたしは体育館へと足を運んだ。

正確には、体育館に併設されたシャワー室。私立の女子校ということで、こうした設備は充実している。文芸部所属のあたしは、普段は体育の後くらいしか使わないけれど、運動部の人たちは重宝しているようだ。

もう予鈴が鳴った後なので、朝練の運動部の姿もない。あたしは一時限目をサボるつもりで、無人のシャワー室に入った。

この汗を流してしまいたい。それにパンツの中は汗以外のもので濡れていて、こっちはもっと切実な問題だ。このままではとても授業など受けられない。

トイレの個室くらいの大きさに区切られたシャ

ワー室。裸になってその一つに入り、コックをひねる。

ノズルから噴き出す冷たい飛沫。

それが、火照って汗ばんだ身体に気持ちいい。

「ふ……う。あーあ……もあ……」

さんざん弄ばれたあの部分に触れてみると、まだヌルリとした感触が残っていた。

まだ三十分と経っていない。電車の中の出来事が次々と頭に浮かんで、顔がかあつと熱くなってきた。

信じられない。

あんなに、感じてしまうなんて。

あんなに、何もわからなくなってしまうって。

こんなに、濡れてしまった。

気持ちよかった。

うんと、感じてしまった。

それは認めないわけにはいかない。

(あれが、本当に「イク」ってことなんだ……) 気が遠くなるような快感。

それなのに、あの人は最後になんて言った？

『もつと、気持ちいいことしてあげる』
そう。

確かに、そう言っていた。

もつと？

あれ以上？

あれ以上気持ちいいことなんて、あるの？

あれでも、死ぬほど気持ちいいって。そう思ったのに。

もつと気持ちのいいことなんて。

(嘘だ……嘘に決まってる！)

ぶんぶんと頭を振って、妄想を振り払う。

あの人はあたしを狙ってるから。

あたしのバージンを狙ってるから。

だから、そんな嘘をついているんだ。

信じられるわけがない。

なのに。

胸が、ときどきする。

下半身の奥が、じーんと痺れてくる。

また、新たな蜜が滲み出してくる。

(美鳩のバカ！ なんて、こんなことで興奮して

んの！)

シャワーの水勢をいっぱい上げて、あそこに当たった。

エッチな蜜も、エッチな妄想も、全部洗い流そうとした。

でも

「んっ！ うんっ……くっ……」

あたしってば、馬鹿。

全開のシャワーは、あたしには強すぎる刺激だった。

下半身から、ふつと力が抜けていく。

腰が抜けそうになる。

そのまま、床のタイルの上にぺたんと座り込んだ。

「……ばか。シャワーなんかでなに感じてんのよ！」

シャワーを離して、もう一度手で触れてみた。

「んっ……」

気持ち、よかった。

ちよつと触れただけで、あの時の感覚が甦って

くる。

無意識のうちに、指が前後に動き始める。

一往復ごとに、切ない声が漏れる。

もう一方の手で、胸に触れてみた。

軽く、揉む。

普段とは違う張りが感じられた。

乳首が、つんと固くなっている。

(あたし……感じちゃってる……)

何をやっているんだ 頭の片隅に残った理性

が叫ぶ。だけどそれは、今のあたしを止めるには

小さすぎる声だった。

学校のシャワー室でひとりエッチなんて。

あまりにもアブノーマルな行為。

なのに、指が止まらない。

あの、電車の中で与えられた快感。その感覚が

消えないうちに、自分でさらなる刺激を与えてし

まったから。

もう、止まらない。

「あ……ん……あ……あんっ……」

指の動きが速くなっていく。

か細い喘ぎ声は激しい水音にかき消されて、外に漏れる心配はない。

(声……そう、声)

電車の中で、声を上げそうになった時。

それを押しとどめたのは、掌じゃなくて唇だった。

た。

あの人の、唇。

指先で、自分の唇に触れてみる。

ここに、あの人の唇が重なった。

キス、されてしまった。

まだ、感触が残っている。

柔らかい唇。

(……キス！ されちゃった……)

今さらのように気づく。

ファーストキス、だった。

それを、よりによって痴漢に、それも同性の痴

漢に奪われるなんて。

しかしその事実、あたしをよりいっそう興奮

させた。

「あつ、あんっ！ ……ああっ！」

一瞬、上体が仰け反る。

あたしは、軽い絶頂を迎えてしまっていた。

ぐったりと、シャワー室の冷たい壁に寄りかか
る。

二、三分、そうしていて。

それからようやく我に返って、またシャワーを
浴び始めた。

もう、変なことなんかしない。

冷たい水を浴び続けて、身体の火照りを静める。

汗も、エツチな粘液も、きれいに洗い流されて。
興奮した心もようやく落ち着いて。

あたしはシャワー室を出た。

身体を拭いて、鞆から新しいパンツを取り出し
て身に着ける。

この数日、あたしは必ず替えのパンツを持つよ
うにしていた。

毎朝、あの人のせいでぐちゃぐちゃに濡れてし
まうから。濡れたパンツのまま授業を受けるなん
て、気持ち悪くてできやしない。

真新しい下着の、さらっとした肌触りが気持ち

よかった。

汗で湿ったブラウスも、シャワーを浴びている
間にすっかり乾いていて、あたしは少しだけ晴れ
やかな気分で教室へと向かった。

『PM5時、2番ホームで待ってる。君の恋人より』

そんなメールが携帯に届いたのは、授業中のことだった。

誰だろう、「恋人より」なんて、ふざけたことを書きそうな友達。

ひとり心当たりはあるけれど、発信者のアドレスは聖さんのものじゃない。

そこで、はっと気付いた。

あの人だ。

他に考えられない。

だけど、どうして？

どうして、あたしのアドレスを知っているのだろう。

そして

いったい何を考えてるの？

もう、その後の授業はうわの空。これっぽっちも頭に入らない。今日が土曜日で、授業が昼まで

しかなかったのは幸いだった。

そして放課後になって。

まだ、どうしたらいいか決めかねていた。

こんなメール、無視すればいい。

普通に考えればそうだ。

なのにどうしてか、放っておく気にはなれなかった。

行かないやいけないような、そんな気にさせられてしまう。

だけど、行くのも怖い。

みんなが帰り支度を始めてもまだ席に着いたまましていると、例によって聖さんが背後から抱きついてきた。

「はあとちゃん、みんなでカラオケでも行こ」

「え、……っと、でも……」

「都合悪い？ ハトちゃんがいないと、私寂しいなあ」

「ん……と、夕方から用事があるから、四時過ぎくらいまでなら」

「よし、決まり。行こう！」

聖さんに無理やり立たせられて、あたしも帰り支度を始めた。

* * *

午後、五時十五分。

あたしは、駅の改札の前にいた。

そこで、どうしたものかと思索していた。

結局、聖さんや真澄たちとのカラオケは途中で抜けてきた。だけど、あのメールに書いてあった駅のホームへ素直に行くのも躊躇われる。

どうしよう。

心の中で、色々な感情が交錯している。

帰ってしまえばいい。

あんな女、無視してしまえばいい。

メールなんか無視して、夜まで聖さんたちと遊んでいればよかった。

会って、ちゃんと話をしたい。話をつけたい。

あの人がなにを考えているのか、知りたい。

いろいろ考えて、考えて。

それで、少し遅刻。

まだ、迷っている。

「あーっ、もう！」

なんだか、腹が立ってきた。

どうして、こんなに悩まなければならぬのだらう。

あたしは何も悪くないのに。

「……仕方ない。ここまで来たんだから、行こ」

もしかしたら、悪戯つてこともある。

ホームへ行っても、誰もいないかもしれぬ。

だったら、また聖さんたちのところへ戻ればいいだけのこと。

だけど、もしも。

もしも、あの人がいたら？

「……話、しなきゃ」

ちゃんと話して、もう止めてもらわなきゃ。

いつまでも、このままじゃいけない。

あたしは小さく深呼吸をして、定期券を改札機に入れた。

ゆっくりと、歩いていく。

一步、一步。

ホームへ続く階段を、ゆっくりと昇っていく。

だんだん、後悔の気持ち膨らんでくる。

どうして、来てしまったんだろう。

せめて、聖さんが誰かについてきてもらえばよかった。

今なら、まだ間に合う。

このまま、逃げちゃえばいい。

そんな想いとは裏腹に、足は一步ずつ着実に前へ進んでいく。

最後の一段。

ホームに出る。

社会人の帰宅ラッシュが始まって、人の多いホーム。

だけど、すぐに見つけた。

人混みを避けるようにして立っている、あの人。どこで着替えたのか、今朝とは服装が違っていたけれど。

ホームにいる大勢の人間の中から、一瞬にして

見つけ出すことができた。

その他大勢の人混みの中で、その人だけが確かな存在感を持っていた。

向こうもあたしに気付いて、こちらを見て静かに微笑んでいる。

足がすくんだ。

それでも、ゆっくりと近付いていく。

「遅い」

あたしが口を開こうとした瞬間、向こうが先手を取った。

「ご、ごめんなさい……って、別に、文句を言われる筋合いはありません」

反射的に謝ってしまってから、はっと気付いて言い返す。

約束をしていたわけじゃない。向こうが勝手にメールを送りつけてきただけ。

第一、この人はあたしをつけ狙う痴漢なんだから。謝る必要なんか、どこにもない。

腹が立って、そのまま回れ右して引き返そうとした。

その背中に、言葉がかけられる。

「落とし物よ。岡村美鳩さん」

おかむらみく

名前を呼ばれて、思わず振り返ってしまった。条件反射という奴だ。

でも、どうして名前を知っているのだろう。その理由は、振り返ってわかった。

彼女が手に持っているのは、うちの学校の生徒手帳だった。

「はい」

あたしの前に差し出された生徒手帳。それは紛れもなく、あたしの手帳だ。

落とし物、だつて？

「君、今朝は慌てていたもんね」

「……嘘。あんたがポケットから抜き取ったんだ」

ぼーっとしていたあたしを、介抱する振りをしていた時。そうとしか考えられない。

あたしは女の手から手帳をひったくった。

「そうかもしれない。けれど、証拠はない……でしょ？ ほら、そんな怖い顔しないで」

罪悪感など微塵も感じていないような笑顔で、

あたしの頬をつんつんと突ついた。

「せつかく、笑顔が可愛いんだから」

齒の浮くような台詞をしらっと言う。

「強制猥褻行為の常習犯相手に、愛想よくしろつて？」

ふざけるなつて。

本当に図々しい女。

あたしは意識して、むっとした表情を崩さないようにする。

「ところで美鳩ちゃん、一緒に食事でもどう？」

いつものお礼にごちそうするわ」

お礼、だつて？

お詫び、ではないところがなんとというか。

本当に、なにを考えているんだろう。

第一、自分を狙っている痴漢と仲良く食事する女子高生が、どこの世界にいるつて。

「そんな顔しないで。怪しい店とか、ラブホとかに連れ込んだりはしないから。なんでも、君の好きなものをごちそうするよ」

最初は、もちろん誘いに乗るつもりなんてな

かつたけれど。

この台詞で、ちょっと考えを変えた。

どうせなら

「好きなものって、フランス料理のフルコースとかでもいいの？」

意地悪く訊いてみる。

どうせなら、仕返し代わりにうんと散財させてやるう、と。

それに高級なレストランなら、変なことされる心配もないだろう。

彼女はくすくと笑った。あたしの意図を見抜いたみたいに。

「いいわよ。なかなかしたたかな子ね。そういう子、好きよ」

ぼんと背中を押されて、ちょうどホームに入ってきた電車に乗せられた。

電車の中では、ほとんど話もしなかった。

向こうは一方的にいろいろと話しかけてきたけれど、全部無視。

一つだけ、あたしの方から質問した。

彼女の、名前。

意外なことに、あっさりと名乗った。犯罪者のくせに。

「そういえば、まだ自己紹介もしてなかったわね」

と。

どこの世界に、自己紹介する痴漢がいるって。偽名かもしれない、と思っただけれど、それが表情に表れていたのか、免許証まで見せてくれた。

それで、この女性が「里原公美」という名前だとわかった。

「美鳩と公美、どっちから読んでもしりとりね」

そう言って、相変わらず呑気に笑っていた。

電車を降りたのは、新橋駅。

最初に連れて行かれたのは、銀座のブティックだった。

「その格好じゃ、ちよつとまずいでしょう?」

「どうして? 学校の制服って、冠婚葬祭どんな公式の場でもOKでしょ?」

「パンツが見えそうなミニスカートの場合はどうかなあ。私は、その方が好きだけど。でも、制服じゃお酒は飲めないし。せつかくのフレンチだもの、美味しいワインを楽しみたいじゃない?」

「……まあ、あんたが服を買ってくれるっていうんなら、断る理由はないけど」

そうして、ちよつと自分のお金で買う気にはなれないような金額の、素敵なミニのワンピースを買ってもらった。

新しい服に着替えて。

次に連れて行かれたのは、某一流ホテルの最上階にあるフレンチレストラン。

ふかふかの絨毯。

いかにも高級そうな内装。

他の客も、見るからに上流っぽい人ばかり。

店に入ると、ぴしつとした身なりの中年男性が、うやうやしく頭を下げた。

あたしはちよつと脚が震えていた。

なのに公美さんは、まったく平然としているみたい。

こんなところ慣れてます、って雰囲気です。

公美さんで、お金持ちなんだろうか。

最初に会った時はTシャツとジーンズだったはずだけど、そういえば今日はブランドもののスーツを着ている。

席は、街の夜景が見渡せる窓際だった。

料理は、公美さんに任せることにした。フランス語のメニューなんて見てもちんぷんかんぷんだろうし、たとえカタカナで書いてあったとしても、今の緊張した頭では、舌を噛みそうな料理の名前なんて読めるはずがない。

「美鳩ちゃん、鴨は好き?」

「え？ ええ、まあ……」

「それじゃあ……」

その後の単語はよく聞き取れなかったけれど、どうやら鴨をメインにしたコースを頼んだらしい。続けて、別なメニューを持った男の人がやってくる。「お飲物はいかが致しますか」という台詞で、それがソムリエというものだ気がついた。マンガで見たのと同じ格好をしている。実際にソムリエがいる店で食事をするなんて、初めてだった。

「アペリティフはシャンパーニュで。キュヴェ・ドン・ペリニオンがいいかな。ワインは……私、シャンボル・ミュジニーが好きんだけど、八五年でなにかお薦めはあるかしら？」

何故かこの時、公美さんは一瞬あたしを見た。

「八五年でしたら、コント・ジョルジュ・ド・ヴォギユエのボンヌ・マールなどはいかがでしょう？ 評価の高い作り手ですし、ちょうど飲み頃を迎えております」

「ヴォギユエのボンヌ・マール？ いいわね。気

分的にはレザムルーズなんだけど、味はボンヌ・マールの方が好きだし。ええ、それにするわ」

「かしこまりました」

あたしには意味不明の会話が交わされている。ワインを頼んだらしい、ということだけはわかるけれど。

ソムリエの男性が去った後で、小さな声で訊いた。

「……このお店、すごく高そうなんだけど？」

「まあ、安くはないわね」

「具体的に言うतो？」

「料理が三万ちよつと。シャンパーニュはもう少し安くて、ワインはもうちよつと高いつてところかな」

「そ、そんなにっ？」

「今さらなにを驚いてるの？ 君のリクエストでしょ？」

「でも、だって……」

その時、ソムリエがシャンパンを持ってきて、細長いグラスに注いでくれた。

公美さんはグラスを軽く掲げて、乾杯の仕草をする。あたしも同じようにしたけれど、手が震えていた。

だって。

料理が三万円以上。

このシャンパンはそれより安いとしても、ワインがもっと高いらしいから、合計するとすごい金額。

信じられない。

確かに、高級なフランス料理って言ったのはあただけだ。

ちよつと、考えていたのとはレベルが違う。

あたしは、二人で合計一、二万円くらいのつもりでリクエストしたのに。

それに公美さんは、この他にあたしの服も買ってくれたんだ。これだって、安いものじゃない。

今日一日で、すごい出費のはず。

ちゃんとした恰好をした公美さんは、一流企業のOLのようにも見えるけど、でも歳は見たところ二十五歳前後。高給取りといっても限度がある

だろう。

それとも、風俗嬢とか？

そーゆー雰囲気ではない。

じゃあ、大企業の社長の愛人かな？　すごい美人だし。

でも、この人が男を相手にするとは思えない。

資産家の一人娘とか。

ジャンボ宝くじで一等が当たったとか。

実は普通のOLだけど、浪費癖があつてサラ金にもすごい借金があるとか。

あたしは頭をひねった。

どれもありそうな気もするし、まったく見当はずれのような気もする。

公美さんには何度もひどいことされたんだし、二、三万円なら払わせたっていいと思う。だけど十万円以上なんて、あたしの金銭感覚からはかけ離れていた。なんだか、罪悪感を覚えてしまう。「どうしたの？　シャンパーニュくらい飲めるんでしょ？」

グラスを持ったまま考え込んでいたあたしに、

公美さんが声をかける。

あたしは慌てて、グラスに口をつけた。

シャンパーニュ……要するにシャンパンよね。

あたしだって今どきの女子高生。友達と遊びに行つて、お酒を飲むことだつてある。ほとんどが安くて甘い、カクテルとかドイツワインとかだけだ。

モスカートつていつたつけ？ あーゆるー甘口のスパークリングワインなら好き。

あれはイタリアだったかな。確か、フランスのもの以外はシャンパンとは呼ばないんだよね。

そんなことを考えながら、おそろおそろ口に含んでみた。

(……………！)

全然、甘くはない。

以前ビールを飲んでみた時、甘くないお酒なんて全然美味しくないって思ったのに。

でも……。

「美味……しい、のかな？」

甘くないんだけど。でも、ビールとは違ってす

んなりと喉を通っていく。

なんて言つたらいいんだろう。

滑らかなのに、きりつと硬く引き締まったよう
な。

うーん。

ひとことと言うと、高級っぽい味……かなあ。

大人の味、つて言つてもいいかもしれない。

口の中で弾ける無数の泡が、舌に心地よい刺激を与えてくれる。

「このシャンパン、なんて言つたつけ？」

せつかくだから、名前を憶えておこう。

「キュヴェ・ドン・ペリニオン。気に入った？」

「キュヴェ……ドン・ペリニオン？」

舌を噛みそうな名前を、口の中で反芻する。

キュヴェ・ドン・ペリニオン……ドン・ペリ

ニオン……え？

「ひょっとして……これがあの有名な、ドン・ペ

リ？」

「ええ、そうよ」

公美さんは平然とうなずいたけれど、あたしは

びっくりした。

高校生のあたしだつて、名前くらいは聞いたことがある。

有名な、高級シャンパン。

ドン・ペリをご馳走してもらったなんて、友達に自慢できるかもしれない。

治まりかけていた手の震えが、先刻よりも激しくなった。

それに目ざとく気付いた公美さんが笑う。

「そんな、びっくりすることじゃないわ。世の中にはサロンとかクリスタルとか、もっと高いシャンパンだつてあるんだから」

「もつと？」

なんだか、信じられない世界。

「それより、料理が来たわよ」

つて言われても。

こんなに手が震えてて、フォークとナイフをうまく使えるか不安。

でも、出された前菜は見た目にも可愛らしくて美味しそうで、早く食べたいって思ってしまう。

お腹も空いてきたことだし、多少震えてたって構うもんかって。開き直つて食べ始めた。

ああ、もう。

どう表現すればいいんだろう。

どんな味、つて言い表すことなんてできない。

ただ一つ言えるのは、感動。

舌がとろけてしまいそうだった。

前菜も、スープも。

不覚にも一瞬、「こんな美味しいものが食べられるなら、ちよつとくらい痴漢されるのもいいかな」つて思ってしまった。でもそれつて、一種の援助交際かもしれない。

そして、もう一つの感動はワイン。

ドン・ペリにもすぐく感動したけれど。

大きなグラスに注がれた深紅の液体は、見ただけでその美しさに心惹かれた。

純白のテールブルクロスに、鮮やかなルビー色の影を落としている。

グラスを顔に近づけると、芳醇な香りが立ち上ってきた。

あたし、赤ワインって渋みとか酸味が気になつて、あまり好きじゃないんだけど。

でもこれは、色と香りだけで「飲んでみたい」って思えてきた。

最初は、おそろおそろ一口だけ。

「……っ！」

たちまち、これまで抱いていた赤ワインのイメージが一変した。

全然、渋くなくて。

柔らかな心地よい酸味があつて。

すごく滑らかな舌触りで。

でも、とても豊かな、深い味。

「す……ごい……高級なワインって、こんなに美味しいの？」

「そ。ワイン一本に何万円なんて、興味ない人には馬鹿らしいかもしれないけどね。でも、それだけの対価を支払わなければ体験できない味というのは、確かに存在するのよ」

「すごい、すごい。これなら、いくらでも飲みちやいそつ」

「飲み過ぎには気を付けて。いいワインは一般に、アルコール度数も高めだから」

「で、これはなんてワインだっけ？」

「コント・ジオルジュ・ド・ヴォギュエという生産者の、ボンヌ・マール。フランスのブルゴーニュ地方のワインね。ヴィンテージは一九八五年……わかる？」

意味深な笑みを浮かべて公美さんが言う。

一九八五年。

それは、あたしにとつてちょっと特別な年だった。

「あたし、が……生まれた年？」

「そう」

驚いた。

今から、十六年も前のワイン。

自分の生まれ年のワインなんて、飲むのはもちろん見るのも初めて。

公美さんはあたしの歳を知っていて、わざわざこの年のワインを頼んだのだろうか。生徒手帳を見られたのなら、生年月日は知られているはず。

そういえば、このワインを頼む時、ちらっとあたしの顔を見ていた。

「ちょうど、八五年のブルゴーニュってすごくいい年なのよね」

「いい年って？」

「雨が少なく、日照時間が長くて、霜や雹の被害がないこと……かな。そうすると、よく熟した質のいい葡萄が収穫できて、そこから作られるワインも上質のものになるわけ」

「……そつか。あたしの生まれた年って、ワインの出来のいい年なんだ」

ちよつと、得した気分。

「そういえば、公美さんって何年生まれ？」

「なんの気なしに聞いたら、公美さんは珍しく少しうろたえた。」

「……年上の女性に、歳を訊かないの」

とゆーことは、そろそろ自分の歳が気になる年齢ってことに違いない。

きつと、二十五歳にはなっているのだろう。四捨五入して三十になるか二十になるかは、気分的

に大きな違いって気がする。

でも、公美さんくらい綺麗な人だったら、歳なんかどうでもいいようにも思えるんだけど。

二十五歳の女性の心理は、十六歳になったばかりの女子高生にはよくわからない。

「じゃあさ、公美さんの生まれ年のワインってどうなの？」

「そうねえ。まあ、並……かな。特別いい年ってわけじゃないな」

「ふうん」

また、手の中のグラスに視線を戻す。

とても深い、赤。

今まで見てきたどんな赤よりも、深くて綺麗な色。

「コント・ジョルジュ……なんだっけ？」

「コント・ジョルジュ・ド・ヴォギユエ」

「ヴォギユエ……ね」

絶対に憶えておこう。

こんな、素敵な味のワイン。

「そして、畑の名前がボンヌ・マール」

「畑？」

「そう。ブルゴーニュの上級ワインは、葡萄酒の名前がそのワインの名前になるの」

「ボンヌ・マール……ね。これ一本が三万円以上か。すごいなあ」

「でもブルゴーニュには、もっと高いワインもたくさんあるわよ」

「もつと？ これ以上？」

「たとえばロマネ・コンティなんて、一本三十万円以上はざらね」

「三十万！」

思わず、大きな声を出してしまった。

だって、ワイン一本が三十万円なんて。

でも、ロマネ・コンティって名前は知ってる。

すごく高いワインとは聞いた覚えがあるけれど、まさかそんな値段とは。

「……で、それ、美味しいの？」

「美味しい……っていうか。あれはもう……なんて言えばいいのかな。他に喩えようのない、唯一

無二の存在だわ」

公美さんがうつとりした表情で言う。

そんなにすごいんだ。

ちよつと、飲んでみたいかも。

「……飲んでみたい？」

あたしの表情に気付いたのか、くすつと笑って訊いてくる。

ここで「うん」って言えば、三十万円をご馳走してくれるつもりなんだろうか。

「君が飲みたいって言うなら、ご馳走してあげてもいいけど。でも、さすがにロマコンとなると、

ただで……とはいかないわよ？ それでもいい？」

「う……」

ご馳走してあげてもいいけど……のところを目を輝かしたあたしだけど、すぐに思い直した。

ただではない。となると、言いたいことは想像がつく。

多分、公美さんが求める交換条件は

あたし、だろう。

もう少し正確に言うと、あたしの身体。

慌てて、ぶるぶると首を振った。

「いい、いいです。将来、宝くじでも当たったら自分で買いますから」

「なんだ、残念」

どこまで本気だったのか、公美さんがぺろっと舌を出した。

そんな話をしながら、ワインと鴨のローストに舌鼓を打って。

もちろん、その後のデザートも素晴らしい味で。

こんなに美味しいものばかり食べてしまったら、当分、コンビ二弁当なんて不味くて食べられないかも。

「で、この後どうする？」

そろそろデザートも食べ終わるといふ頃、公美さんが訊いてきた。

「え？」

「カラオケ？ ゲームセンター？ それともクラブ？ なんならホテルでも。ここのスイーツでも取る？」

「え、あ、……じゃあカラオケ」

よくよく考えてみれば、この後公美さんに付き合う義理はないんだけど。

ホテル云々って台詞にうるたえて、つい無難な選択肢を答えてしまった、というわけ。

「……でも、エッチなことしないでよね。約束してくれるんなら、もう少し付き合っただけてもいいよ」

シャンパンとワインで気持ちよく酔っていたせいか、あたしはいつもより寛大になっていた。

その後、二時間くらいカラオケとゲーセンで遊んで。

それから、また飲みに行った。

銀座の外れ。地下にある、あまり大きくない店。ドイツ料理とワインのお店だそう。ここでは、蜂蜜みたいに甘くて美味しいワインをご馳走してもらった。

トロツケンベール……とかなんとか、そんな名前だったような気がするけれど、酔いが回っていたせいでよく憶えていない。値段は、先刻のワインよりも高かった……とだけ言っておく。

そんなこんなでけっこう遅い時刻になってしまったので、帰りはタクシーで送ってもらった。

あたしは気持ちよく酔っぱらってしまっただけ。なんだか眠くなっただけ。

タクシーの中で、公美さんに寄りかかるようにしてうとうととしていた。

「遅くなっただけ、親に怒られない？」

「ん……大丈夫……」

「ずいぶん寛大なのね。普通、女子高生の親って、娘の帰りが遅いとすごく怒るものだけど」

その口ぶり。公美さんも学生時代はずいぶん怒られたんだろうか。

「ただどあたしの場合、それはあり得ない。」

「それは父親の場合でしょ。……うち、母子家庭だから」

「え、あ……ごめんなさい」

「……ううん」

公美さんが申し訳なさそうな顔になるけれど、あたしは別に気にしてはいない。

変に同情される方が嫌だ。

「離婚、したんだ。あたしが、小学生の時だったと思う」

何故か、当時のことはよく憶えていない。お父さんがどんな人だったかも。

両親の間が、なんだかギクシャクしていたことだけはなんとなく憶えてる。当時の記憶が曖昧なのは、それを見ているのが辛かったからかもしれない。

ない。

「……そう」

「お母さんは夜の仕事だし、あたしにあんまり構わないしね。遅く帰っても、怒る人はいないってわけ。あ、別に気にしなくていいよ。慣れてるし、親がない方が気楽だしね。それに、経済的にはぜんぜん困ってるわけじゃないし」

「……ひよっとして、お母さんと仲悪いの？」

「……、うん」

少し、躊躇ったけれど。

あたしは、正直に答えた。

どうしてなのか、理由はよくわからない。

あたしは、お母さんのことを好きになれないし。

向こうも、実の娘のあたしに対して、どこかよ

そよそしい印象を受ける。

女子高生と、スナック経営者。

生活の時間帯が重ならないせいで、あまり顔を
会わせる時間がないのが幸いだっただ。それとも、

そのせいで余計にうまくいかないのだろうか。

そんなことを考えているうちに、タクシーはう

ちのマンションの前に着いた。

「……よかったら、ちよっと寄ってく？ コー

ヒーくらいは出してあげるけど」

ほとんど無意識のうちに、そう口にしていた。

酔っていたから、だと思う。

公美さんを家に上げて二人きりになるなんて、

すごく危ないって認識はしているのに。

だけど。

ちよっとだけ、寂しかった。

今日は、すごく楽しい夜だったから。

その後すぐに、誰もいない家で一人きりになる

のはちよっと寂しかった。

「エッチなことしないで、約束したよね？」

だから、ちよっとくらいいいかな、って。

そう思ってしまったんだ。

* * *

ポットが湯気を立てている。

あたしは約束通り、コーヒーを淹れてあげた。

一番高い、とっておきのブルーマウンテン。
今日はさんざん高いものをご馳走になったから、
そのくらいは奮発してもいいかなって。それに、
グルメの公美さんに安物のブレンドなんて出せない。
い。

ソファに座った公美さんの前にカップを置いて、
あたしも隣にちょこんと座った。

「いい香り。コーヒー淹れるの、上手ね」

「……えへ」

褒められたのが嬉しくて、つい顔がにやけてしまふ。

「ブルーマウンテンNo.1、か」

「え？」

どうして、わかるのだろう。あたしは、どの豆を挽いたかなんて言っていないのに。

でも、公美さんはグルメだから。

お金持ちだし。

そういえば、仕事は何してる人なんだろう？
レストランで感じた疑問が、また甦る。

「あの……」

そのことを訊こうとしたところで、いきなり肩を抱かれた。

公美さんの顔が近付いてくる。

「え……エッチなことしないって、約束したじゃない！」

「キスだけ、ね？」

「でも……」

「キスは『エッチなこと』じゃないわ。美しい愛情表現よ」

歯の浮きそうな台詞を照れもせずと言う。

「もお……」

でも、まあ。

服も買ってもらったし、高い料理もごちそうになったし。

キスくらいなら、いいかなって。少なくとも、

電車の中で変なことされるのに比べれば。

酔いはまだ醒めていなくて、あたしは寛大な気持ちのままだった。

ファーストキスは今朝奪われちゃったし。だって、
たら、いいかな。減るもんじゃなし。

「ホントに、キスだけだよ」

一応、念を押す。

「うん」

唇が、触れる。

最初は軽く。そして、しっかりと押し付けられる。

あたしのセカンドキス。

柔らかな唇の感触は、とても気持ちよかった。

公美さんの舌先が、あたしの唇をくすぐっている。

その意図は理解できた。

経験したことはないけれど、知識では知っていること。

おっかなびっくり、少しだけ口を開く。

その隙間に、公美さんの舌がもぐり込んでくる。

あたしの舌に触れる。

くすぐったくて、不思議な感触だった。
「ん……」

あたしも、少しだけ舌を伸ばしてみた。

二人の舌が、密着する。

そして、絡み合う。

「ん……ふ……」

生まれて初めてのディープ・キス。

二度目のキスがもうディープキスなんて、いいのかな。

でも。

気持ち……いいや。

なんだか、うっとりとした気持ちになってしま
う。

公美さんの身体が密着してきて、体重を預けてくる。

あたしの身体が後ろに傾いていく。

気がつくと、ソファの上に押し倒されていた。

公美さんの手が、あたしの胸に触れる。

「……うそつき」

あたしは唇を離して、小さな声でささやいた。

このまま、電車でされているようなことをされるのは嫌だ。

だけど、キスの感触はもう少し味わっていたい。

そんな想いが交錯して、強く拒むことはできない。

かった。

「こうして触れるのは、キスをより気持ちよくするための調味料。キスのオプシオンだから『キスだけ』って約束は破ってないわ」

「もお……屁理屈ばかり……」

尖らせた唇に、また公美さんの唇が重なる。

でも。

気持ちいいのは事実だった。

胸が、ゆっくりと揉まれている。

すごく、優しい触れ方。

これならいいかな、なんて。ついそんな気になってしまうような。

だからあたしも、キスを楽しむことに専念することにした。

自分でも、舌を動かしてみる。

舌をいっぱい伸ばして、公美さんの口の中に入れてみる。

二人の舌は、生き物のように蠢いて、絡み合っていた。

キスが、こんなに気持ちいいものだなんて。

新発見だ。

（やっぱり、エッチだよ……）

キスって、単なる愛情表現じゃない。

こんなに気持ちいいんだもの。

これって立派な、性行為だと思う。

その証拠に、ほら。

あたし。

濡れ始めてる。

胸がドキドキして、身体が汗ばんでいる。

公美さんの手が、移動を始めていた。

胸から、もっと下の方へ。

今、あたしのお腹の上をゆっくりと撫でている。

今、おへその下へと……。

「んっ……」

スカートの上から、あの部分に指を押し付けられた。

一瞬、身体に電流が流れたような気がした。

あたしは、抵抗できずにいた。

キスすることも、触られることも、とても気持ち

よかったから。

脱がされたり、パンツの中まで触られない限り、抵抗しないでおこうって思った。

もう少し、このままでいたい。

お酒の影響もあるのか、なんだかふわふわしてすごくいい気分。

「脱がしちゃ……だめ。服の上からなら、少しくらいは……」

「わかった」

スカートの上から、指がエッチな部分を触っている。

柔らかな生地だから、パンツの上から触られているのとあまり変わらない。

「んっ……ふ……う」

声が出そうになるけれど、唇がしつかりと重ねられているので、隙間から微かな吐息が漏れるだけ。

「んっ」

スカートがまくり上げられる。

今度こそ、パンツの上から触られてしまう。

薄いナイロンの生地一枚で隔てただけ、あだし

の身体で一番敏感な部分に指が擦りつけられる。

「んっ……んんっ……」

あたしの身体が弾む。公美さんはもう一方の腕でしつかりとあたしを抱きしめている。

思うように身動きできず、声も出せない状態。

下半身から注ぎ込まれる快感は、行き場を失ってあたしの身体の中を暴れ回っている。

気が遠くなりそうだった。

公美さんの指が、ナイロンの布地を擦る音。

微かに軋むソファのスプリング。

そして、あたしの切ない吐息。

無意識のうちに脚が閉じて、公美さんの手をぎゅっと挟み込んだ。

それでも、指は動きを止めない。

前後に。

左右に。

あるいは小さな円を描くように。

大きく、小さく。

優しく、強く。

一瞬ごとに、その動き方が変わる。

あたしの胎内に、絶え間ない刺激を送り込んでくる。

「んん　っ……、んっ！」

声が出そう。

だけど、公美さんの唇が重ねられていて、出すに出せない。

これって、朝の電車の状況に似てるかも。

声が出そうなのに、出せない。

声さえ出せば、この、身体の中にどんどん溜まっていくものを一気に解き放てるような気がするのに。

それをさせてもらえない。

どんどん、どんどん。

あたしの中に詰め込まれていく快感。

このままじゃ、膨らみすぎた風船みたいに破裂しちゃう。

だめ。

そんなに激しくしちゃ。

そんなにされたら、あたし。

あたし。

もう。

イっちゃい……そ……う……

* * *

いかされてしまった。

その上、失神してしまった。

そう理解したのは、夜中に目が覚めてから。

あたしは、自分のベッドに寝ていた。

服は脱がされていて、ブラジャーも外されていて、パンツ一枚の姿で。

公美さんの姿はなかった。

がばつと起きあがって真っ先にしたことは、パンツの中を確かめることだった。

「……ふう、大丈夫」

何も、されてないらしい。

少なくとも、取り返しのつかないことは何も。

意外にも、公美さんは約束を守ってくれたようだ。

服を脱がせたのは、そのまま寝るとしわになる

から。ブラを外したのは、苦しいから……という口実で、きつと公美さんの趣味だろう。胸の上に、覚えのない小さな朱い痕があったから。

「……って、次とか今度なんて、あるわけないじゃない！」

迂闊にも、公美さんの前で気を失って無防備な姿を晒したというのに、胸のキスマーク一つで済んだのは幸いだ。

かといって、次もそれで済むという保証はない。今度こういう機会があれば、もっと気を付けなきゃいけない。

「やっぱり、お酒よね」

酔ったせいで、ついこんなことを。

危なく、取り返しのつかないことになるどころだった。

「……って、次とか今度なんて、あるわけないじゃない！」

あたしは慌てて頭を振った。

公美さんは友達でもなんでもない。

ただの痴漢。あたしを狙う変態さんなんだから。頭を振っていて、ふと目にとまったものがあつ

た。

机の上に置いてあったメモ用紙。

『今夜は楽しかった、お休みなさい。服は脱がせたけど、君が心配してるようなことはしてないから安心して。それじゃ、また月曜の朝に』

綺麗な字で、そう書いてあった。

「また月曜の朝……だつてさ。やめてよね……」

明日は日曜日。

あたしはメモ用紙をくしゃっと丸めてゴミ箱に放り投げると、シャワーを浴びることにした。

「おはよう、美鳩ちゃん」

月曜の朝。

いつものように混んだ電車。

電車に乗ると、公美さんがにこにここと笑っていた。

あたしはぶいっと横を向いて、素っ気なく言った。

「あたし、あなたと馴れ合う気はないですから」

公美さんはあたしの恋人でも友達でもない。

二人の関係は、痴漢とその被害者。そう、公美さんは犯罪者なんだから。どこに、仲良くする理由があるっていうの？

一昨日は、特別に一度だけ付き合っただけのこと。

「つれないんだから。二人きりで素敵な夜を過ごした仲なのに」

公美さんは傷つく様子もなく、むしろ楽しそうに笑っている。その表情はなんだか、反抗的な仔

猫の仕草を楽しんでいる飼い主みたいな雰囲気であたしはいっそう不機嫌になる。

「……もう、あたしに構わないでください」

「あーあ。一昨日の美鳩ちゃんは、すごく可愛かったのになー」

そう言いながら、お尻を触ってくる。

「やっ……やめ……」

「しつかりと抱き合っつて、熱いキスを交わしたのに」

「い、言わないでよ」

思い出させないでほしい。

ファーストキスを奪われたことも。自分の家のソファで抱き合っつて、いかされてしまったことも。思い出しただけで、顔が熱くなってしまう。

そして、熱くなってしまうのは顔だけじゃない。

「あの時の君、すごく感じてた。ほら、ここをこんな風にされて……」

スカートの中にもぐり込んだ手が、下着の上を滑っていく。パンツをずらして、指先が直に触れてくる。

ぴりぴりと、電流を流されたような刺激が脊髄を上っていった。

「……って、触る前からもう濡れてるのね。思い出しただけで、感じちゃった？」

耳に、息が吹きかけられる。

凶星を指されて、あたしは真っ赤になって俯いた。

「お願い……もう……やめ……て」

「いや。だって君、本気で嫌がっていないもの」

「う、嘘です」

「本当に嫌なら、どうしてこんなになっちゃうの？」

スカートの中から手が抜かれる。指が、あたしの唇に触れた。

ぬるりとした感触の中指。

リップクリームを塗るみたいに、唇全体に伸ばしていく。

「感じて、こんなに濡れちゃってる。気持ちいいんでしょ？ もっとして欲しいんでしょ？」

「……ちがう」

あたしは首を左右に振った。

確かに、公美さんに触られるのは気持ちがいい。本気で感じてしまう。

これまで二度もいかされてしまった。

公美さんの愛撫に対して、あたしの身体は無防備に反応してしまふ。

だけど。

それをして欲しいわけじゃない。

電車の中で痴漢されるのなんて嫌だ。

恋人でもなんでもない人に犯されるなんて嫌だ。

なのに公美さんの感覚では、「感じてる」「イコール「もっとして欲しい」ということらしい。

感じやすい自分の身体が恨めしくなる。

(触られても、感じなきやいいんだよなあ……)

公美さんは男性の痴漢と違って、触ることよりもその時のあたしの反応を楽しんでいるフシがある。

なんの反応もなければ面白くなくて、そのうちやめてくれるのではないだろうか。

でも……。

「んっ……くう、ん……」

現実にはむしろその逆で、あたしの身体はどんどん感じやすくなっていくみたい。

本当にあたしが感じやすくなっていくからなのか。公美さんが、あたしの感じるところを見抜いているからなのか。それとも、その両方なのか。

また今日も、電車を降りたらパンツを替えなきゃならないような状態になってしまっている。

「は……あっ……んっうんっ」

「どう、気持ちいいでしょ？ もっとして欲しいでしょ？」

あたしは応えずに、涙目で公美さんを睨んだ。手を伸ばして、スカートの中にもぐり込んでいる公美さんの手の、甲の部分をぎゅゅとつねる。

「あ、そーゆーことするんだ？」

全然堪えてない。

そりゃあ、本気で力を入れたわけじゃないけれど。それでも、あたし意思表示にはなっただけなのに。

「そーゆーことすると墓穴を掘るって、どうして

わからないのかしらね？」

「っっ！……ひっ……いいっ！」

つねり返されちゃった。

それも、あたしがつねっているその手で。

つまり。

公美さんはよりによって、あたしの一番敏感な部分、あの小さな突起に爪を立てているのだ。

「い……たいっ……痛いっ……やめ……」

針で刺されたみたいで鋭い痛み。

いつもとは違った理由で、大声を上げそうだった。

あたしは公美さんの手を放す。

なのに公美さんは、あたしをつねり続けている。

「やめっ……お願い、痛い……痛い……」

「許して欲しいなら、言うことがあるんじゃない？」

公美さんは意地悪く言う。

「……ごめん、なさい」

仕方なく、あたしは謝った。

なんだか悔しくて、また涙が出てきた。

謝ったのに、それでも公美さんはあたしをつねり続けている。

「お願い……許して……」

「どうぞ、しようかなあ？」

「お願い……ごめんなさい……」

これ以上されたら、クリトリスが干切れちゃう。

「痛いことと気持ちいいこと、どっちがいい？」

そりゃあ、痛いよりは気持ちいい方がいいけれど。

でも。

「……選択肢は、その二つだけ？」

「そう。選ぶのは君よ」

ずるい。

公美さんってばずるい。

あたしの口から、言わせようとしてる。

絶対に言いたくない台詞を。

だけど、もう限界。

痛くて痛くて。

このままじゃ本当に、大声で泣き出しちゃう。

あたしは蚊の泣くような声で言った。

「……気持ち……いい、方」

「え？ 聞こえなかつたなあ？」

公美さんは白々しく言っつて、指先にさらに力を込める。

「いつ！ や……っ。き、気持ちいいこと……して……」

屈辱的なその言葉を口にして、ようやく公美さんはあたしを放してくれた。ふうつと息を吐き出す。

「そんな可愛い顔で頼まれちゃあ、してあげるしかないわね。君のリクエストだからね」

「やつ、ああ……」

パンツの中の指が、優しく動き始める。

敏感で繊細な部分を、慈しむように撫でてくれる。

つねられた痛みは急速に薄れていつて。

でもやつぱり、あたしは声を抑えるのに苦労した。

これでもか、というくらいに丁寧に隅から隅まで撫でまわされて。

ようやく解放されて電車を降りる頃には、頭の中は真っ白になって。

また、ホームのベンチにしばらく座り込んで。

十分以上経ってようやく立ち上がると、下着を替えるために、駅のトイレへ向かってふらふらと歩き出した。

「ねえ、ハト。なにか悩みでもあるの?」

休み時間に、聖さんが訊いてきた。

あたしのことを心配しているような口振りだけど、いつものように背後から抱きつきながらではまったく説得力はない。

「……どうして?」

あたしは訊き返した。

「なんか、最近さあ……。ぼーっとして、なにか考え込んでるといっつか。特に午前中なんて、心ここにあらずって感じで。元気ないこと多いよ」

「そう、かな……?」

「土曜日、カラオケに行った時も。ハト、先に一人で帰ったじゃない? あの時、なんだかすごく悩んでるような、思いつめてるような表情してた」

さすが聖さん、よく見ている。

だけど、あたしの悩みは聖さんに相談できる類のものじゃない。

毎朝のように痴漢に襲われる、なんて。

しかもそれが、すごく綺麗な女の人だ、なんて。

相談できない一番の理由は、多分、公美さんの行為にあたしが感じてしまっているためだった。

痴漢の愛撫で感じてしまう淫乱女 そんな風に思われたくない。

だけど、感じてしまう原因はあたしではなくて、公美さんの側にあるはずだった。

あたしが、特別感じやすい体質ということはないはず。男の痴漢だったらなにも感じない……。どころか、具合が悪くなるくらいなんだから。

きつと、公美さんが上手すぎるのだ。

だけどこんなこと、聖さんに相談してもどうにかなるものじゃない。

かといつて、いつまでもこのままでいいと思っ
ているわけじゃないけれど。

「ねえ、ハト? 悩みがあるなら相談してよ。友達でしょ」

「悩み、ねえ……誰かさんに、毎日触られることかな」

あたしは冗談めかして言った。

もちろん「誰かさん」は公美さんなんだけど、半分は聖さんに対する皮肉。

「冗談のつもりで言ったんだけど、聖さんはぱつとあたしから離れると、急に表情を曇らせた。」

「ごめん……本気で嫌だった？」

「あ、うそうそ」

聖さんが本当に申し訳なさそうな顔をしているので、慌ててフォローする。

「冗談。気にしないで。聖さんのは、単なるスキンシップだからね。別に嫌じゃないよ」

効果てきめん。それだけで聖さんの顔がぱあつと明るくなる。

あたしはさらに慌てて付け足した。

「……積極的に、して欲しいと思ってるわけじゃないけど」

「一応釘を刺しておかないと、聖さんの「スキンシップ」もどんどんエスカレートしてしまうから。」

「じゃあ……。また、抱きついてもいい？」

「……って、あらたまつて訊かれると困るなあ」

断るのも悪いし。

かといって口に出してそれを許してしまうと、また「聖さんとハトはできている」なんて噂が流れてしまう。

しかし聖さんにとって、「拒否しない」ことはイコール「OK」らしい。このあたりの感性、少し公美さんに似てるかもしれない。

また、あたしに抱きついてくる。

だけど正直なところ、あたしも、聖さんと密着しているのは好きだった。

温もりが心地よくて。

誰かに抱きしめられていると、すごく安心できる。

こつやつて聖さんと寄り添っているのは、気持ちいい。

公美さんに触られるような、濡れてしまうような快感とは違うけれど。

本当に、すごく心地よい。

こつした「スキンシップ」は嫌いじゃない。

公美さんの場合、ここで濡れちゃうからいけない。

いんだろう。

あれはもう、条件反射みたいなものだ。

こうして聖さんに触られているのも気持ちいいのは確かだけど、それは性的な快感じゃない。

公美さん相手の場合、触られて感じてしまうから、反応してしまうから、なおさら相手を悦ばせてしまうのだろう。

そろそろ、なにか対策を練る必要があった。

もちろん、朝の電車を変えれば公美さんとは会わないんだけど。

だけどそれでは逃げたみたいで、あたしのプライドが許さない。

公美さんと隣り合わせになっても、向こうは手を出してこない、手を出せない。そうやって初めて、公美さんに勝ったという気がする。

なにか、いい手はないだろうか。

一生懸命に頭を働かせていると、聖さんが話題を変えてきた。

「ところでハト。アレ、持ってる？」

「え？ あ、うん」

女の子同士でのこうした会話で「アレ」といえば指すものは決まっている。

そう、生理用品。

「ひとつくれない？ 予定より三日も早くはじまつちゃってさ。ハトが来る前に真澄にもらったんだけど、予備がないとなんか不安だね」

「聖さんってば、いつもそう。女の子なら常備しなよね。変なところでずぼらなだから」

一応文句は言いながらも、あたしは愛用の「超薄型、横漏れ防止タイプ」を一つ渡した。

「ハトちゃんの手からナプキンかー。使ってて感じちゃったらどうしよう」

聖さんってば、掌に乗せたナプキンに頬ずりして、とんでもないことを言う。

そして、真っ赤になっているあたしの反応を楽しんでいる。

「そんなふざけたこと言うならあげない」

聖さんの手からナプキンを取り返そうとする。

「あはは、うそうそ」

その手を高く上げて聖さんが笑う。身長差が十

五センチ以上あるから、手を上げて背伸びをされたら絶対に届かない。

それでも、あたしも背伸びをしてじたばたと暴れて。

そういう反応が、余計に聖さんを喜ばせてしまうとはわかってるんだけど。

けどこのことがきっかけで公美さんへのいい対策を思いついたのだから、世の中なになが役に立つかわかったものではない。

明日は、公美さんをつかりさせてやろう。

あたしは、心の中で拳を握っていた。

翌朝、電車に乗るとやっぱり公美さんがいた。
今日は、逃げたりしない。

自分から公美さんの傍へ行った。

そのことが嬉しいのか、公美さんはにこにここと笑っていた。

「おはよう、美鳩ちゃん。相変わらず可愛いね」

「……おはようございます」

あたしも、にやっと笑って見せた。「触れるものなら触ってみなさい」という、挑発的な笑み。

もちろん、公美さんはすぐに身体を密着させて、手をスカートの中にもぐり込ませてくる。

そして

「ん……？」

怪訝そうな表情を浮かべた。

感触を確かめるように、二度、三度、指先を動かして。

でも、あたしはまったく感じない。

平然と、公美さんが戸惑っている様子を観察す

ることができた。

「……なるほど。考えたわね」

「そうそう毎日、好きに触らせはしませんよー、だ」

あたしは苦笑している公美さんに向かって、小さく舌を出した。

タネを明かすと。

今日のあたしは、生理用ショーツにナプキン二枚重ねという装備なのだ。

もちろん今日がアノ日というわけではなくて、公美さん対策。

こうしておけばそう簡単に指は入れられないし、ショーツの上から触られても感じたりしない。

しばらくもぞもぞと指を動かしていた公美さんも、諦めたのか手を引つ込めた。

(……よし、勝った)

思わず、心の中でガッツポーズ。

「でもさあ……」

公美さんが小さく肩をすくめる。

「こーゆーことすると墓穴を掘るって、昨日言わ

なかった？」

「ふーんだ。そんな負け惜しみ」

「……だと思う？」

「え……？」

単なる強がりとも思えない、自信ありげな笑み。

あたしは急に不安になった。公美さんってば、

何かとんでもないことを考えているのでは。

また、手がスカートの中に入ってくる。

脇の部分から、指を入れようとしている。だけ

ど無駄なこと。この状態から指を奥まで入れるのは難しいし、少しくらいもぐり込ませるところで

思うようには動かせまい。

だけど。

そこに触れたものは、公美さんの指とは違った
感触だった。

もつと硬い、つるりとしたもの。

「え、……んっ」

それが、パンツの中に押し込まれた。

親指の先、よりは一回り大きいだろう。なんとなく丸っこい形状の、なにか。

二枚重ねのナプキンに押さえつけられて、あたしのあの部分に強く押し付けられている。

「やっ……なに、これ」

「いいもの、よ」

「ひっ、……っ？」

ヴーン

突然、『それ』が小刻みな振動を始めた。

あたしの、一番敏感な部分に触れた状態で。

「やっ……やだっ、何してるの？」

「なにも」

公美さんはあたしの前で両手を広げてみせる。

なにも持っていない。

じゃあ、下着の中にあるこれは？

「ローターって、知ってる？」

あたしの耳元でそつとささやく。

「ロー……タ？」

「オ、ト、ナ、の、お、も、ちゃ」

「っ！」

公美さんは一音一音区切るように、ゆっくりとささやいた。

あたしも、なにが起こったのか理解した。

知識では知っている。それは、中に小さなモーターが入った、プラスチック製のカプセル。

スイッチを入れると小刻みに振動して、エッチな部分に当てると気持ちがいい、という代物だ。

それが、下着の中にある。

その事実を認識したところで、背中を冷や汗が流れ落ちた。なにしろ初めての体験なのだ。これからなにが起こるのか、まったく予想できない。

ヴィイーン……

気のせいか、振動が少しずつ強くなっていくみたい。

喉の奥から、声にならない嗚咽が漏れた。

指で触られるのとは、まったく違う。ぶるぶると震える振動が、身体の奥まで伝わってくる。

「ひっ……くっ、ん……んっ！」

ヴィイッ！

間違いない。振動が、どんどん激しくなっている。神経を通して、骨盤の中まで浸透していくみたいだ。

脚から力が抜けていく。

膝ががくがくと震えた。

「どう？ 最近、リモコンで離れたところから操作できる機種もあるのよね」

「っ、ひっ……い……やっ」

弱く、強く。

激しく、優しく。

ローターの振動はうねるように変化する。地震で液状化現象を起こす地盤のように、あたしの下半身がとろけていく。

「や……だっ、あっ……取っ……て」

自力で立っているのが辛くなって、公美さんに掴まった。

お尻をくねるように動かしても、二枚重ねナプキンで押さえ込まれたローターは、まったくずれない。一番感じる部分にぴったりと密着して、あたしの胎内に非情な振動を送り続けている。

「や、だ……やあ……お願い……」

これを取ってくれるのは、公美さんしかない。

あたしは継りついた。

「やめて……もう……、や……あ……」

「やめてって言われて、私がやめると思う？」

思わない。

公美さんの性格はよくわかっている。あたしが嫌がること、泣くようなことが大好きなんだ。

だけど、無駄だとはわかっていても、継らずにはいられない。

絶え間ない振動のためか、それがもたらす快感のためか、下半身が痺れてくる。人混みの中で公美さんに支えられているから、辛うじて立っていられるのだ。

単調なモーターの振動であれば、いずれ慣れてしまったかもしれない。だけど公美さんの操作で微妙に変化するその刺激は、彼女の指がもたらすのと同様、抗うことのできない快楽をあたしの中に注ぎ込んでくる。

しかも。

公美さんは、あたしを焦らして遊んでいた。

どんどん気持ちが高ぶって行って、あとひと息

でイキそうなところになると、急にスイッチを切ってしまうのだ。

そして、ふうつと息をつくともた動き始める。

終わりのない拷問だった。

パンツの中は、今日の重装備でなければ太股まで流れ出すのではないかと思うほどに濡れている。気が狂いそうだ。

くしゃみが出そうでない、あのむずむずとした感覚に似ている。それを何百倍にも強くしたものの、とでもいえばいいだろうか。

早く、駅に着いてほしい。

もう、間もなくのはずだ。

ほら。

駅名を告げるアナウンス。

見慣れたホーム。

少しでも気を紛らわせようと、あたしは窓の外の風景に意識を向けた。

電車が止まる。

ドアが開く。

助かった、と思った。これで解放される、と。

ところが。

ホームへ向かって一步踏み出そうとしたところで、ぐらりと身体が傾いた。

膝に力が入らなくて、体重を支えられなかった。転んでしまう、と思った瞬間、公美さんの腕があたしを掴まえた。転ばないように、身体を支えてくれる。

「ほら、お座りなさい」

促されるままに、ホームのベンチに腰を下ろすと同時に、あたしは小さな悲鳴を上げた。

パンツの中には、ローターが入ったまま。

そのままの状態で硬いベンチに座るとどうなるか。ローター初体験のあたしは知る由もなかったのだ。

ローターはまだ動きつばなしで、座ったためにそれがぎゅうつと押し付けられる。

同時に、公美さんが振動を最強にした。

「いいっ！ やっあ、は……っ」

痛いほどの刺激が、脊髄をびりびりと走り抜けていく。

立たなきゃ、と思ってもそれができなかった。

「と、取って……取って！ お願い、お願い！」
狼狽えるあたしの様子に、くみさんが可笑しそうに微笑んだ。

あたしの懇願を無視して、わざとゆっくりした動作で、近くの自販機で飲み物を買ったりしている。

「取ってあげてもいいけど、ここで？ スカート
まくり上げてパンツ下ろすの？」

「う……」

考えてみれば、そんなことできるわけがない。
下で何をしていてもわからない、すし詰めの中
とは違うのだ。

「それに、さ……」

隣に座った公美さんが、耳に口を寄せてくる。
息が吹きかけられる。

「それよりもまず、ちゃんと最後までイキたい
んじゃない？」

「あ、……」

はつとして、公美さんの顔を見た。

確かに、その通りだった。今すぐこの振動が収まったとしても、あたしの身体は、もうどうしようもないくらいに火照っている。

このまま学校へ行ったら　このふらつく脚で無事に行き着けるかどうかも疑問だが　また、シャワー室で自慰に耽ることになりそうだった。

「いかせてあげようか？　トイレの中なら、人目に付かないでしょ」

「え……でも」

このままじゃ我慢できない。だからといって、公美さんに降参するのもどうだろう。

でも。

だけど……。

身体と理性が、それぞれの主張を訴える。

迷うあたしに決心を促すように、ローターの振動が激しくなった。

身体が、びくつと震える。

その最後の一押しで、臨界点を超えてしまった。「いかせて……ちゃんと……、最後まで」

小さくうなずいて、あたしはその台詞を絞り出

す。
悔しくて、涙が滲んできた。

駅の女子トイレは、一番手前の個室がふさがっている以外、他に誰もいなかった。

公美さんは素速い動きで、あたしを一番奥の個室に連れ込んだ。

ドアが閉められ、鍵がかけられる。

そこは洋式だったので、公美さんは便座のふたを下ろし、その上に自分とあたしの鞆を置いた。

「声、出しちゃだめよ。他に人がいるみたいだから」

あたしはこくこくとうなずいて、縋るように公美さんを見つめた。この、疼いて堪らない下半身を、早くなんとかしてほしかった。

「まあ、そんなに目を潤ませちゃって。なんて可愛いのに！」

ぎゅう、と抱きしめられる。

それだけで気持ちよかった。

唇が重ねられる。

あたしは自分から口を開いて、公美さんの口中

に舌を差し入れた。

二人の舌が絡み合う。

あたしは貪るように舌を動かした。下半身で振動している、あと一息のところまで達することのできない中途半端な快感を、ディープキスで得られる感覚で補おうとするかのように。

「ん……ふ……うん……んん」

背中に戻された手がゆっくりと動いて、腰からお尻にかけてを撫でている。

あたしは、公美さんの上着をぎゅっと掴んだ。

「ねえ……はやく……なんとかして……」

もう、我慢できない。

いつまでもこのままでいたら、おかしくなってしまう。

「いいわよ。じゃあ、まず……」

不意に、手首を掴まれた。両手首が交差するように重ねられ、公美さんが片手でそれを押さえている。

「……え？」

公美さんのもう一方の手は、あたしの、制服の

ブラウスに結ばれたリボンをほどこいていた。

ほどくと、短めのネクタイくらい長さがある
紅いリボン。状況を把握するより先に、公美さん
は驚くほどの手早さで、あたしの手首を縛ってし
まった。突然のことに、なんのリアクションもで
きない。

「え……と、あの……？」

「君が、逃げないようにね」

そう言うと、公美さんはあたしの腕を上へ上げ
させた。万歳するような格好で、縛った手首が、
上着や鞆を掛けるためのフックに引っかけられる。
それは、平均よりも小柄なあたしには、辛い姿
勢だった。頑張つてつま先立ちにならなければ、
脚が床に届かない。

「や……だ、こんなの……」

「これで、君は抵抗できない。思う存分、楽しむ
るってわけ」

「う……」

涙目で、公美さんを睨んだ。

こんな、恥ずかしい格好。

駅のトイレで。

手を縛られて。

え……SMプレイみたいに吊されたりして。

この変態さん相手に「ちゃんといかせて」なん
て頼んでしまった自分の愚かさを悔やんだところ
で、今となつては後の祭りだった。

「やだ、こんな……痛いよ」

「心配しないで。これから、うんと気持ちよくし
てあげるから」

公美さんはなだめるように言つて、ちゅっとキ
スをする。それから、あたしのブラウスのボタン
に手を掛けた。

上から順に。

ひとつずつ。

ボタンが外されていく。

胸が、露わにされていく。

鎖骨のあたりに唇を押し付けた体勢で、公美さ
んはボタンをひとつ残らず外してしまつた。

「や……だ……」

恥ずかしさのあまり、あたしは顔を背けた。

これまでもささんごん恥ずかしいことはされているが、服を脱がされて裸を見られるというのは、電車の中で触られるのとはまた違った恥ずかしさがある。

「肌、きれいね。すべすべしてる」

公美さんの両手が、お腹の上に触れた。そのままゆっくりと、背中の方へと回っていく。

「あ、や……」

その意図に気付いて、あたしは身体をよじらせた。

もちろん、そんなことでは手の動きを封じることができない。

背中に回された手が、こそこそと動いている。

次の瞬間、胸のあたりがふうっと楽になった。

ブラジャーのホックを外されたのだ。

前に戻ってきた公美さんの手が、ブラのカップを上へずらす。

ブラウスのボタンを外されただけでも恥ずかしいのに。

胸を外気に晒されて、あたしはぎゅっと目を閉

じた。

公美さんの手が、あたしの胸を柔らかく包み込む。

「君の胸って素敵よね。身体は華奢なのにすごく大きいし、それに形がきれい。張りがあって、ブラを外してもぜんぜん形が崩れないんだもの。乳首も小さくて、きれいなピンク色で」

「やあ……やめ、て……」

パン生地かなにかのように、乳房をこね回される。聖さんにおふざけで揉まれたりしたことはあるけれど、こんなにじっくりと、しかも直に触れるのは初めてだった。

「見るのは二度目だけど、こうして触るのは初めてね。思った通り、手触りも最高」

感触を確かめるかのように、二度、三度と強く揉まれる。あたしの胸はゴムボールのように形を変えた。

「や、だ……やあ……」

口でいくらやめてと言っても、フックに吊されて両腕を上げた今の体勢では、あたしの胸はまっ

たく無防備に晒されている。公美さんは両手で胸をこねるように揉みながら、その谷間にキスをした。

「ん……つぶ……うん」

胸の上を、舌が滑っていく感触。無意識のうち
に、唇の隙間から息が漏れた。

公美さんの唇と舌が、あたしの胸を上っていく。

「あつ！ んう……」

唇が、乳首に触れた。

そこは硬くなっていて、微かな接触到予想以上の強い刺激を感じた。

「だっ……め……」

口の中に含まれて、「ちゅう」と音を立てて吸われて。

下半身を触れられるのと同じくらい、敏感に反応してしまふ。胸が、こんなに感じる部分だとは知らなかった。

「やあ……だ、めえ……あ、あん……」

強く吸われて。

一瞬口が離れたと思ったら、今度は唇で軽く噛

まれる。さらに、舌先が乳首をくすぐっている。その間も公美さんの手は、強く、優しく、胸を揉み続けている。

やがて片手がゆっくりと下へ滑りはじめ、スカートをたくし上げたところで、あたしはぶんぶん頭を振った。

「だ……め……そこは……。声、出ちゃ……」

「そお？」

公美さんが目を細める。

あ、やだ。

また、あたしを苛めようとしている目。

「ひいっ！ ……い……やあ……」

いきなり、あの部分を強く押された。

ローターがクリトリスを刺激している、その上から。

上げかけた悲鳴をなんとか呑み込み、血が滲むほどに強く唇を噛んで堪える。

悲鳴の代わりにこぼれた涙が、頬を伝っていく。公美さんが微かな笑い声を立てた。

「お、頑張るじゃない」

「だ、って……」

「よしよし。お姉さんがなんとかしてあげましょ
う」

あたしの頭を撫でてくれてから、公美さんはパ
ンツに手をかけた。

おしゃれとは無縁な生理用ショーツ。

ゆっくりと下ろされていく。

押し付けられていたローターが離れて、あたし
はふうつと息をついた。

ただど安堵と同時に、一抹の寂寥を感じたのも
事実だ。

片方ずつ、足を上げさせられて、完全にパンツ
を脱がされてしまう。

続いて、スカートも同じように。

公美さんが見ている前で、下半身はソックスと
靴以外なにも着けていない状態にさせられる。

ブラウスの前もはだけてしまつて、ブラのホッ
クも外されて、もう全裸と大差ない格好だ。

あたしは顔を背けた。

公美さんの顔を見られなかった。

女の子の一番恥ずかしい部分を露わにされて、
ただど両手を縛られて隠すこともできない。

六月の陽気の中だというのに、下半身が妙に涼
しく感じた。

「そういえば、見るのは初めてね。ん、可愛い
可愛い」

あたしの前にしゃがんで、公美さんは楽しそうに
笑っている。

「やつ……見ないでえ……」

「ヘアは薄いんだね。おかげでよく見える。やつ
ぱり、きれいなピンク色。あーあ、こんなに濡れ
ちやつて……」

「やあ……やめて」

あたしが嫌がるのをわかっていて、その部分を
克明に描写していく。

公美さんにとっては、そこを見ることよりも、
あたしを恥ずかしがらせることの方が楽しいのだ
ろう。

「あ、これがないと寂しいよね」

「つ、やつ……くっん……」

また、小刻みな振動が伝わってくる。

公美さんの指がローターをつまみ上げて、あたしに当てている。

一番感じる部分を探るように、ゆっくりと動かしていく。

あたしはぶるぶると身もだえした。

「やつ、んっ！　だ、めえ……ホントに、声……でちゃう」

駅のトイレなんて、いつ人が来るかわからないし、実際、今も利用者がいる。

万が一にも、エッチな声を聞かれたりしたら大変だ。

「そお？　じゃあ……」
にやり、と。

公美さんが意地の悪い笑みを浮かべる。

また、あたしが嫌がることを企んでいる……そう思ったのと同時に、口に、なにか布のようなものが当てられた。そのまま、中に押し込まれる。

それが、つい先刻脱がされたばかりの生理用ショーツだと気付くには、数秒を要した。

「ん……う……むう……」

抗うあたしの口をこじ開けて、ぐいぐいとショーツが押し込まれる。

「苦しい？　自業自得ね。こんな無粋なものの穿いてくるからいけないのよ。もっとセクシーな、小さいパンツだったら楽だったのに」

すごい、勝手な言い分。

だけど抵抗のしようもない。あたしにできるのは、口から布きれをはみ出させて、むーむーと唸ることだけ。

口に異物を押し込まれる苦しさ、また新たな涙が滲んできた。

「さあて、声も出せなくなっただとところで、たっぷり楽しませてもらいましょうか」

公美さんが、また足元にしゃがみ込んだ。

手あの部分を広げて、ローターを押し当ててくる。割れ目に沿って、ゆっくりと前後に滑らせていく。

あたしの身体が、びくっびくっとなんげか震える。

動くと、縛られた手首が締め付けられて痛いんだけれど、身体が勝手に反応してしまう。

「んっ……んん　っ！」

「気持ちいい？　って訊くまでもないようね。もう大洪水。溢れて流れ出してるわよ」

そう言っつて、溢れ出た蜜を手で周囲に塗り広げていく。お尻の穴の周囲は、特に重点的に。

「こっちも、可愛がってあげようか？」

「んん　っ、ん　」

あたしは首をぶんぶんと左右に振ったけれど。

嫌がれば嫌がるほど公美さんを悦ばせてしまう。

公美さんは指先で、お尻の穴をこちょこちょとくすぐつて。

ゆっくりと、しかし止まることなく侵入してくる。

「んっ……んんっ……うん……」

また、お尻を犯されてしまった。

考えようによつては、あそこを弄ばれるよりも恥ずかしいことかもしれない。

まだ、前はバージンなのに。

お尻は、何度も何度も指を入れてしまつて。しかも。

すごく恥ずかしいことなのに、あたしは、それで感じはじめていた。

固くすばまつた筋肉を無理やり広げられる痛み。異物を挿入される苦しみ。

だけど、ぬるぬるの指でお尻を弄ばれるのは、確かに気持ちのいいことだった。

公美さんの長い指を根本まで埋め込まれて、奇妙な充実感すら覚えていた。

「こっちも、慣れてきたみたいだね。じゃあ、もつといいことを……」

指が引き抜かれる。

少し間があつて、またお尻に触れるものがあった。

指よりも硬い。それに、もう少し太いみたい。

「実は、もう一個あつたりして」

公美さんの言葉と同時に、お尻に振動が伝わってきた。

ヴーンという低い呻りが、二つに増える。

「うんん　っっ！　んっ、んっ……」

前後から加えられる小刻みな振動。

二つの波が身体の中心でぶつかり合って弾けた。意志に反して、お尻の穴が強引に広げられていく。

ローターが振動しながら、あたしの中に入ってくる。

又ルリ……

一瞬の痛みの後、それはあっけないくらい簡単にあたしの胎内に収まってしまった。

奇妙な既視感^{デジャヴ}。

すぐに、その正体に気がついた。

小さな子供の頃、熱を出すと解熱用の座薬をお尻から入れられたものだ。あの感覚に少し似ている。ただ、いま入ってきたものは座薬よりも何倍も大きいけれど。

お尻の穴はすっかりすぼまってしまった。なにが軽く触れるものがあるのは、電源コードだろうか。

そして、お尻の出口近くにある、わずかな異物

感。そこから、じーんと痺れるような振動が骨盤に伝わってくる。

「ん……ん……ん……」

「どう？　これって、けっこう病みつきになると思うけど」

「んん　」

あたしは首を振った。

認めたくなかった。

だけど、確かに。

羞恥心さえなければ、これって、けっこういいかもしれない。

身体の中から刺激が加えられる。これって、外から触られるのとはまた違った感覚だ。

じーんと。

身体の、奥の奥まで伝わってくる。

くすぐったいような。

むず痒いような。

それだけでいけるような、強い刺激ではない。だからこそ、いつまでも味わっていたいと思ってしまう。

ヴィー、ヴィー

あたしの身体の中で震えているのは小さなカプセルだけど、その振動は力強くて、骨の髄まで、内臓の中まで伝わって来るみたい。

「ん……んん……」

脚から、力が抜けていってしまふ。吊された手首や肩に体重がかかり、また痛みが走る。でも、しっかりと立つことなんてできない。

「さて、じゃあこっちにも……」

「んっ！ う……ん」

また、クリトリスにロータが強く押し当てられる。それに続く、奇妙な感触は……？

あたしが首を傾げていると、公美さんが立ち上がった。

手には、なにも持っていない。なのに、クリトリスにはローターが押し付けられたまま。

それで気がついた。絆創膏かなにかで貼り付けられたのだ、と。

公美さんの両手が、あたしの胸を包み込んだ。

「君の素敵な胸を、もつと堪能したくてね」

大きな円を描くように胸をこね回しながら、その先端に口づけする。

強く、吸う。

軽く、噛む。

舌先でくすぐる。

絶え間なく加えられる刺激にあたしの胸は固く張りつめ、先端はより敏感になってしまふ。

右の胸をたっぷりと弄んでから、左へ。

左の胸を飽きるほど髑つてから、また右へ。

あたしの胸は、公美さんの唾液でべとべとにされてしまふ。

きつと、キスマークもつけられているに違いない。今日は体育があるのに、どうしよう。

「んんっ……んっ……うんっ！」

乳首を強く吸われるたびに、鋭い快感が身体を貫く。

胸がこんなに感じるなんて、初めてだった。

息つく暇もなく加えられる陵辱に、あたしの身体はこれ以上はないってくらいに反応してしまっている。

汗とか。

エッチな蜜とか。

涙とか。

もう、身体中べとべとになっている。

口を塞がれていなければ、きつと涎も垂らしてしまっていたと思う。

内股を滴る露は、もう膝のあたりにまで達している。

それでもまだ、あたしは達してはいなかった。

本当にあと一步、いや半歩のところで、頂に達することは許されずにいた。

公美さんの、そんなぎりぎりの線の見極めはすごいと思うけれど、されている当人にとっては感心している余裕などない。

もっと、感じさせてほしい。

ちゃんと、いかせてほしい。

あたしの下半身は、いやらしい涎を垂れ流して、そうおねだりしている。

そんな状態が、どのくらい続いたのだろう。

きつと、普段電車に乗っているよりもずっと長

い時間のはず。

これまで経験したことのない、長時間に渡る愛撫。

しかも、手と、舌と、そして二つのローターで同時に攻められてしまって。

特に、初体験のローターが問題だった。

クリトリスに当たるように貼り付けられて。

お尻の中に入れられて。

身体の中へと浸透する長時間の振動は、思わぬ副作用をもたらしていた。

「っ！」

絶え間なく与えられる快感に身を委ねて、頭がぼーっとしていて。

気付いた時には、もう、かなりまずい状況に陥っていた。

「ん、んんっ、んん……」

そのことを公美さんに訴えようにも、声が出せない。いくら呻き声を上げたところで、感じているんだとしか思ってくれない。

あたしは不自由な体勢のまま、じたばたと暴れ

て非常事態であることを訴える。

「……………どうしたの？」

様子がおかしいことに気付いた公美さんが、あたしの顔を覗き込む。あたしはせっぱ詰まった様子で呻りながら、目で、意志を伝えようとする。

「なにか、あった？」

ようやく、口の中に詰め込まれた布を取ってくれる。あたしは大きく口を開けて、荒い呼吸を繰り返した。

「どうしたの？ 手、痛いなの？」

心配した様子で訊いてくる。あたしは無言で首を振った。

声を出せるようになって、よくよく考えてみれば、それは口に出すのがすごく恥ずかしいことだった。

だけど。

我慢も、もう限界が近い。

「あつ……………の……………」

自然と、極端な内股になって、腰が引けたような体勢になってしまう。脚が、腰が、小刻みに震

えている。

「美鳩ちゃん？」

「……………これ、ほどいて」

あたしはちらりと上を見た。手首を縛ってドアのフックに引っかけられている、あたしの制服のタイ。

「それはだめ。まだ、終わってないもの」

「でも、……………あの……………。お願い、ちょっとだけ……………」

「だーめ。どうしたの、急に？」

「あの……………だから……………」

ああ、もうだめ。

もう、限界。

「……………おしっこ……………したいの……………」

仕方なく、あたしは正直に白状した。

家を出る前にちゃんと用を足してきているのに、ローターの振動が腎臓や膀胱を変に刺激したらしく、もう本当に限界ぎりぎりの状態だった。

「ねえ……………お願い……………」

「あはん」

公美さんは納得顔で微笑んだ。だから、少なくとも用を足す間はほどこいてくれるものだと思った。このままでは、そのシーンを見られることになってしまうけれど、背に腹は替えられない。だけど。

「そのまま、お漏らししちゃえば？」
さらっと。

公美さんはそう言った。

腕を組んで、トイレの壁に寄りかかる。

「君が、そうやって恥じらいの表情を浮かべてお漏らしするシーンってのも、面白そうね。ぜひ、見物させてちょうだい」

「そんな……！」

あたしは絶句した。

できるわけがない。

高校生にもなつて、お漏らしするだなんて。

それも、駅のトイレなんかで。

「パンツもスカートも脱いでるんだし、汚れる心配はないでしょ」

そーゆー問題じゃない。……って言っても、無

駄なんだろう。

「だけど、お漏らしだけはいや。それだけは、本当に、超えちゃいけない一線って気がする。」

「……お願い……お願いです……」

「そんなこと言われてもなあ。ねえ？」

「つつ！」

いきなり、ローターの振動が激しくなった。公美さんが、手の中にあるリモコンのスイッチを弄んでいる。

あたしは短い悲鳴を上げた。

ただでさえ限界ぎりぎりなのに、これ以上刺激を与えられたら。

「う……や……あ……うあ……」

歯を食いしばって、内股に精一杯力を込める。

「だけでももう手遅れっていうか、焼け石に水っていうか。」

限界は、刻一刻と迫ってきている。もう、最後の秒読みが始まっている。

「お願い！……お願いします！お願いだから……」

ちゃんと、トイレでさせてほしい。

だけど公美さんってば、悶えているあたしの様子を楽しそうに見ているだけ。

鞆から、先刻ホームの自販機で買った食物繊維入りドリンクの小瓶を取り出して、わざとゆっくりと飲みながら、あたしの泣き顔を観察している。「公美さあん……ひどいよ、こんなの……お願い、お願いっ！」

「もう、本当に我慢できない？」

ドリンクを飲み干した公美さんが、ゆっくりと顔を寄せてくる。

「もう、漏らしちゃいそう？」

あたしの耳を軽く噛みながら訊いてくる。手が、震えているあの部分に触れてくる。

「だめっ！　だめえっ、お願い……」

意識して、おしっこが出る部分を触っている。

指先で小さな円を描いて、マッサージするように。まるで、母犬が仔犬のお尻を舐めて排泄を促すように。

「やっ……だ、め……」

「もう、出ちゃう？　じゃあ……」

公美さんは、あたしの顔の前でからになったビンを振った。

「この中にしなさい」

「……え？」

「ほら」

あそこに、硬いビンが振れる感触。

「こっして持っててあげるから、この中にしなさい」

「や……っ！　そんな……ヤダ！」

「じゃあ、お漏らしして床をびしょ濡れにする？」

「やだっ！」

「なら、言うことききなさい」

「だって……」

そんな。

立ったまま、ビンの中にしろだなんて。

でも、公美さんは絶対に、この手をほどいてくれそうにない。

このままトイレの床を汚すか。

ビンの中にするか。

この二つしか選択肢がない。

だったら……。

「……どうしても？」

「どうしても。床を汚すか、ビンの中にするか。

どっちにする？」

催促するように、指を乱暴に動かして訊く。今にも嘔き出してしまいそうだ。

床を汚すわけには、いかない。

「どっち？」

「ふええええん……」

「泣いてちゃわかんない」

「ふえ……、ビンに……します」

泣く泣く、残された選択肢を口にした。

すごく、屈辱的な気持ちだった。

公美さんは満足げにうなずいて、あたしの前にしゃがんだ。

ビンの口が、しっかりと押し付けられる。

「はい、どうぞ」

「……どうぞって、いわれても……」

やっぱり、躊躇してしまう。

立ったまま、ビンの中にするってだけでも異常事態なのに、それを、至近距離から公美さんにまじまじと見られているんだから。

膀胱は破裂しそうなほどなのに、いざとなると出てこない。

あたしはこれでも繊細な性格で、普通に用を足す時も、隣の個室に誰かいるだけでなかなか出なくなってしまうのだ。

こんな変態的な状況では、出そうだったって出てくるものじゃない。

「緊張してるの？ 仕方ない子ね」

「んっ……あんっ！」

びりっ、と。

ローターを貼り付けていた絆創膏がはがされた。どうやら、ヘアが一、二本貼りついてたよう形で、突然の痛み小さな悲鳴を上げる。

それが、引き金になった。

痛みで、一瞬羞恥心を忘れてしまった。

「あ……ああ……」

しゃああーっという水音。

解放感。

全身から、力が抜けていく。

張りつめていたものが解き放たれて。

限界いつぱいまで膨らんでいた膀胱が、急に楽になる。

膨らんだ風船が、しぼんでいくみたい。

「あ……ふうう……ん」

最後の一滴まで放出して、あたしは大きく息をついた。

下半身がだるくて、力が入らない。

「はい、よくできました。じゃあ……」

「えっ？ あっ、やっ！ やだっ！」

拭いてくれるものだと思った。

だから、トイレトペーパーではない感触がそこに触れた時、あたしはびっくりして叫んでいた。

「ヤダー！ やめて！ そんな……汚いっ！

ああっ！」

それは、公美さんの舌だった。

公美さんに、舐められている。

排泄後の、拭いてすらいないその場所を。

「ダメだって！ そんな、汚いよ！」

「可愛い美鳩ちゃんものだもん。汚くなんてないわ」

公美さんは立ち上がって言った。

「なんなら、君も味見してみる？」

あの小瓶が、鼻先に突きつけられる。

わずかな黄色みを帯びた、透明な液体で満たされている。

あたしは顔を背けようとした。自分のおしっこを見せられるなんて、恥ずかしいどころの騒ぎじゃない。

だけど、公美さんはあたしの顎を乱暴に掴むと、口にピンを押し付けてきた。

「やっ……ううっ！」

無理やり、口の中に流し込まれる。

暖かいというよりも、熱いくらいの液体。

苦いような、しょっぱいような味。

決して美味しいものでないことだけは確かだ。

あたしは、すぐにそれを吐きだそうとした。け

れどそれより早く、公美さんの唇に口を塞がれてしまう。

密着した二つの唇。

舌が、差し入れられてくる。

あたしの舌と絡み合って、口の中をかき混ぜるように。

自分のおしっここのいやな味が、口中に広がる。

あたしは涙を溢れさせながら、こみ上げてくる吐き気に耐えていた。

やがて、その味も二人分の唾液に薄められていく。

すっかり味がなくなつたところで、公美さんはようやく唇を離してくれた。

もう、本当に身体に力が入らなくて。

あたしはだらしなく開いた口から涎を垂らして、陸に上がったタコかクラゲのようにぐつたりと、トイレのドアにぶら下がっていた。手首や肩の痛みも、もう全然感じない。

立て続けのアブノーマルな行為に神経が焼き切れて、痛覚もすっかり麻痺してしまつたみたい。

「……………変態」

ぼつりと、それだけつぶやいた。

「聞き捨てならないわね」

公美さんが心外そうにあたしを見る。

「変態じゃなくてなんなのよ！ こんなところでおしっこさせて…………それを舐めたり、飲ませたり…………」

「別に私、スカト口趣味ってわけじゃないわ。ただ、君の嫌がる様子が可愛いからね。ついやりすぎちゃった」

「……………変態」

もう一度繰り返す。公美さんは少し気分を害したようだ。

まだ湯気を立てているビンが、鼻先に突きつけられる。

「つべこべ言つと、これ全部飲ませるわよ？」

「やあっ！ ヤダヤダ、ぜったいや！」

あたしは泣きながら、ぶんぶんと首を振る。公美さんはぶつと笑いを漏らした。

その場に屈んで、ビンの中身を便器に流す。空

になったピンは、汚物入れの容器に捨てた。

「ま、スカトロごっこはこのくらいで勘弁してあげましょう。でも君、人のこと変態変態って言うけどね……」

「ん、んっ……」

いきなり、あそこを触られた。掌で乱暴にまさぐっている。

「あーゆーことされて、こんな風になっている女の子はなんなのかな？」

顔に押し付けられた公美さんの掌は、ぐっしょりと濡れていた。粘液が、顔中に塗り広げられる。「どうして私が、君を苛めるかわかる？ 苛められている君の姿がすごく可愛くて、しかも、それで感じているからよ。私、女の子が感じないようなことはしないからね」

「……そん、な……だつて……」

「あたしが苛めて悦ぶ変態なら、君は苛められて悦ぶ変態。相性ぴつたりじゃない？」

「ち……ちがうもん！」

そんなこと、あるわけない。

もう、絶対に。

あたしが、あたしが……マゾ、だなんて。

「事実が事実。素直に認めなさい。さて、そろそろフィニッシュといきましょうか」

「え？」

「まだ、ちゃんといつてないでしょう？」

公美さんはまた跪いて、あたしの股間に顔を埋めた。

片脚が持ち上げられて、公美さんの肩に担がれるような形になる。そのため、公美さんの唇がそこにぴつたりと押し付けられるようになった。

舌が、その部分の粘膜全体を舐め上げる。

舌先が、クリトリスをくすぐる。

先刻の激しい尿意で忘れかけていた快感が、たちまちのうちに甦ってくる。

舌、は反則だった。

指で触られるより、ずっと気持ちいい。

「ああっ！ だめっ！ …… ああんっ！」

そんな。

舌を、中に入れたりしちゃう駄目。

内側から舐められるようなその感覚。

指先を入れられた時と違って、不安感がない。

舌なら、そんなに奥まで入れられないし、バー

ジンを奪われる心配がないから。

だから、余計に感じてしまう。

気が遠くなりそう。

ぴちゃぴちゃ。

くちゅくちゅ。

仔犬がミルクを飲む時のような、湿った音が響く。

「ああっ！ あああっつ！ だっ……あ……」

じゅるじゅる。

あたしの中から溢れてくる蜜を、わざと音を立てて飲んでる。

そんなに強く吸われたら。

……死んじゃう。

それなのに、また、お尻に指も入れてくる。

そう言えばまだ、お尻にはローターも入ったままなのに。

公美さんの人差し指が、中でローターを転がし

ている。

「だっ……めえっ！ 声……声、出ちゃう」

今はもう、口になにも詰められていない。

そんなにされたら、あたし絶対に悲鳴を上げちゃう。

「いいよ。声出しても」

「そんな、あ……だっ……」

「もう、誰もいないから」

「え？」

「気付いてなかった？ 今、このトイレにいるのは私たち二人だけ」

そういえば、おしつこの時もずいぶん騒いでいたはずだ。あたしが気付かないうちに、他の人は用を足して出ていったらしい。

「だから、声出していいよ」

「そんな……な……」

そんなこと言われたって。

駅のトイレで、恥ずかしい声を上げるだなんて。第一、あたしは声出すのに慣れていない。

一人エッチの時って、そんなに大声出すもの

じゃないし。

それ以外の時といえば、電車の中で公美さんに痴漢されている時だけなんだから。

「声、出しなさい。いく時は、うんと声出した方が気持ちいいから」

「や……あつ！ あんっ！」

舌の動きが、激しくなっていく。お尻の中の指も。

あたしから、無理やり声を引き出そうとするかのように。

「やだ……そんな。あぁっ……あつ、あぁっ！」

あたしは、堪えようとした。

だけど、一度声が出てしまうと、もう抑えられない。

「あつ、あぁっ、あぁっ、あんっ！」

舌の動きが速くなるのに従って、あたしの唇からも絶え間なく甘い声が漏れ出す。

あたしの声に誘われるように、公美さんの指と舌がさらに加速する。

どんどん、どんどん。

どんどん、どんどん。

あたしの意識が、高みに昇っていく。

一応公共の場とはいえ、いつもの満員電車ほどの緊張感はない。少しくらい声を出しても、少しくらい悶えても、誰にも見つからない。

だから、素直に感じる事が許されてしまう。

あたしの声は、少しずつ大きくなっていった。

「あぁ……あぁあ……あぁあ　っ！　あぁんっ！」

「気持ち、いい？」

「い、イイっ！　いいのぉ！」

公美さんの問いに、あたしは声を震わせて応えた。

口先だけの否定なんて、もう無駄なこと。

あたしは、公美さんの顔をぐちゃぐちゃにしてみようほどに濡れてしまっていた。

「あぁーっ！　あんっ、あんっ！」

「イイの？　いきそう？」

「イ……イイっ！　あぁっ、い……っちやう

「いきなさい。ほら」

最後の、とどめ。

あそこを、軽く噛まれちゃった。

痛いはずのその刺激すら、気持ちよかった。

「……………っ！ ああっ！ あああ　　っ！」

全身が痙攣していた。

ドアが、がたがたと軋む。

達する瞬間、あたしはトイレの外にまで聞こえるんじゃないかっていうほどの声を上げていた。

* * *

「……………」

「なあに、そんな怖い顔して？」

公美さんが、ウェットティッシュであたしの身体を隅々まできれいにしてくれて、服を着せてくれている間。

あたしはずっと、縛られていた手首をさすりながら、ジト目で公美さんを睨んでいた。

「……………変態」

「それはお互い様」

「……………おかげで、遅刻したじゃない」

「少しくらい、いいじゃない。気持ちいい思いしたんだから」

「……………体育があるのに、キスマークなんかつけて」

「美鳩ちゃんみたいに可愛い子、キスマークの」

つや二つない方がおかしって」

「……………お尻、痛い」

「すぐに治るよ」

いくら言っても無駄なのはわかっていたけれど、それでも文句を言わずにはいらなかった。

だって、そうしないと。

公美さんにエッチなことをされるのは、とても気持ちよくて、あたしはそれをされたがっているって認めることになりそうに思えたから。

されるのは、確かに気持ちがいい。

でも、されたがっているわけじゃない。自分から進んでされたわけじゃない。

いくら嫌がっても、公美さんが無理やりしているだけ。

そう、きつちり線引きしておかないと。

本当に、歯止めが効かなくなりそうだった。

「……はい、できあがり。行きましようか」

公美さんは、身体を拭いて服を着せてくれただけではなく、髪をセットして、軽くお化粧までしてくれた。涙と涎で、顔もぐちゃぐちゃだったから。

でも、ひとつだけ忘れてる。

「あの、……パンツは？」

あたしはまだ、パンツ穿かせてもらってない。

「なあに？ あんな、涎でべとべとのパンツ穿きたいの？」

って、パンツも汚物入れに捨てちゃった。

「ノーパンで登校するつても、ドキドキするんじゃない？」

まだ、あたしを苛めようとしてる。あれだけやっても足りないんだらうか。

でも、残念でした。

あたしは無言で、自分の鞆を開けて予備のパンツを取り出し、公美さんがきよんとしている前

でさつさと穿いてしまった。

小さく、舌打ちの音が聞こえる。

「ちえっ、用意がいいわね。あたしが用意した、

エッチなパンツを穿かせようと思っていたのに」

「……」

まさか、そんなことまで考えていたなんて。

危ないところだった。替えのパンツを持っていて

て本当によかった。

思惑が外れた公美さんは本気で悔しがっていて、

あたしは少しだけ溜飲を下げた。

その日は学校を大遅刻してしまった上に、結局午後イチの体育も見学することになった。

胸にはキスマークがいくつも残っているし。

窮屈な姿勢で縛られていたせいか、それともあんなに感じてしまったせいか、全身がだるかったし。

まだ顔が火照っていたから、先生に「風邪で少し熱っぽい」と言ったらすぐに信用してもらえなかったのが、不幸中の幸いといえるかもしれない。

昼休みは、お弁当もそこそこに自分の席で寝ていた。背中を叩かれてはっと起きると、みんなはもう着替えてグラウンドへ出た後で、教室はがらんとしていた。

一人、着替えを終えた聖さんだけが横に立って笑っている。

「ハトは、グラウンドで見学？ それとも保健室に行って寝てる？」

「ん……グラウンド、行く」

目を擦りながら、ぼんやりと応える。

本当は保健室のベッドで寝ていたかったけれど、さすがに保健室の山本先生には、熱なんかないっで見抜かれてしまうかもしれない。

「大丈夫？」

「……ん」

あたしはのろのろと立ち上がった。すかさず、聖さんが背後から抱きついてくる。

「熱っぽい潤んだ瞳のハトって、すっごい可愛いね。このままバッグに入れて持って帰りたいくらい」

ぎゅう、と抱きしめて、背中に頬ずりしてる。

「もお……」

あたしは緩慢な動作で、それでも身体を擦って聖さんの腕から逃れようとした。

だけど、変に身体を動かしたのが失敗。聖さんの手が、一瞬だけまともに胸を包み込む形になった。

「あつ……ああんっ！」

思わず声を上げてしまったから、はっと気付い

て口を押さえた。

今の声、すごくエッチだった。

いつものじゃれ合いの時には、絶対に出さないような声。

まるで、公美さんにエッチなことをされている時のような声。

どうしたのだろう。

聖さんの手が触れた瞬間、電流が走ったような快感があった。

すごく、感じてしまった。

聖さんに抱きつかれても、今までこんなことなかったのに。

今朝、公美さんにさんざん弄ばれてしまった後遺症だろうか。身体中が、普段より何倍も敏感になっっているような気がした。

予想外の声にびっくりしたのか、聖さんがぱつと離れる。あたしは自分の身体を抱くようにして腕で胸を隠すと、真っ赤になって俯いた。

恥ずかしい。

恥ずかしくて、聖さんの顔をまともに見られな

かった。

女子校ではありがちな友達同士のじゃれ合いで、本気で感じて、あんな声を出してしまうなんて。

ちよつと触られただけで感じてしまう、エッチな子だと思われてしまったかもしれない。

聖さんは驚いたような表情で、呆然とあたしのことを見ていた。頬に、徐々に赤みが差してくる。

「あ……ご、ごめん！」

聖さんは真っ赤になってそれだけ言うと、だつと教室から駆け出していった。

どうしちゃったんだろう。

あんなに赤くなつて。

恥ずかしいのは、あたしの方だと思っただけ。結局この日は、放課後まで聖さんと目を合わせられなかった。

* * *

放課後。

とほとほと歩いて行くあたしの目に、校門に寄

りかかるようにして立っている聖さんの姿が映った。

特に根拠はないけれど、あたしを待っていたんじゃないかって気がする。

でも、まだ顔を合わせにくい。

かといって、黙って通り過ぎるのもどうかと思う。

そんな葛藤の結果として、校門を出るところであたしは歩く速度を極端に緩めた。聖さんに、声をかけるきっかけを与えるために。

聖さんは無言で近付いてきて、そのまま並んで歩きだした。あたしも無言のまま、速度を元に戻す。

横目で、ちらりと聖さんを見た。

こちらを見ずに、真っ直ぐに前を向いている。

おそらくは、気を遣ってくれているのだろう。

そのまま、駅までの数百メートルを一言も言葉を交わさずにゆっくりと歩いた。幾分気まずい沈黙ではあったけれど、決して不快ではなかった。

多分これが、聖さんなりの優しさなのだろう。

自分が利用する駅とはまったく反対方向なのに、ここまで付き合ってくれた。

駅前まで来て、ようやく聖さんは口を開いた。

喫茶店の前で足を止めて。

「……ケーキでも食べない？ 昨日ちょっと臨時収入があったからさ。ご馳走するよ」

どこか照れたように、口の中でもごもごと言う。多分、臨時収入というのは嘘だろう。あたしが気を遣わないように、という配慮に違いない。

聖さんはあれで、なかなか細かなところにまで気が回る。

嬉しかった。

ケーキはきつと、先刻のことのお詫びのつもりなのだ。なのにそうとは言わず、ただ「ケーキをご馳走する」とだけ。

そんなさり気なさが聖さんらしくて、なんだか胸の奥がぽつと熱くなった。

「……うん」

小さくうなずいて、聖さんの後に続いて店に入る。店内は空いていて、あたしたちは隅の窓際の

席に座った。

ケーキセットを二つ、注文する。

飲み物は、あたしがレモンティーで聖さんはコーヒー。

ケーキを食べている最中も、ほとんど会話はなかった。天気のこととか、宿題のこととか、どうでもいいようなことをぼつりぼつりと話したただけだ。

「あの、さ……先刻は、ごめん」

さりげなく、小さな声でつぶやくように聖さんが言ったのは、喫茶店を出て、それぞれ別方向に別れて帰ろうという時になってからのこと。

聖さんは向こうを向いているけれど、ほんの少し、頬が赤くなっているのが見て取れた。

「ん……と」

あたしも赤くなって、人差し指の先でぼりぼりと頬を搔く。

「別に、その……気にしなくてもいいよ。……でも、誰にも言わないでね」

あたしが、ちょっと触られただけで感じてしま

うような女の子だなんて。

「うん……ごめん」

「じゃ、また明日ね」

「ん……また、明日」

小さく手を振って。

あたしたちは、それぞれの家路についた。

色々なことがあった一日が、終わろうとしている。

あたしはお風呂から上がった後、裸のままベッドに横になって、ぼんやりと今日の出来事を思い返していた。

そうしていると、だんだん変な気持ちになってきてしまう。まだ、感じやすい状態は継続しているようだ。身体の奥に、燠のように燻っている感覚が残っている。

いつの間にか、両手が胸を包み込んで、ゆっくと動いていた。

なし崩し的に、ひとりエッチを始めてしまう。

最近、こんなことが多い。その日、公美さんにされたことを一つ一つ思い出しているうちに、いつしか手が動いてしまう、ということが。

だけど、今日はちよっと違う。

あたしは目を閉じて、ゆっくりと自分の胸を揉んでいた。脚をしっかりと閉じて、内腿を擦り合

わせる。

「あ……ダメ……聖さん……」

思わず、声に出してしまった。

今夜、想像の中であたしの身体を弄んでいるのは、聖さんだった。

* * *

昼休みの教室。

お弁当も終わって、みんなお喋りを楽しんだり、人の宿題を写したり、昼寝したり、思い思いに好きな時間を過ごしている。

聖さんもその一人。自分の本能の赴くままに、昼休みの貴重な数十分を費やしていた。

「はーとちゃん、いつも可愛いねー」

毎日の恒例行事。背後から、あたしに抱きついてくる。

両手で胸を包み込んで、持ち上げるようにしてこね回している。

「や……ああん。聖……さん……ダメえ」

あたしの唇から、甘ったるい吐息が漏れる。

執拗な胸への愛撫に、だんだんオクターブが上がっていく。

「あつ……やあ……みんな見てるよあ……」

「いいじゃん。私たちの仲のいいところ、みんなに見せびらかしちゃう」

「やつ、ああつ！」

うなじに、唇が押しつけられる。

赤い痕が残るくらいに、強く吸われてしまう。

聖さんは片手であたしの胸を弄びながら、もう一方の手で器用にタイを解き、ブラウスのボタンを一つずつ外していく。

「ヤダ！ あ……聖さんのバカ！」

いつの間にか、ブラのホックまで外されていた。カップがずらされ、クラスメイトたちの眼前で胸を露わにされてしまう。

聖さんの手が、直に胸に触れる。乳房全体を掌で包み込んで、人差し指と親指できゅつと乳首を摘む。

「やつ……つ、あつ……あんっ！」

「ほおら、胸だけでもうこんなに感じちゃってる。ハトのきれいなおっぱい、みんなにも見てもらおうね」

「やだあ……やあ……聖さあん……」

聖さんつてば意地悪。みんなが笑って見ている前で、こんな恥ずかしいことするなんて。

「あ、ダメ。そんな……」

ブラウスのボタンを全部外し終わった聖さんは、今度はスカートに手を伸ばした。

ウエストのホックを外して、横のファスナーを下ろしていく。

軽い布の音とともに、ミニスカートが足元に落ちた。

あたしたちの痴態を見物している観客たちの間から、小さな歓声が上がる。

「ほら、ここも熱くなってる。触ってほしい？」

「あつ……んっ！ やつ、ああんっ！」

聖さんの指が、パンツの上を滑っていく。割れ目の上をなぞるように。ゆっくりと。優しく、そして力強く。

気持ち、よかった。

公美さんの指と同じくらいに感じてしまう。

「ひゃっ、いいいっ！」

ナイロンの生地越しにクリトリスを摘まれて、あたしは細い悲鳴を上げた。身体の奥深くから、熱いものが溢れ出してくる。

しばらく下着の上からその部分を弄んでいた聖さんは、やがてパンツのゴムの部分に手をかけた。ぎゅっと脚を閉じるあたしの抵抗も虚しく、膝の上あたりまで下ろされてしまう。濡れた部分の外気に晒されてひんやりとした。

聖さんの指が、直に触れてくる。

人差し指と薬指でその部分を広げて、曝け出された濡れたクレバスに中指を滑り込ませる。

「はあっ！ ああっ、ああんっ！」

薄い布地一枚とはいえ、あるのとないのとはまるで感覚が違う。より直接的な容赦ない刺激に、あたしの身体が小刻みに痙攣した。

くちゅくちゅと、湿った音が響いてくる。

そこはもう滴り落ちるほどに濡れていて、ひん

やりとした冷たさを感じる部分がだんだん下の方に広がっていく。

周囲を取り囲んでいるクラスメイトが、指差しながらくすくすと笑っている。

あたしは恥ずかしくて、ぎゅっと目を閉じた。それでも、耳を塞ぐことはできない。

「うわあ、あんなに濡れちゃってる」

「ハトつてばエッチー」

「やっぱり、ハトの胸つて生で見ると迫力あるよねー」

「本気で感じてるよ。ホントにレスだったんだね」

「あの二人、仲いいもん」

「でも知ってる？ ハトつてば、電車で痴漢に触られてイっちゃうくらいエッチなんだって」

「淫乱なんだ？」

「それは可哀想だって。「感じやすい」って言うてあげなきゃ」

やだ、もう。

なんだかんだ言っても、みんなエッチに興味の

ある年頃。聖さんに弄ばれて悶えているあたしを、興味深そうに観察している。

その無数の視線は、あたしをさらに昂らせていた。半開きの口からは切ない嬌声が絶え間なく発せられて、教室内に響いていた。

いつの間にか、こそこそとささやくクラスメイ
トの声はなくなっていた。

聞こえてくるのは、自分自身のエツちな声だけ。もう、クライマックスが近いのだ。

みんなも、それを感じているのだろう。息を呑んで、じつとあたしたちを見つめている。

聖さんの指の動きが加速する。

あたしの剥き出しの神経を弄ぶ。

「イキそう？ ハト、もうイキそう？」

耳元で聖さんがささやく。だけど応えることはできない。

あたしの口は、切ない悲鳴を上げることに精一杯で、他の言葉を発する余裕なんてなかった。

「ああ……ああっ。ひっ……くっ、いいいっ！」

「イイ？ ほおら、いつちやいなよ」

「っ　っ！　あ……ああああ　っ！」

聖さんの声に促されて、あたしは絶頂を迎える。そのまま意識を失って、後はなにもわからなくなった。

* * *

「う……ああ……」

我に返ると、あたしは自分のベッドに仰向けに寝ていた。

左手で胸をぎゅっと掴んで。

右手は股間に伸びている。太股が、その手をしっかりと挟み込んでいた。

「あ……ああ……や、だあ」

そこはひどく熱を持っていて。

しかも、ぐっしよりと濡れている。

寝返りをうって見てみると、溢れだした蜜はシートに大きな染みを作っていた。

「や……だ……こんな……」

あたしは言葉を失って、濡れたシートを見つめ

ていた。ひとりエッチで、こんなに感じてしまったのは初めてだった。

公美さんと出会って以来、自慰でも達することができるようになってしまっていたけれど、今日のはこれまでで一番だった。

しかも。

聖さんをオカズにして、してしまった。

聖さんをオカズにして、最後までいつてしまった。

「うわ……ゴメン、聖さん」

思い出しただけで、顔がかあつと熱くなる。

真っ赤に火照った頬を、両手で挟むように押さえた。

「ゴメンね、聖さん。あたし、全然そんなつもりはないの」

なのに。

こんなに気持ちよくなってしまふなんて。

あたしは何度も、心の中で聖さんに謝った。

親友をオカズにしてひとりエッチをしてしまうだなんて、あんまりだ。

明日、どんな顔をして聖さんに会えばいいんだろ。

今日の明日で、いつも通りに平然と振る舞うのは難しそうだった。

翌日から仕方なく、朝の電車を一本早いものに変えた。

負けを認めて逃げるみたいで嫌だと思っていたけれど、背に腹は替えられない。

昨日のあれはさすがにハードすぎた。また、あんなことをされてしまつてはたまらない。

このまま放つておけば、公美さんの行為はエスカレートする一方だろう。

だけ。

新しい電車で得られた平和な日々は、たった三日しか続かなかつた。

四日目。

「じじ」

電車に乗ったあたしの耳元で、小さくささやく声。

耳にした瞬間、背筋がぞくぞくした。

「……公美……さん」

振り返るまでもない。背中にぴったりと、公美

さんが張り付いている。

あたしは小さく嘆息した。平和な日々よ、さようなら。

「でも……、どうして？」

この電車だとわかつたのだろう。単なる偶然だろうか。

それに、電車に乗る時は確かに、公美さんの姿はなかつたはずなのに。

「一番確実な方法」

耳を舐めるようにしながら、そつとささやかれる。

髪が耳たぶやうなじに触れて、その度に身体がぴくつと震えてしまう。

「ホームで、張り込んでた」

「……!!」

そんな手があつたとは。

確かに、公美さんはあたしが乗り降りする駅を知っている。駅のホームで待ち伏せしていれば、偶然に賭けるよりも遙かに効率的だろう。

あたしは絶望的な気分になった。

最後の手段と思っていた「電車を変える」は、これで完全に封じられてしまったことになる。公美さんから逃れるには駅を変えるしかないが、時間に余裕のない朝に歩くには、隣の駅でも遠すぎる。

それに、公美さんには家も知られているのだ。マンションの前で張り込まれたらどうしようもない。

「……ここまでやったら、ストーカーだよ」

「そうよねえ。一途な恋とストーカーキングって、境界が曖昧なのよね」

人ごとのように、うんうんとうなずいている。

なにが「一途な恋」だ。この馬鹿。

「まあとにかく、久々に楽しませてもらいましよう」

「あつ、やつ！」

太股を撫でていた手が、スカートの中にもぐり込んでいる。あたしはその手を押さえようとしたが、一瞬遅かった。

触られなくなかった部分を、触られてしまう。

と、そこで動きが止まった。

「……また、こんなことして」

どこか、怒っているような口調だった。どうしてあたしが怒られなければならないのだろう。痴漢とその被害者。普通、逆ではないだろうか。

今日に限って言えば、公美さんが怒った理由はわかってるんだけど。

だからこそ、今日だけは触られなくなかったんだけど。

「全然懲りてないのね。それとも、またして欲しいの？」

「ち、違うの！ 今日、その……本当に……」

今日はあたし、月に一度の女の子の日で。

しかも二日目で。

当然、パンツの中にはナプキンが貼り付けられている。別に、公美さん対策じゃないんだ。この手は公美さんには通じないって、嫌というほど思い知らされたし。

「ふうん、そお」

なんだか、舌なめずりでもしてるような口調。
うわあ、すっごくやな予感。

一度は動きを止めた手が、パンツを下ろそうと
している。

「やっ……めて……。今日は……やだっ、お願
い……」

「血まみれの公美ちゃんも、可愛いかもね」

「やっ……だあ……、お願い……やめて」

もぐり込もうとしてくる公美さんの手と、
ぎゅっと閉じたあたしの脚の鏝迫り合い。でも、
形勢はどうも不利みたい。

今日ばかりは、本当に触られたくない。普段
だって嫌なのに、今日はなおさらだ。

あたし、ただでさえ出血が多い方なのに。

公美さんだって女なんだからわかるはずだ。生
理時のそこを触られるのが、どれほど恥ずかしい
ことか。

いや、わかっているからこそだろう。

あたしが嫌がること、恥ずかしがることをする
のが大好きだから。

「……お願い……本当に、そこだけはやめて」
「うーん……」

本気で泣き出しそうなあたしを見て、公美さん
もちよつと考え込んだ。この人でも、少しは良心
というものを持っているのだろうか。

「仕方ないわね。じゃ、こっち」

「ひっ！」

ビクッ！

身体が大きく痙攣する。

「君、こつちも大好きだもんね」

「や………そんな………」

公美さんの指が、入ってこようとしている。

お尻の中に。

やだ。

また、お尻の穴を犯されちゃう。

あたしはお尻に精一杯の力を入れて抵抗したけ
れど、しょせんは結果の見える戦いだっただけ。

指をゆっくりと回してねじ込むように。かなり
強引に、少しずつ、しかし着実に指を挿入してく
る。

「う……あ……や……あ……」

これまで経験したような、さんざん前を愛撫されてばーっとなつてからの挿入ではない。いきなり、お尻に指を入れられるなんて。

意識がはつきりしている分、お尻の中にある異物の存在をはつきりと感じてしまふ。

どンドン、入ってくる。

奥まで。

奥深くまで。

公美さんの指はとても形がきれいで、すらりとした長い。その長い中指が、根本まで挿入されてしまふ。

「んっ……ふう……んっ！ やあ……」

指が動く。

反射的にお尻に力が入ってしまい、その指を締め付ける。

何度も、何度も。

お尻の中をかき混ぜるように動く公美さんの指。その指をぎゅっぎゅっ締め付けるあたしのお

尻。

「あ……あ……やめ、て……」

あたし、感じ始めている。

身体がふわふわするような、心地よい浮遊感に包まれてくる。

前の部分が、経血ではないもので濡れているのがわかる。

「やだ……つてば。やめ、て……いや……」

気持ちいい。

気持ちいい。

恥ずかしくて、気持ちよくて。むず痒いような不思議な感覚。

もっと。

もっと。

そう、そこ。

そのまま、もっと続けて。

「いや……やめてよ……お願い……やめて」

あたしの口は、本心とは逆の言葉を吐き続けていた。

これ以上されたら、気付かれてしまふ。

あたしがすごく感じて、もっとして欲しいって

思っていることを。

心の奥から湧き上がってくる欲望の声を、知られるわけにはいかなかった。

「やだ……。ね、お願い……。ホント、やめ……。」「顔が、熱い。

切ない吐息が漏れる。

脚から、力が抜けていく。

お尻つて、ボクシングのボディブローみたい。

前を触られる時のような鋭い快感じゃないんだけど、後からじわじわと効いてくる。

「やめて……。つてば。ねえ……。やあ……。」

だんだん、声が甘ったるくなってくる。

それでも、もう間もなく降りる駅だ。

助かった。

あたしは心から安堵した。

耳元で、微かな舌打ちが聞こえる。

電車が止まってドアが開く瞬間、指が引き抜かれた。

八つ当たりなのか、いささか乱暴な動きで、思わず声が漏れてしまったけれど、それも乗り降り

する人のざわめきにかき消される。

あたしは電車を降りた。なぜか公美さんもついてくる。

「ね、我慢できないんじゃない？ 続きしよ？」

先日のあれで味をしめたのだろうか。しつこくついてくる。

残念でした。

今日は、我慢できないってほどじゃない。電車に乗っている時間があと五分長かったら危なかったけれど。

乱暴に指を引き抜かれた時の痛みで少し醒めてしまったし、これなら学校に着いてからのひとりエッチで充分だ。

あたしは、公美さんを無視してホームを歩いていった。

「ねえ……。」

公美さんの手が、肩に触れてくる。

ところが。

「ちょっと待ちなさい。あなた、電車の中で何してたの？」

突然の声に驚いて立ち止まる。

見ると、長身の女性が怖い顔をして、あたしに
触れようとしていた公美さんの手首を掴んでいた。

背の高い女性だった。

公美さんもどちらかといえば高い方だけど、それよりも五センチ以上高い。百七十センチは超えている。

すらりと痩せていて、派手さはないが精悍な顔立ちをした、なかなか綺麗な人だ。歳は、公美さんと同じか、少し下くらいだろうか。

隣に、セーラー服の小柄な女の子が立っている。こちらはあたしと同世代。ストレートの長い黒髪を腰まで伸ばして、日本人形のような可愛い子だった。レトロなデザインのセーラー服は、二つ先の駅で降りたところにある有名なお嬢様学校の制服だ。雰囲気から察するに、どうやらこの二人は知り合いらしい。

長身の女性は公美さんをきつと睨みつけて、手首をしつかりと掴んでいる。

一瞬驚いたような公美さんの顔が、固く強張った。

「あなた、何をしていたの？ その子はずいぶん嫌がっていたみたいだけど？」

公美さんは小さく肩をすくめると、質問には答えずに別なことを訊いた。

「あなたは？」

「近くの高校の教師。最近、うちの生徒が電車で痴漢に遭うっていうんでパトロールしてた……って言えば、もういいかな？」

「そのようね」

公美さんが小さく息を吐く音が聞こえた。

あたしはその光景を、呆然と見つめていた。

いつかは起こるかもしれないと、漠然と思っていたこと。

それが目の前で現実になっても、なんだか実感が湧かなかった。

「それにしても、女の痴漢って初めて見るわ。あ、

この場合は痴女っていうんだっけ？」

「どっちでもいいわよ、そんなこと」

公美さんの口調は、なんだかふて腐れているようだった。

「鉄道警察隊まで、来てくれるよね？ 念のため言っておくけど、逃げようとか抵抗しようとか、考えない方がいいよ。腕には自信があるからね」

「……でしょうね」

「悪いけど、あなたもついてきてくれる？ 手間は取らせないから」

その女性は、公美さんに対するのはまるで違う、親しみやすい笑みを浮かべてあたしに言った。

「あ、はい……」

反射的にうなずいて、あたしは後に続いた。セーラー服の子も並んで歩き出す。こちらを見てにこつと微笑んだ。

「もう、大丈夫ですよ。沙紀さ……先生に任せておけば、なにも心配はいりませんわ」

お嬢様学校に通うに相應しい、丁寧な口調だった。しかもそれがぴつたりとはまっていて、まるで違和感がない。

「沙紀……先生？」

「進藤沙紀先生。うちの学校の体育の先生です。すごく優しく、生徒思いで、頼りになる先生で

すから、あなたも安心してください」

「……うん」

前を歩く公美さんは、意外なくらい大人しくしていた。

もう、観念したのだろうか。

あんなことを続けていれば、いつかはこんな日が来るはずだった。

それは、分かりきっていたことだ。

これからどうなるのだろう。

警察に行つて、やっぱり事情聴取とかされるのだろうか。あたしは「被害者」なんだから当然だろう。

そして、公美さんは？

痴漢の罪つて、どのくらいなんだろう。

罰金？ 執行猶予？ まさか実刑つてことはないだろうけれど。

いずれにせよ、前科一犯であることには変わらない。女の人の痴漢なんて、ニュースになつてしまつかもしれない。

こんなことで一生を棒に振るなんて、馬鹿みた

い。

同情なんかしない。自業自得だ。

これで、公美さんから解放される。罪がどうなるにせよ、明日からはもう公美さんに会う心配はないわけだ。

なのに。

どうしてだろう。こんなに、嫌な気分なのは。

胸がもやもやする。毎日悩まされていた痴漢から解放されて、本来ならもっと晴れやかな気分になってもいいはずなのに。

同情なんか、しちやいけない。

全部、公美さんが悪いんだから。

自業自得なんだから。

「……違う」

思わず、声に出してしまった。

足が止まる。

はたと、気付いてしまった。

公美さんが掴まったのは、あたしのせいだ。

あたしが、電車の時間を変えたから。

そんなことしなければ、今日もひとつ後の電車

に乗っていたはずで、あの進藤先生とやらには会わなかったはずだ。

いや、だけど。

そんなことを気にするなんて、おかしい。

公美さんがあたしに痴漢行為を働いていたのは、動かしようのない事実だ。それで掴まったからといって、あたしが気に病む必要はない。

いつもの電車に乗っていてもいつかはこうなつた可能性もあるし、第一、あたしは被害者なのだ。被害者。

本当にそうだろうか。

その気になれば、こうなる前にいくらでも手の打ちようはあったのではないだろうか。

例えば、もっと早くに電車を変えたり、別な車両に乗っていれば。

公美さんはそれで諦めていたのではないだろうか。

なのにあたしが毎日同じ電車に乗って、いつの間にか親しくなっていたから、公美さんも油断していたのではないだろうか。

そんなことを気にするなんて、おかしい。

おかしい、はずなのに。

あたしは、被害者だ。被害者なんだから。

被害者……なのだろうか。

本気で嫌がっていたと、胸を張って言えるんだ
ろうか。

最初の一、二回は、確かにそうだった。

だけどいつしか、ゲーム感覚になっていたの
はないだろうか。

相手が、公美さんだから。

相手が、女の人だから。

本当の意味で「犯される」「心配がないから。遊
び感覚で「痴漢される女の子」の役を楽しんでい
たとは言い切れないだろうか。

階段の途中で立ち止まって、ぎゅっと拳を握っ
た。

「……あの？」

急に立ち止まったあたしを不思議に思ったのが、
セーラー服の子が顔を覗き込んでくる。

前を歩く進藤先生も振り返った。

「………ません」

なんとか絞り出した声は、変にかすれていた。

「え？」

「警察には……行きません」

一番最初に驚いた表情をしたのは、公美さん
だった。

進藤先生は、困ったような顔になる。

「……もう、いいんです。その人、放して……あ
げてください」

自分の声なのに、どこか遠くから聞こえてくる。

まるで、自分の声じゃないみたいだ。

自分で喋っているのだという実感が無い。

「……恥ずかしいのはわかるけど、こういうこと
は泣き寝入りしちゃ駄目だよ。それとも、なにか
弱みでも握られてるの？ 大丈夫、私に任せてく
れば……」

「……違うんです。でも、もう、いいんです。お
願いですから……」

あたしはそれだけ言っただけ唇を噛んだ。

どうしてか、涙が溢れてきた。

進藤先生が、困ったようにセーラー服の子と顔を見合わせる。

公美さんは……どんな顔をしていたのか、目に入らなかった。

「……仕方ない」

進藤先生が溜息をついた。ずっと掴まえていた公美さんの腕を放す。

「今日は助かったみたいだけど、あんた、次はなにからね」

公美さんはなにも応えず、ただ、微かにうなずいたように見えた。見間違いかもしれないが。

「沙紀さん……」

「仕方がないでしょ。痴漢は、被害者の証言がなければ捕まえないんだから。……行こ、しよこ 笹子。遅刻するよ」

「でも……」

笹子と呼ばれた女の子はまだぐずぐず言っていたが、進藤先生にぼんと背中を叩かれて渋々うなずいた。進藤先生は何度も公美さんに釘を刺してから、笹子を連れてホームへと戻っていく。

後には、あたしと公美さんが残された。

「はい」

改札を抜けたところで、駅の中にあるハンバーガーショップに連れて行かれた。席に着いたあたしの前に、コーラの紙コップが置かれる。

あたしは黙って俯いて、だんだん水滴が増えてくる紙コップを見つめていた。

小さなテーブルを挟んで、公美さんが向かいに座る。

「……ありがとう、って言うべきなのかな？」

ストローをくわえて公美さんが言う。

「立場上、私がこんなこと言うのも変かもしれないけど……。どうして、って訊いてもいい？」

あたしは首を左右に振った。

訊かれたって困る。きつと、答えられない。

どうしてなのか、自分でもわからない。

「でも、確かに助かったわ。あの相手じゃ抵抗するわけにもいかないしね。まさか、こんなところ

で進藤沙紀に会うなんて思わなかった」

今の台詞、おやつと思つて顔を上げる。

「公美さん、あの人が知ってるんですか？」

「君は知らないの？」

もちろん、知らない。あたしは首を振る。

「個人的な知り合いじゃないわ。でもテレビで何度か見たことある。女子では世界トップクラスの空手家。プロレスラーやなんかとの異種格闘技戦にも勝つてたし」

「はあ」

あたしはぼんやりとうなずいた。なるほど、それでは下手な抵抗などできるわけがない。そんな有名な近所の女子校の教師だなんて、まるで知らなかった。

「ところで、今晚ヒマ？」

「え？」

「ごはん、食べに行かない？ 美味しいものご馳走するよ」

「……」

お礼、のつもりなんだろうか。

また、びっくりするくらい高いものをご馳走してくれるのだろうか。

「お寿司……でも、いい？」

試しに、そう訊いてみた。公美さんは、なんの躊躇もなくうなずいた。

* * *

夕方。

駅で待ち合わせて、連れて行かれたのはまた銀座。いかにも、大企業のお偉いさんが接待とかで使いそうなお寿司屋さんだった。

確かに、ものすごく美味しかったんだけど。

公美さんって本当に、お金は大丈夫なんだろうか。

カードの支払に困って、サラ金に手を出したりしてないだろうか。

それも返済できなくて、風俗に売られたりしてないだろうか。

「……別に、どうでもいいけどね」

「え？ なにか言った？」

「ううん」

値段を聞いたたら胃が縮み上がってしまいそうな大トロを手にしながら、ぼんやりと考えていた。

どうでもいい。

向こうが好きでやってることだ。あたしには関係ない。

公美さんがカード破産しようと、痴漢の現行犯で捕まろうと。

あたしには関係ないこと……のはずなのに。

どうして、無視できないんだらう。

どうして、こんなに気になるんだらう。

自分でも理解できない自分の心がもどかしくて、それが不愉快で。

トロとかアワビとかウニとかを、ヤケ喰いのように食べまくった。

その後は、また軽く飲みに行つて。

公美さんは、朝のことなんてすっかり忘れてい

るかのように陽気だった。

夜中、またタクシーで家まで送ってもらった。

「コーヒー、飲んでく？」

念のため、訊いてみる。

「もつちろん。君のコーヒー、美味しいもんね」

前回と同じように、ブルーマウンテンを淹れる。

カップを手に取った公美さんは、香りを深く吸

い込んで、それからゆっくりと口をつける。

そんな動作はすごく様になっていて、見ている

分には文句なしの美女だった。

あたしは隣に座って、わざと、公美さんにもた

れかかった。

髪に、手が触れる。

公美さんの手が、優しく頭を撫でてくれている。

だんだん、眠くなってくるみたい。

三分。五分。

そんな状態が続く。

コーヒーと、公美さんの香水の匂いに包まれて、

すごく心地よい。

あたしは機嫌のいい猫みたいに、公美さんに寄

り添って撫でられている。

カップが空になっても、そんな状態が続いていた。

予想していたことは、なにも起こらなかった。

「……どうして？」

「ん？」

「どうして、なにもしないの？」

一度うとうとしかけて、はっと目を覚まして。

それでも先刻までと同じ体勢でいることに気付いて、あたしは訊いた。いつもの公美さんなら、とつくに襲いかかってきているはずだ。

「なにかして欲しいの？」

冗談めかしたその言い方が、ひどく癪に障った。あたしは、頭を撫でてくれていた手を乱暴に払いのける。

「どうしてよ、好きなように犯せばいいじゃない！ どうせあんたは痴漢で変質者で、レズの変態じゃない！ なに、いい子ぶってんのよっ！」

叩きつけるように言うと、公美さんは悲しそうな表情を見せた。そのせいで、あたしは弱いもの

苛めをしているような気分させられてしまう。

悲しそうな、今にも泣きそうな目で、じっとあたしを見つめてくる。

「……な、なによ」

「美鳩ちゃん」

手が、頬に触れた。

思わず、びくつと数センチ後ろに下がる。

公美さんの顔が、近付いてきた。

唇が重なる。

これで、確か四度目の。

公美さんの唇の感触。

柔らかくて滑らかな粘膜が、しっかりと押し付けられる。

「……ん」

長いキスだった。

今まで経験した中で、一番長いキスだった。

五分、十分。しまいには、時間なんてわからなくなるくらい。

でも、それだけだった。

胸を触りもしない、ブラウスのボタンも外さな

い。当然、スカートの中に手を入れたりもしない。

それどころか、舌すら入れてこない。

ただ、唇が触れ合うだけのキス。

長い長いキスが終わって、公美さんが離れる。

静かに微笑んでいた。

同性でも溜息が出るような、優しげで、儂げな

笑みだった。

一瞬、見とれてしまった。

そのことに腹が立った。

「……帰って」

玄関の方を指差して、あたしは言った。

「帰ってよ！　そして、もう二度とあたしに触れないで！」

小さく肩をすくめながら、公美さんが立ち上がる。

ハンドバッグを手にとつて、居間から出ていく。

居間の扉を閉める時、小さく「おやすみ」という声が聞こえた。

「二度と来んなつ、バカっ！」

閉められた扉に向かって、テーブルの上のカッ

プを投げつける。

一番のお気に入りのジノリが、粉々に砕けて絨毯の上に散らばった。

平和な日々は、三日しか続かなかった。

翌日は、いつもの電車に公美さんの姿はなくて、次の日は、何もせずにただあたしの隣に立っていただけ。

だけど。

その次の日は、手で触りこそしないものの、なんだか必要以上に身体をすり寄せてきて。

さらに次の日。あたしの方が根負けしてしまっ
た。

三十秒おきに「ねえ、触っちゃ駄目？ 少しだけ」なんて訊かれたら。

それでも最初のうちはちゃんと「ダメ」と答えていたけれど、いい加減それも面倒になってきた。「ね、ちよつとだけ。いいでしょ？」って、しつこく懇願する公美さんの姿を見ていたら、なんだか馬鹿馬鹿しくなつて、もう、どうでもいいやつて気になった。

「……勝手にしたら？」

降りる駅に着く少し前、あたしは素っ気なく言った。間髪入れず、手がお尻に伸びてきた。

あたしは軽く溜息をついて。

そして、いつもの日常が戻ってきた。

その日の夕方。

駅で公美さんが待ち伏せしていて、新しいジノリのカップを買ってくれた。

* * *

ある日の放課後。

学校帰り、ちよつとした買い物があつて寄り道していたあたしは、見覚えのある女の子を見かけた。

すごく、綺麗な子だった。

近くにある有名なお嬢様学校の制服を着て、長いストレートの黒髪は腰まで伸びている。どこかで見た顔……と少し考えて、はたと思ひ出した。

公美さんが掴まった時、一緒にいた女の子。確か、笙子って呼ばれていた。

向こうもこちらに気付いたらしい、一瞬驚いたような表情を浮かべて、小さく頭を下げた。

「……あ、えっと。この間は、どーも……」

「あ……と、その、なんだか余計なことをしたみたいで……すみません」

「あ、ううん。そーゆーわけじゃないんだけど……」

どう説明したらいいものかわからなくて、そのまま口ごもる。笙子も気まずそうにもじもじしていたが、やがてなにか決心したように訊いてきた。

「あの、間違ってたらすみません。あの……、あなた……えっと」

「美鳩。岡村美鳩」

「私、菱川笙子です。それで、あの……あの人の、

美鳩さんの……恋人、なんですか？」

「はあ？」

思わず、大きな声で聞き返した。一瞬、なにを言われたのか理解できなかった。

「その……電車の中で、……痴漢ごっこをしていたとか……？」

「な、なに言ってるのよ。バカなことを」

なにを言い出すかと思ったら、笙子って、真面目そうな外見の割にとんでもない思考回路をしている。

でも。

よくよく考えてみれば、事情を知らない第三者にはそう見えたかもしれない。とはいえ……。

「ば……バカバカしい。そんなことあるわけないじゃん。恋人？ 女同士でなに言ってるのよ」

「……お、女同士だつていいと思います」

あたしが鼻で笑い飛ばすと、急に笙子が強い口調になった。やや気分を害したようにも見える。

「人間の恋愛は、繁殖のための本能とは違う、もつと精神的なものです。あ、相手が同性ついでうのも、ありだと思います」

「……」

あたしは意外に思ってた笙子を見ていた。こんな、強い物言いをする子とは思わなかった。

なにか、違和感がある。

どうして笙子は、こんなに怒っているのだろう。

考えながら、瞬きを一回、二回。

ふと、天啓のようにひらめいた。

「笙子って……もしかして、あの、進藤先生のことか……？」

凶星、だった。

たちまちのうちに、笙子の顔が真っ赤になる。

頭から湯気を立てて俯いてしまった。

なるほど。自分が同性愛者だからこそ、女同士なのに恋人なんて発想が浮かぶのだろう。

面白そうなことになってきた。

なんとなく興味を惹かれて、あたしは詳しい話を訊くために、笙子を近くのハンバーガーショップへ連れ込んだ。

「……で、さあ。笙子と進藤先生って恋人同士なの？ それとも、あんたが一方的に憧れてるだけ？」

コーラのストローをくわえたまま、あたしは好奇心のままに訊く。笙子は相変わらず真っ赤に

なつて俯いていた。

「ね、教えてよ」

「……お、お付き合ひ、しています……。あ、あのっ、でもっ！ な、内緒にしてくださいね」

笙子が何度も念を押す。

確かに、教師と生徒で交際しているなんて大っぴらにできることではないし、それが同性となればなおさらだろう。

「でも、なんな信じらんないなあ。女同士でそんな……」

「せ、性別とか関係なしに、沙紀さんはすごく素敵な方なんです！ きつと、誰だっけ好きになっちゃいます。学校でも人気があって、私いつもやきもきしてるんですもの」

「それはそれは……」

あたしは苦笑した。これがいわゆる、のろけつてやつだろうか。

「だからって、教え子に手を出す教師ってどうかなあ」

「ち、違いますっ！」

進藤先生のことになると、笙子はすぐむきになる。

「知り合った時は、まだ沙紀さんは先生じゃなかったんです」

「ふうん。それで……」

あたしは、一番気になっていた質問を口にした。

「あの、さ……女同士で、エッチ……とか、するわけ？」

「えっ、あ、あのっ」

それきり、笙子は黙ってしまふ。答えは必要なかった。この、茹で蛸のような赤い顔を見れば一目瞭然だ。

でも、ちよつと意外。

笙子って良家のお嬢様風で、真面目で内気そうに見えるのに。

それとも、進藤先生がすごく手が早いんだろうか。

「ね……、女同士のエッチって、どんな風にするの？ やっぱ裸になって抱き合ったり、胸揉んだり、舐めたり、ゆ……指入れたり……とか？」

あたしは声を潜めて訊いた。さすがにこれは、周囲の人に聞かれると具合が悪い。

「えっと、口……ローターとかバイブとか、使ったりもするの？」

「……」

耳まで真っ赤にして俯いた笙子は、それでも微かにうなずいた。訊いているあたしも恥ずかしくなってきたので、最後の質問をする。

「……で、さ。……それって……気持ちいい？」

頭の中が真っ白になって、わけがわかんなくなつて、もつとして欲しくてたまらなくなつたり、する？」

よほど注意して見ていなければわからないくらい微かに、笙子がうなずいた。それで、あたしも少し安心した。

同性に触られて感じてしまうのは、あたしだけじゃないんだ……と。

それにしても、笙子は外見に似ず、ずいぶんと経験豊富らしい。その時になって、笙子の胸の絞章に気がついた。二年生、ひとつ年上だ。あたし

よりも一年分、多くのことを経験しているということだろう。

「……私にはかり喋らせて、ずるいです。そういうあなたはどうなんですか？」

「え、あたし？」

「美鳩さんと、あの女の人の関係です」

「あ、えつと……」

返答に詰まった。どう答えればよいのだろう。

笙子の秘密を聞いてしまったのだから、あたしのことにも正直に話すべきだろうか。

いや、それはまずい。公美さんが本物の痴漢であることがばれてしまう。

あたしとしても、「痴漢に触られて感じている女の子」「痴漢を庇った女の子」というレッテルを貼られるのは避けたい。

「……友達、かな？」

あたしは嘘をついた。

「でも、あいつもレズでさあ。しつこく迫ってくるの。あたしはその気はないから困ってるんだけど、あまり邪険にするのも悪いし……」

「同性だから、ですか？」

「え？」

「嫌いだからじゃなくて、同性だからあの人の想いに応えないんですか？」

つい先刻まで真つ赤に俯いていた笙子が、まっすぐにあたしを見ていた。また、怒っているような表情をしている。

「え、えつと……」

「それって、ひどいと思います。男とか女とか抜きにして、ちゃんと考えてあげるべきだと思います」

「いや、でも……」

常識人のあたしには、同性愛なんてそんな簡単に受け入れられるものではない。第一、問題の根本は同性愛じゃない。公美さんが真正銘の痴漢であることが問題なのだが、それは笙子の与り知らぬことだ。

笙子は鞆の中から一冊の文庫本を取り出すと、あたしに差し出した。

「これ、貸してあげます。一度読んでみるといい

ですよ」

「なに、これ？」

「素敵な、恋愛小説です。女の子同士の……ですけどね。でも、本当に素敵なんです。きつと、美鳩さんも偏見がなくなりますよ」

別にあたしは、同性愛にそれほど偏見を持って
いるわけじゃないけれど。

笙子があまりにも真剣なので断るのも悪くて、
あたしはその本を借りて家に帰った。

* * *

舞台はとある女子校。

ヒロインはそこに入学したばかりの新生で、
ひよんなきっかけから知り合った綺麗な先輩が、
優しく世話を焼いてくれる。

いつしか、その先輩に対する想いは単なる憧れ
とか友情という言葉では言い表せないものに変化
していき、様々な葛藤の後にヒロインは胸の内を
正直にうち明ける。

その想いを受け入れてくれる先輩。しかし彼女
には、親が決めた許嫁がいて……。

笙子が貸してくれた文庫は、そんなあらずじ
だった。

みまさか
美作百合子著『三度目の桜』。

読むのは初めてだが、作家名は聞いた覚えがあ
る。それなりに有名な作家なのだろう。

綺麗な話だった。

女性らしい繊細な文体で、思春期の少女の揺れ
動く心を、これ以上はないというくらいに美しく
描き出している。

物語そのものは、女同士ということを除けばあ
りきたりかもしれない。しかし、描写が素晴らし
いのだ

あたしは、ラストシーンで不覚にも泣いてし
まった。

その日

朝の電車では、またいつものように公美さんに痴漢されてしまった。

もつとも、あの日以来公美さんも少しは反省したのか、行為は幾分ソフトなものになっているようだ。

ローターを入れられたりとか、トイレに連れ込まれたりとかはない。大抵の場合、下着の上から優しく触られるだけだった。

もつとひどいことを色々とされてきたものだから、つい「このくらいならいいか」なんて黙認してしまう。きっと、公美さんの狙いもそこにあるのだろう。このくらいならあたしは文句を言わない、と。

しかし、これはこれでひとつ問題があった。大きな声で言うのははばかられるのだけど、つまり、ちょっとだけ物足りないのだ。

最近のソフトなタッチでは、気持ちいいことは

間違いないんだけど、あの、気が遠くなるようなエクスタシーを迎えることはない。「もうほんのちょっとと激しくしてくれたらイケそうなのに」という状態を毎日続けられたら、欲求不満になってしまう。

だけでももう二度と、公美さんに「ちゃんと最後までいかせて」なんて言う気はなかった。今度それを口にしてしまったら、あたしの負けだという気がする。きっと、公美さんに最後まで奪われてしまう。

だから、それがどんなに気持ちのいいものかわかっていても、公美さんにしてもらうわけにはいかない。自分でなんとかするしかないだろう。

学校に着くと、あたしは疼く身体をなだめながら、またシャワー室へと向かった。

予鈴が鳴った後なら、そこは大抵無人になる。こつそりひとりエッチをしていても、見つかる心配はない。水音でごまかせて、しかも終わった後に身体を洗える分、トイレよりも適した場所だろう。

あたしは手早く制服を脱いでロッカーに入れ、個室の一つに入った。全開にしたシャワーを、火照った下腹部に当てる。

「ん……ふっ、うん……くうん」

指で触るのはまた違った、シャワーの感覚。無数の水滴がクリトリスを刺激する。

シャワーをゆっくりと前後に動かして、その感覚を楽しんだ。これも、それだけでいけるような刺激ではないが、焦らすように少しずつ気分を高めていくのも悪くない。指で直に触れるのはそれからだ。

「ああっ、んっ……んっ……」

そこはもう、熱くとろけていた。シャワーを壁のフックに戻して指を伸ばす。とろとろ、ぬるぬるの粘液が指の間に透明な糸を引いた。

「んっ……んっ……あっ……ああっ」

気持ちいい。

すごく、気持ちいい。

前後に滑る指の動きが、どんどん速くなっていく。喉の奥から漏れる切ない声が、どんどん高く

なっていく。

「はあっ……あっ、ああっ！ あああんっ！」

程なく、あたしは達してしまった。

一瞬大きく仰け反った身体が、ぶるぶると痙攣する。ふうっと大きく息を吐くと、身体から力が抜けてその場にぺたんとして座り込んでしまった。髪が濡れるので、慌ててシャワーを止める。

「は……あ……」

すごく、よかった。

もちろん、公美さんに色々される方が気持ちいいのは事実だけれど、自分でするのも以前よりずっとよくなってきた。ひとりエッチの経験を積んで、指使いが上手になってきたのだろうか。それとも、あたしの身体が感じやすくなっているのだろうか。

あたしはタイルの上に座り込んだまま、壁に寄りかかって余韻に浸っていた。

この、達した後の気怠さがたまらない。

「……ん」

もう一度、あの部分に手を伸ばしてみた。

濡れそぼったヘアの奥に、とろとろにとろけた
割れ目が開いている。

「ふぁ……、んっ」

指先をもぐり込ませてみる。濡れて、柔らかく
ほぐれた粘膜が絡みついてくる。

そこにはまだ、数分前まで激しく燃えさかって
いた炎の残り火があった。新鮮な空気を送り込ま
れた炭のように、かあっと熱を帯びてくる。

気持ちいい。

膣の奥の方から、じんわりと全身に広がってい
くような快感。

一度達した後だから、比較的落ち着いてその感
覚を楽しむことができた。

指先を小刻みに動かして、どこが感じるのか、
そこがどんな構造になっているのか、丹念に調べ
ていく。

「ふ……うん……あ、んぁ……くう……くう
ん！」

あたしの気持ち、どんどん昂っていく。

もう少しだけ。もうちょっとだけ。

だんだんエスカレートしてしまう。

中指を中に入れていった。恐る恐る、ゆっくり
と少しずつ。

経験はないあたしでも、中指の一本くらいなら
入れられないこともない。ややきつくはあるけれ
ど、どんどん滲み出てくるぬめった蜜のおかげで
ほとんど痛みは感じなかった。

今まで経験したことのない深い部分まで、指が
埋まっていく。やがてあたしの中指は、根元まで
胎内に飲み込まれてしまった。

「あ……ん、う……くうん……ふ……う」

中は、すごく熱い。本当に身体の中、内臓の領
域という気がした。ぬめった粘膜が、あたしの指
をぴったりと包み込んでいる。

それ以上、指を動かすことはできなかった。
やっぱり動くと少し痛かった。

だけど、まったく動きがないというのも少し物
足りない。あたしは挿入した指をそのままに、も
う一方の手もそこへ伸ばした。

溢れ出している蜜をたっぷり塗った指先で、

クリトリスをつつく。

「ひゃっ……ああんっ！」

指先で微かに触れただけで、びりつと電流のような衝撃が伝わってきた。びくつと身体が震えて、奥に入っている指が膣壁を刺激してしまう。

「は……ああ……あ、うう……」

大きく息をして、心の準備をして。

「はっ……ああうっ！」

もう一度、触れた。また、剥き出しの神経を直に触っているような、痛いほどの快感が身体を貫いた。

「ああうっ！ はああ……… あうんっ！

は……ひゃああんっ！」

一度。

二度。

指先が小さなスイッチに触れるたびに、あたしの身体は電気仕掛けのおもちやのように小さく弾んだ。

だんだん、触れる感覚が短くなっていった。

そして、より強く触れてしまう。

「はうあつ！ いい……いい、ああんっ！」

五回、六回……。

「あああ……ああつ！ はっ、うあああんっ！」

七回、八回……。

だらしなく開いた口から涎がこぼれ、ぼたぼたと胸の上に落ちる。

あたしは他のことを何も考えられずに、ただ自分の指が与えてくれる快楽を貪っていた。

そして十回目。

「だっ……めえ……っ！」

あたしの指は、その小さな突起をきゅっとなでた。普段だったら、痛いと感じるほどに強く。

だけど充血したその部分は、それすら快感と受け止めてしまう。

「ああっ……あんっ、あああ　　っっ！」

あたしは、今日二回目の絶頂を迎えてしまった。

「……あ……、あ……、ふう……ん」

多分、何分間か朦朧としていたんだと思う。

あたしは冷たいタイルの床に座り込んで、ぐったりと壁にもたれかかっていた。

あの嵐のような快楽は去って、とろりとした水飴のような倦怠感が身体を包み込んでいる。

「はあ……ん……」

信じられないくらい、気持ちよかった。あんなの初めてだ。

「……いいのかなあ」

どんどん、エッチなことが気持ちよくなってしまふ。「今までで一番気持ちいい」って思っても、その何日か後にはもっと気持ちのいいことを経験してしまう。

まだ高校一年生なのに、まだバージンなのに、身体はどんどんエッチなことを憶えてしまっている。

「はああ……あん……」

その時になってようやく、あたしはまだ指が入ったままなのに気が付いた。自分の中指が根元まで身体の中に埋まっているというのは、ひどく

奇妙な光景だった。

「……あ……や」

冷静になってそこを触るといふのは、精神的にあまり気持ちのいいものではない。あたしは恐る恐る指を引き抜いた。幸い、中はまだ充分すぎるほどのぬめりが残っていて、ほとんど痛みもなく指は引き抜かれたけれど、その時の排泄感にも似た奇妙な感覚は当分忘れられそうにない。

本当のセックスでは、指よりもずっと大きなものがそこに入って激しく動かされるのだと思うと、なんだか怖くなってきた。

「……教室に戻る」

あたしは立ち上がった。

身体が冷えてしまったし、一部分まだぬるぬるしているしで、最後にもう一度、さっとシャワーを浴びた方がいいと考えて手を伸ばす。

ところが

『ラッキー、誰もいませんよ』

誰かが突然、シャワー室に入ってきた。

それも一人じゃない。足音や声から察するに、

どうやら二人いるらしい。

あたしは一番奥の個室にいて、シャワーも止めていたから気付かれなかったようだ。見つかったところで、サボリはお互い様だから気にすることでもないんだけど。

個室の扉が開き、そして閉められる。シャワーの水音がタイルを叩きはじめる。

ところが、入ってきたのは二人のはずなのに、そうした音は何故か一つしか聞こえてこない。

そして。

『ん……あ……あん』

微かに、甘く切ない声が聞こえてきた。

その声の正体がわからないほど子供ではない。

つい先刻まで、自分でも同じような、だけでもっと激しい声を発していた。

これは、もしかすると……。

『どうしたの、由維。もうこんなに感じてるの？』

『あっ……ん、だって……先ばあい……』

甘ったるい声が、だんだん大きくなってくる。

もう間違いない。

どくん！

急に、心臓の鼓動が大きくなった。

すぐ側で、誰かがエツチしている。うちは女子校だから、もちろん女の子同士で……だ。

由維と呼ばれていた女の子の声には聞き覚えがあった。あれは確か宮本さん、隣のクラスの子だ。そういえば彼女には、すごく仲のいい幼なじみの先輩がいたはずだ。

だけど、まさかこんな関係だったなんて。その上、校内でこんな事をしているなんて。

女子校のことだから、こうした噂は時折聞かえてくる。だけど実際に目の当たりにするのは初めてだった。

信じられない。学校でこんな事。

そう思ってから、先刻自分がしていたことを思い出した。あんまり人のことは言えない。

それにしても困った。これでは、出ていこうにもいけないではないか。

かといって、こんな悩ましげな声を間近で聞か

され続けていたら、またまた変な気持ちになってしまいかねない。あたしを狂わせていた灼熱の炎は、まだ完全に鎮火したわけではないのだ。

『ああんっ、ああんっ、ああっ、ああっ！』

宮本さんの声が甲高くなつて、間隔がどんどん短くなつていく。

いったい、どんなことをしているんだろう。先輩の聲がまったく聞こえないところから考えると、指ではなくて舌で舐められているのかもしれない。以前、駅のトイレで公美さんにされたことを思い出して赤面した。あそこを舐められるのは、指で触れられるのとはまるで違う、そしてすごく気持ちのいいことだった。宮本さんがこれだけ悶えているのも納得できる。

舐めながら、指を入れたりもしているのだろうか。公美さんのように、お尻を犯したりもするのだろうか。

声しか聞こえないから、妄想ばかりがどんどん膨らんでいく。

『ああっ、ああ　っ！　せっ……んぱあいつ！』

ああんっ！』

宮本さんの声がどんどん大きくなっていく。この調子では、間もなく達してしまいそうだ。

早く終わって出ていって欲しくないだろうか、とあたしは切実に願っていた。

シャワーを浴びた後ずっと裸でいて、しかもまた汗をかくようなことをしていたので、いくら夏のこととはいえなんだか肌寒くなってきた。

だから……。

「……つくしゃんっ！」

口を押さえる余裕すらなく、あたしは大きなくしゃみをしてしまった。

向こうの個室で、ガタン！ と大きな音がして、続いてがたがたと慌ててている様子がうかがえる。

これはまずい。

あたしは慌てて逃げ出そうとして

「……あ」

個室から出たところで、あの二人とばったり出くわしてしまった。

宮本さんと、三年の松宮先輩。

気まずい沈黙が流れる。

三人とも全裸で。

真っ赤な顔をして固まっている。

「あ……あ……あ、あのっ」

なにか言わなきゃ、と思っても、なかなか言葉が出てこない。

「あ、あのっ、別に覗きとか盗み聞きとかする気はなくて！ えと、その、シャワーを使った後で休んでたら二人が入ってきて、出るに出不れなくてっ！ だから、その、ごめんなさい！」

頭を下げて、逃げだそうとする。しかし一瞬遅く、松宮先輩に腕を掴まれてしまった。スポーツマンで背も高い先輩はそれだけ腕の力も強くて、逃げようにもふりほどけない。

「さあて、困ったなあ」

年の功か、どうやら一番先に冷静さを取り戻したらしい先輩が、苦笑しながら頭を掻いている。

「由維のエッチな声、全部聞かれちゃってたんだ。どうする？」

先輩がそう言うと、後ろで宮本さんが真っ赤に

なつて俯いた。

「あ、あのっ……」

「こーゆー場合はアレかね、口止めのために二人がかりでこの子を犯すつてのが定番だっけ？」

「っ！」

にやりといやらしい笑みを浮かべた先輩の顔を見て、思わず悲鳴を上げそうになった。けどそこに宮本さんの声が割り込んでくる。

「先輩、パソコンでエッチなゲームのやりすぎですよ。あと、成人向けコミックとか」

なんだか呆れたような口調。

「私が見ている前で、他の子を犯すんですか？」

「あ、やつぱり怒る？」

「当然じゃないですかあ」

「そっか、じゃあ仕方がない。諦めよう。でも……」

先輩は何故か、掴まえているあたしの手に顔を近づけた。

「口外無用だよ？ シャワー室でひとりエッチしていたって言いふらされたくなければ、ね」

「っ！」

あたしは飛び上がりそうになるほど驚いた。どうしてばれたのだろう……と考えたが、すぐに答えを見つけた。

二回目をした後、シャワーで洗い流す前に二人が入ってきてしまったのだ。指にはまだ、女の子の匂いがほのかに残っている。

「あっ、あっ！ 絶対、誰にも言いませんから！」

「よろしい」

ようやく、手を放してくれる。あたしはぴよぴよと頭を下げて、逃げるようにシャワー室から出ていく。

「じゃあ由維、続きしようか？ 先刻はもうちよつとつてところで邪魔が入ったから、欲求不満でしょ？」

背後から、そんな台詞が聞こえてきた。

* * *

服を着ていると、またシャワーの水音が聞こえてきた。

息を潜めて耳を澄ませると、それに混じって微かに女の子の甘酸っぱい声も。

つい、ドアに張付くようにして聞き耳を立ててしまう。いけないと思いつつも、エッチなことには興味ありありの年頃だ。

「女の子同士って、案外普通のことなのかなあ」

宮本さんの喘ぎ声に意識を集中しながら、ぼんやりとそんなことを考えた。

公美さんばかりじゃなくて、宮本さんとか、笙子とか。ひよつとしたら聖さんだって本物かもしれないし。

これまで「特別なこと」と思っていた同性愛って、実は、けっこうありふれていることなのかもしれない。

「女の子同士で愛し合うのも、エッチするのも、それで気持ちよくなってしまうのも普通のこと？」

だったらあれかなあ……公美さんとちゃんと普通にお付き合いすれば、もう痴漢はしなくなるか

なあ……っつて！ なに言ってるのよバカッ！ あ
いつは、あたしの身体だけが目当ての変態なんだ
からね！」

あたしはぶんぶんと頭を振って、その危険な考
えを振り払った。

『大切な用アリ。PM4時、駅前で待つ。』KU
MI』

久しぶりに、公美さんからメールで呼び出された。

こんな日に限って他の友達からのお誘いもなく、仕方なく指定された時刻に駅へと赴いた。

「……なんの用？ わざわざ呼び出したりして」

今朝だつて、電車の中で会ってるのに。きっと、触るのに夢中になってるから用件を忘れるんだ。

「言つとくけど、食事は付き合わないよ」

あたしは冷たく言い放った。

素晴らしいご馳走や美味しいワインには未練があるけれど、また公美さんと一緒に食事をして気持ちよく酔っぱらってしまったら、今度こそ終わりという気がする。つけ込まれる隙を見せちゃいけない。

「冷たいんだから」

公美さんが苦笑する。

「ひとつ、お願いがあるの」

「お願い？ やらせろつて？ 冗談じゃない」

「そんな事じゃないわ。それなら、お願いなんかせずに無理やりするもの」

「そーゆーこと、さらつと言わないでほしい。」

「それより、ね、君の高校つてもうじき学園祭でしょ？」

「……どうして知ってるの？」

「関東圏の主要な女子校のイベントは全部チェックしてあるもの」

胸を張って自慢げに言う。もちろん、あたしは呆れていた。

「君のクラスは何をやるの？」

「……クレープ屋さん」

「いいわね。ねーねー、招待状ちょうだい」

「どーして、あんたなんか」

冗談じゃない。学校にまで乗り込まれてはたまらない。

「私と美鳩ちゃんの仲じゃない、ね？」

いきなり抱きつかれた。街中の、駅前なんて人

通りの多い場所です。

「や、やめてよ!」

「ね、招待状?」

「ヤダ」

「明日の電車で、ものすごく気持ちのいいこと
されたい?」

「絶っつ対にイヤ!」

「じゃ、招待して」

「うう……」

公美さんの目は本気だった。

* * *

「やつほー! 美鳩ちゃん、来たよー」

陽気なその声に、頭を抱えたくなくなった。

大声で名前を呼ぶな、と怒鳴りたい。

学園祭の当日、一般公開の日曜日である。あたしは公美さんに見つからないように隠れていた。かつただけど、薄情なクラスメイトたちがそれを許してはくれなかった。

「あんたが売り子をやらずにどうするの? その顔と胸で男性客を集めなさい! クレープ屋なんて、女性客は一定数が見込めるんだから、いかに男に買わせるかで売り上げが大きく変わるんだからね!」

と。

おかげで、一般公開と同時にろくに休憩ももらえないような状態が続いている。はつきりいつて労働基準法違反だ。

それでもお客さんのピークが過ぎて、ようやくひと息つけるようになった頃に公美さんがやってきた、というわけだった。

「やあん! 美鳩ちゃんてば可愛いっ!」

あたしを見るなり、公美さんが歓声を上げる。

クラスメイトたちの陰謀で、あたしはアンミラの制服に似たデザインの、やたらと胸を強調した衣装を着せられていた。もちろんスカートはピンク色のミニである。

公美さんはおもむろにショルダーバッグから小さなデジタルカメラを取り出すと、パシャパ

シャとあたしの写真を撮り始めた。

「もお、商売の邪魔！ あっち行ってよ！」

「「「らこら、お客さんにそーゆーこと言わないの」

男性客向け売り子であるあたしの横で、『女性客向け売り子』をしていた聖さんが口を挟んでくる。

「で、こちらの綺麗なおねーさんは八トの知り合いい？」

「え？ あ、えつと……」

訊かれて、言葉に詰まった。さて、なんて答えたらいいんだろう。

もちろん正直に話すわけにはいかないのとつさに嘘をついた。

「え、えつと……い、従姉なの」

「へえ」

「誰が従姉だった？」

あたしにだけ聞こえるように、公美さんが小声でささやく。あたしも小さく言い返した。

「ホントのこと言ってもいいの？ あたしをつけ

狙う痴漢だった」

「恋人って紹介してくれないの？」

「誰がつ！」

最後だけ思わず声が大きくなってしまったけれど、幸い周囲のクラスメイトは特に気にも留めていないようだ。

「知らなかったなあ。八トにこんな美人の従姉がいたなんて」

聖さんを筆頭に、みんな素直に感心している。

「これ、どうぞ」なんて、焼きたてのクレープを差し出したりしている子もいた。

この辺は女子校の悲しさか、一年生には特に「綺麗なお姉さま」には弱い生徒が多い。性格に致命的な難があるとはいえ、公美さんは黙ってさえいれば、十人が十人とも認めるような正統派美女なのだ。

「八トの交代まで、私が校内をご案内しましょうか？」

そう申し出たのは聖さんだった。

「迷惑じゃない？」

「まさか。こんな素敵なお姉さまのエスコートができるなんて光栄です」

応えながら、顔がにやけている。どうやら聖さんは年上もOKらしい。そういえば上級生のお姉さま方にも人気のある人だった。

当然、公美さんも嬉しそうである。彼女の性格を考えれば、美人の聖さんを伴っての女子校見物なんて、そりゃあ楽しいに決まっている。

あたしも特に異論はない。頭痛の種を聖さんに押し付けることができ、しばらくは鼻歌交じりに売り子の仕事をこなしていた。

……が。

時間が過ぎると、だんだん不安になってきた。

二人はなかなか戻ってこない。もうじき交代の時間なのに。

(……まさか)

あたしは、大変なことに思い当たった。

学校の中だから……と油断していたけれど。もしかして公美さんは、どこか人目につかないところに聖さんを連れ込んで、あんなことやこんなこ

とをしているのではないだろうか。

いくら大人っぽい聖さんだって、公美さんの前ではまだまだ子供。いいように弄ばれてしまっているのかもしれない。

学園祭の校内だって、その気になれば人目につかない場所はいくらでもある。

トイレに連れ込まれたりとか、体育館のシャワー室とか。

考えまいとしても、嫌な光景が頭に浮かぶ。

あたしがされたみたいに、両手を縛られて服を脱がされて、あんなことやこんなことをされている聖さんの姿。身体中触られて、舐められて、指とか、変なおもちやとか中に入れられて……。

ああ。すぐくまずい状況下もしれない。聖さん、あんな変態と二人きりにしてごめんなさい。どうか無事でいて……。

どんどん、考えがエッチな方向に進んでいく。

胸がドキドキする。

心配でいてもたってもいられなくなった頃、ひよっこりと聖さんが一人で戻ってきた。思わず、

「よかった、無事で。変なことされなかった？」
と言いかけて、慌てて口をつぐんだ。

その代わり、黙って観察。

なにか、変なことをされた形跡がないかどうか。

(あ……)

タイの結び方が妙にルーズで、ブラウスの一番上のボタンがはずれているではないか。

これってまさか……。

いやいや、違う。聖さんはいつも、こんな風にルーズな制服の着方をするのだ。

でも、心なしか頬が赤いような気もする。しかし確証は持てない。

「ご苦労さん。ハト、交代するよ」

「……う、うん」

何もなかったのかどうか確かめたい。が、そんなこと訊くに訊けない。

「公美さんは第二校舎の屋上にいるから。早く行ってあげなよ」

何気ない調子の聖さんの台詞だったが、その中のひとつの単語にあたしはびくつと反応した。

第二校舎の屋上？

一般公開されている第一校舎と違って、第二校舎は今日がらんとしている。そんな危険な場所に、聖さんは公美さんと二人きりでいたのだろうか。

あの公美さんが、美人でスタイルのいい現役女子高生と二人つきりでいて、しかも相手はその気があるかもしれない聖さんで。

何もない方がおかしい、という気がする。

どうしよう。聖さんに何かあつたら、公美さんを野放しにしていたあたしの責任だ。

胸がきゅうつと苦しくなる。

「どしたの、ハト？ 早く行かないと」

「え……う、うん」

聖さんの様子は普段と変わらないみたいだけれど、でも、本当のところはわからない。

あたしは曖昧に返事をして第二校舎へ向かった。

* * *

屋上へ行くと、公美さんの姿はすぐに見つかった。

給水塔の下の、ちょうど座るのに都合のいい段になった部分に腰掛けている。手にはたこ焼きのパックと烏龍茶の紙コップを持っていて、あたしに気がつくとにこつと笑って差し出してくる。

休む間もない労働で疲れて空腹だったので、素直にその好意を受け取った。大きなたこ焼きをひとつ口に放り込む。

学園祭で素人が焼いたにしてはずいぶんと美味しい……と思ったところでふと思いついた。たこ焼きを売っていたのは料理部だったはず。あそこ部長は、この学校の生徒にも人気があるお好み焼き屋の娘ではなかったか。いつてみればプロの仕事である。

八個入りのたこ焼きのうち五個をあたしが平らげ、烏龍茶で喉を潤してようやく一息つくことができた。

時刻はもう夕方、正面に大きな紅い夕陽が見える。学園祭の一般公開ももうすぐ終わりだろう。

今日は充分すぎるくらいに働いたんだから、後片付けは聖さんたちに任せても文句は言われまい。

あ。

聖さんといえば。

「……あの」

「ん？」

たこ焼きに気を取られて忘れていたことを、ようやく思い出した。

「聖さんに……何かした？」

「何かって？」

「だから……、その……普段あたしにしてるようなこと」

「さあ、ね」

公美さんは悪戯つ子のような笑みを浮かべる。

「聖子ちゃんに訊いてみたら？」

「訊けるわけないじゃない！ ね、ホントのこと言って」

「ハトちゃんってば、やきもち？」

「誰がつ！」

思わず大声で叫ぶと、公美さんが小さく笑って

あたしの顔を指差した。

「歯に青ノリついでるよ」

「えっ？」

慌てて口を押さえようとして、だけどその前に公美さんに手首を掴まれてしまった。

「私が取ってあげる」

「っ！」

見事な、としかいいようのない早技で唇を重ねてくる。

「う……ん……」

すかさず、舌が入ってくる。青ノリが付いているであろう、唇や歯を舐めている。

あたしは抵抗しようとしたけれど、両手首をしつかりと掴まれて身動きが取れなかった。ようやく公美さんの顔が離れたのは、口中隅々まで舐められてしまった後のこと。

「ソース味のキスって、あんまりムードはないわね」

「ちょ、ちょっと！ 学校でこんなことして、誰かに見られたら……」

火照った顔を両手で押さえながらあたしは言った。

「誰もいないわよ。だからもう少し……ね」

また、近付いてくる。

肩を抱かれて、もう一方の手が胸の上に乗せられて。

「や……だ……」

「君、クラスではハトちゃんって呼ばれてるんだって？ 可愛らしくていいね」

ちゃん、と軽く唇と唇が触れる。続いて頬に、おでこに、そして耳たぶに。

「や……ん」

胸の上の手が動いて、ブラウスのボタンをひとつずつ外していく。上から四つ目まで外されたところで、手が中に滑り込んできた。ブラジャーの上から胸を包み込む。

「……ダメだって……ホントに……」

「大丈夫」

柔らかくふにふにと、乳房がこね回される。もう乳首が固くなりはじめていた。

胸を揉まれながら、何度も何度もキスされてしまふ。

「ねえ……ヤダよ、こんなの……」

もちろん、公美さんはあたしの苦情なんかには貸さない。しばらく胸を弄んでいた手が、やがて下へと移動を開始する。その頃にはもう、あたしは強く抵抗する意志を失っていた。

ピンク色のミニスカートがまくり上げられる。

本物のアンミラの制服なら、下はショーツパンツ風になっている筈んだけど、これは裁縫の得意なクラスメイトが作った模造品。構造は普通のミニスカートである。

「んっ……くん……」

パンツの上から、敏感な割れ目を指でなぞられる。身体がびくつと痙攣した。

強すぎず、弱すぎず。本当に絶妙の加減で指が滑っていく。

徐々に、割れ目の奥へと押し付けられてくる。

「あん……あっ……んっ……ふうん……んっ」

周囲に人がいないとはいえ、ここは学校の中。

大きな声は出せない。きゅっと閉ざした唇の端から、切ない吐息が漏れる。

「ほおら、感じちゃってる」

耳元でささやく、公美さんの甘い声。背筋がぞくぞくする。

公美さんの指が、パンツのゴムの部分にかかる。

「ちよつと腰浮かせて」

「ん……」

無意識のうちに、その言葉に素直に従っていた。パンツはするりと膝のあたりまで下ろされ、夕陽に暖められたコンクリートの感触が、直にお尻に伝わってくる。

公美さんはあたしの脚を片方持ち上げ、パンツから足を抜かせてしまった。自由になった脚が開かれる。あたしの胎内から流れ出した蜜が、お尻の方まで流れ出した。

「もうトロトロになってる」

「ひっ……ん」

一番敏感な部分に、直に指が触れる。

最初は一本で割れ目に沿ってなぞって。

やがてそれが二本に増えて。

次に二本になった指は、二本で割れ目を広げて、さらけ出された粘膜を残った一本で弄ぶ。

「はぁ……っ、あっ……あっ、あぁっ……あぁんっ！」

ぴちゃぴちゃ。

くちゅくちゅ。

あたしの下半身から、エッチな音が聞こえてくる。

公美さんの指は魔法の指だ。ちょっと触られただけで、信じられないくらいに気持ちよくなってしまっ。

いやらしい涎を垂れ流して、あたしはその愛撫を受け入れていた。乾ききったコンクリートの上に、黒く濡れた染みが広がっていく。

ビクッ、ビクン！

時折、意図せずに身体が痙攣してしまっ。快感の小さなピークを越えた証だ。

あたしの身体は軽いエクスタシーを何度も繰り返しながら、さらなる高みへと昇り続けていた。

「う……うんっ！ く、うん……」

指が、中に入ってくる。

羨ましいくらいにすらりと長い、公美さんの中指。

ゆっくり、ゆっくり。

繊細なあたしの粘膜を傷つけないように。

一番、深い部分へと辿り着く。

公美さんの指を奥まで受け入れたのは初めてだった。お腹の、ずつと奥の方がびりびりと震えているように感じた。

「気持ち、いい？」

「……………ん」

小さくうなずく。

あたしの理性はあの部分と同様にトトロ口にとろけて、どこかに流れていってしまった。抵抗する気なんてまるで起きなくて、ただ公美さんが与えてくれる快楽を貪っていた。

「く、うう……ん、ん……」

指がゆっくりと引き抜かれる。

第一関節から先だけが中に残って、入り口付近

の敏感な部分をくすぐる。

そしてまた、奥へと挿入される。

ゆっくりと引き抜かれる。

何度も、何度も繰り返される。

指の一往復ごとに、悲鳴を上げそうなほどに感じてしまう。今まで経験してきた浅い部分だけの愛撫とは違う、膣内全体に加えられる刺激に酔いしれていた。

「は……ああ……。あつ……。い、いい……」

「気持ちいい？ いったちやいそう？」

公美さんが優しい目であたしを見つめる。あたしも、焦点の合わない潤んだ瞳で見つめ返す。

「うん……すごい……いつ、すごい……感じちゃう……」

すごく、感じている。

なのに、むしろ普段よりもリラックスしているみたい。あたしはゆっくりと、与えられる快感を楽しんでいた。

電車の中じゃないから。

ここだって、いつ人が来るかという不安はある。

だけど、周囲に人がいるわけじゃないから。

素直に、公美さんの指だけに意識を集中することができた。

あたしの中を何度も往復する公美さんの指が、岡村美鳩という鉦脈の中から快樂という名の鉦石を掘り出していく。

「は……あつ！ ああつ……あんっ！ ああつ」

かなり長い間、楽しんでいたように思う。いつものように、駅に着くまでなんていう時間制限はなかったから。

徐々に高まっていく快感。

最後は、突然やってきた。

じわじわと、しかし着実に上昇を続けていた快感のゲージが、あるラインを超えた瞬間にぐんと跳ね上がった。あたし自身、まるで予想もしていなかった反応だった。

「っ！」

久しぶりに、公美さんの指で達する快樂の頂。

身体中の神経に高压電流でも流されたような感覚だった。

悲鳴を上げそうになったあたしは、無我夢中で
公美さんにしがみついて唇を重ねていた。

学園祭のあと数日、公美さんと会わなかったのは幸いだっただ。

思い出しただけで赤面してしまう。あの日は学校の屋上で、まるで恋人同士でもあるかのように抱き合ってしまった。

ほとんど抵抗らしい抵抗もせずに、公美さんの愛撫に身を委ねてしまった。

とても気持ちよくて。

少なくとも、している間だけは「もつとして欲しい」と思っていた。

あんなに感じてしまって、ついに指を奥まで入れられて。中指だけだからよかつたものの、危うくバーズをあげてしまうところだった。

あまり、いい傾向とはいえなかった。少しずつ、公美さんの愛撫を受け入れることに対する抵抗が少なくなっている。

もう、ほとんど既成事実といってもいい。

どんなに常識はずれの出来事だって、毎日続け

ばそれが当たり前になって慣れてしまう。

このままではいけない。

どこかで断ち切らないと、ずるずると最後まで流されてしまいそうだ。

だから。

うちの学校が、学園祭の後すぐに夏休みに入るのはラッキーなことだった。その後、朝の電車では一度会っただけで終業式を迎えた。これでもう、九月まで朝の電車に乗ることはないのだから。

* * *

夏休みに入ったばかりのある日。

街へ買い物に出て、本屋でふとワインの本が目に入った。なんとなく興味を引かれて、手に取ってみた。重くて分厚い本に手こずりながら、ページを繰っていく。

「え……と、フランス……ブルゴーニュ……、ボンヌ・マール……だっけ」

初めて公美さんと食事をした日、ご馳走になっ

たすごく美味しいワイン。

あたしが生まれた年のワイン。

載っているだろうか。

「……あつた」

説明文を読む。

ドメーヌ・コント・ジオルジュ・ド・ヴォ
ギユエ。シャンポール・ミュジニー村に本拠を置
く名門。

ボンヌ・マール。深みのある外観と、クレ
ム・ド・カシスのような濃縮された果実のアロマ
が感じられるグラン・クリュ

一九八〇年代の物は、どれも二〜三万円の値が
付いていた。小売価格がこれなら、レストランで
頼めばもつと高いのだろう。

やっぱり、すごいワインだ。

あの味を思い出して、思わず溜め息をついた。

それからふと思いついて、ロマネ・コンティを
探してみる。

ドメーヌ・ド・ラ・ロマネ・コンティ。世
界でもつと敬意を集める生産者。このドメーヌ

のワインに対しては、どの生産者、どのワインも
ひれ伏すしかない。

その中でも最高峰が、かのロマネ・コンティ。

熟成を十分に経たワインは、コルクを開けた瞬
間から永い眠りから覚めて清々しい香りが広がり、
一度グラスに注ぐと周囲を取り巻く全ての状況を
変えてしまう。クジャクの羽が口の中で広がるよ
うな感覚のワイン

ちなみに値段は、年によって十数万円から七十
数万円。

「やっぱり、すごいなあ。公美さんにおねだりす
れば、ご馳走してもらえるかなあ……」

一瞬そんなことを考えて、慌てて頭を振る。

確かに、ご馳走してはもらえるだろう。だけど
「タダで」ではない。

あたしのバージンと引き替えに……なら、公美
さんはきつと喜んでご馳走してくれる。

「でも、いくらバージンとはいえん十万円以上つ
てのは……世間一般の援助交際の相場より高いよ
ね……」って、だからっ！ そんなつもりはないっ

て！」

あたしは本を置いた。これ以上美味しそうなワインを見ていたら、危険な考えになりそうだった。やっぱり初めては、ちゃんとした素敵な恋人とするべきだ。間違っても、同性愛者の痴漢なんかにあげちゃいけない。

「そういえば……」

公美さんは最近、何をしているんだろう。

夏休みに入ってから当然会っていないし、なんの連絡もない。メールで呼び出されたりするかと思っていたんだけど、そんな気配もない。

あたしがいないから、他の女の子を襲っている？ けど今は夏休みだから、他の獲物もないだろう。部活や夏期講習で電車に乗る女子高生もいるだろうけれど、その電車は普段ほどには混まないはずだ。痴漢するには差し障りがあるに違いない。

「結局、その程度の気持ちってことよね。聖さんはちゃんと、頻繁にメールや電話くれるのに……って、だからっ！ 違っって！」

なんだかここ数日、情緒不安定気味だった。

公美さんに迷惑していたことは間違いないんだけど、それが日常になりつつあったから、急に会わなくなると調子が狂ってしまう。

「もう、忘れちゃえばいいんだって。あんな奴のこと」

そう自分に言い聞かせて、歩き出そうとした。

その時。

「あ、美鳩さん？」

不意に、背後から声をかけられた。可愛い、女の子の声。

振り返ると、一冊の本を抱えた長い髪の美少女が立っている。あの、菱川笙子だった。

「あ、久しぶり。今日は買い物？」

「ええ、これ買いに」

持っていた本の表紙をこちらに向ける。

「あつ、美作百合子の新刊！ 今日発売だったっけ？」

「ええ、しかも……」

笙子の手に、小さな紙切れが現れる。そこに書

かかれていた文字を読んで、

「えええっ！」

不覚にも、大声を上げてしまった。近くにいた他のお客さんが、何かとこちらを見る。

『新刊発売記念・美作百合子サイン会 整理券』
と。

美作百合子は、笙子が大のお気に入り作家である。女の子同士の恋愛物が中心という、少々特殊な作風ではあるが、その美しく優しい文章はあたしも大好きだった。

同性の恋人を持つ笙子が、あたしが同性愛に偏見を持っていると思ひ込んで、美作百合子のデビュー作を貸してくれたのがきっかけで読むようになったのだ。その後、笙子から既刊をすべて借りて読んだ。同性愛の是非はともかくとして、この作家の本が面白いのは事実だった。

「うわあ、いいなあ。よし、あたしも買っちゃおう！」

壁に貼られていたポスターを見ると、サイン会は十日ほど先の日曜日だった。その日、特に他の

予定はない。

あたしは平積みされていた新刊を手にとってレジに向かい、笙子と一番違いの整理券を手に入れた。

* * *

その後もしばらく、平和な夏休みが続いた。

公美さんに襲われることもなく、聖さんや真澄たちと遊びに行ったり、笙子と会ったり。

痴漢されない生活が、日常となりはじめた頃。

久しぶりに、公美さんと会った。

朝……と呼ぶにはやや遅い時刻。

それでもベッドの中でだらだらと惰眠を貪っていると、携帯の着メロが鳴った。

こんな早くに（実際には早くないけど）誰だろう、と思つて見ると、液晶には公美さんの名前が表示されている。

一瞬、無視してしまおうかとも考えたが、指が反射的に着信ボタンを押してしまっていた。

「……はい」

『やつほー！ 美鳩ちゃん、お久しぶりー』

陽気な声が聞こえてくる。

『天気もいいし、これからドライブにでも行かない？ 今、家の前まで来てるんだけど』

「え？」

慌てて居間に移動して、ベランダから下を見た。マンションの前に、赤いオープンカーが停まっている。その運転席で、こちらを見上げて手を振っている女の人がいた。

『こんな天気の良い日に、家にこもってるなんて不健康だよ』

「……でも公美さんと一緒にいるのは、不健全だと思っ」

『あはは、うまいこと言うね。座布団一枚』

相変わらず、なにを言っても全然堪えてない。

「でも、今日はダメだよ。友達と約束してるもん」

これから、聖さんたちとプールに行く予定。

『えー、そんなあ。久しぶりのお休みなのにー』

心底がっかりしたような、公美さんの声。最近会わなかったのは、仕事が忙しかったからなのだろうか。

あたしは小さく溜息をついた。

非情になりきれない自分が恨めしい。

「明日なら……」

と言いかけて、ふと気付いた。明日は笙子と一緒に出かけの約束をしている。

「……も予定があるから、えっと、明後日なら空いてるけど？」

『ホント？ ホントに？ じゃあ約束ね。明後日の十時に迎えに来るから』

「……念のため言っておくけど、日帰りだからね！ ホテルとか、まったく人気のない場所とかはダメだから！」

『……………』

沈黙の向こうに、微かな舌打ちの音がしたのを聞き逃さなかった。やっぱり、危ないところだった。

「……つたく。約束だからね！ それじゃ」

あたしは乱暴に電話を切って自分の部屋に戻った。

携帯を机の上に放り出し、ベッドにごろりと横になる。

少しだけ、胸の鼓動が速くなっていた。

「……………」

電話を切ってから思い付いた。

あたしが出かけるまでにはまだ時間があるから、コーヒーくらい淹れてあげればよかったかも。

「……………」

そんなことをしたら、またソファの上で色々なことをされてしまったに違いない。

キスされたり。

胸を揉まれたり。

あそこを触られたり。

「……………」

公美さんの、指の感触の記憶が甦ってくる。下半身が、じわっと熱くなってきた。

無意識のうちに、手がパジャマの中にもぐり込む。

「あ……………」

指が動き始める。

公美さんの指を、これまでにされた様々なことを思い出しながら、真っ昼間だというのにあたしはひとりエッチをはじめてしまった。

お気に入りの作家、美作百合子先生のサイン会。
あたしは笙子と待ち合わせて、二人でお金を出しあつて花束を買つてから、会場の本屋へ向かった。

サイン会目当てのお客さんは、ゆうに百人はいただろうか。ほとんどが中学生から二十代半ばくらいの女性。その中に何故か、どう見ても大学生く社会人くらいの男性のグループがいて、あたしと笙子は首を傾げた。こんな人たちが、「女の子同士のほのかな恋愛感情」を描いた美作百合子先生の小説を読むのだろうか。

しかしまあ、ボーイズラブ小説の読者の大半は女の子なのだから、逆に男が百合小説を読むものありなのなのかもしれない。どうやら、まだまだ奥の深い世界のようなのだ。

「でも、美作先生ってどんな人なんだろうね」
作風が特殊なためだろうか、あまり詳しいプロフィールを公開していない。あたしが知っている

のは、まだ二十代の女性ということだけだった。
「きつと、素敵な方に違いないですね。あんなに素敵な物語を書かれるんですもの」

笙子がうつとりとした表情で言う。

「どんなに素敵な人でも、浮気しないようにね」
「な、なにを言うんです。そんなことあるわけないじゃないですか！」

本気で反論する笙子に、思わず苦笑した。なにしろ彼女は真正銘の同性愛者で、自分が通う女子校の体育教師とお付き合いしているのだ。

「れ、恋愛感情とはまた別の、純粋な憧れなんです！」

「はいはい」

しかし笙子は恋人の進藤先生のことを語る時も、同じような熱っぽい瞳をしている。あたしには、その二つの感情の違いがよくわからない。

やがてサイン会が始まって、人の列がゆっくりと進んでいく。

もうじき、あたしたちの番。

慣れた手つきでサインをしていた美作先生が、

顔を上げてサイン本を前の人に差し出す。

その顔を見て

あたしは思わず、大声で叫びそうになった。だって、だって。

それは、ものすごくよく知っている顔だったから。

引きつった表情で固まっているあたしの腕を、誰かが軽く引つ張った。横を向くと、笙子が何か言いたげな表情で、あたしと美作先生を交互に見ている。

そうこうしているうちに、あたしたちの番になった。

美作先生が顔を上げてあたしたちを見て。

一瞬、目を丸く見開いた。

「どういう、ことですか？」

笙子が耳元でささやく。

「……し、知らない。あたし、ホントになにも知らない」

ぶんぶんとう首を振る。

そう。あたしは本当になにも知らなかった。

例えば、公美さんの職業が何か、なんてことも

目の前で、花束や差し入れのお菓子に囲まれて座っているのは、人気作家の美作百合子先生なんかじゃない。

あたしが知っているその人の名は、里原公美というのだ。

公美さんは悪戯な笑みを浮かべて、ぺろっと小さく舌を出した。

* * *

「どういうことよ？ あたしのこと、騙してたわけ？」

翌日。

約束通り、ドライブに行こうと迎えに来た公美さんに、あたしは詰め寄った。

公美さんは軽く苦笑している。

「騙すなんて人聞きの悪い。職業は何かなんて訊かれたことはないし、君が私の本を読んでも知らなかったんだから」

「……」

確かに、言われてみればそうだ。

何度か疑問に思ったことはあるけれど、公美さん本人に職業を尋ねた記憶はなかった。あたしが公美さんについて知っているのは、携帯の番号とメールアドレス、そして学園祭の招待状を送るために訊いた住所だけだ。

しかし、これで様々な疑問は吹き飛んだ。

どうして、普通のOLなら仕事をしているはずの時刻にあたしの前に出没できるのか。

どうして、あんなにお金持ちなのか。

美作百合子は、長者番付の作家部門に載るほどではないが、それでもかなりの人気作家だ。年収は数千万円にはなるらしい。

「あー、もう！　せつかく素直に感動してたのに、イメージ崩れちゃった。笙子もショック受けただよ」

「それは別に、私のせいじゃないでしょう？」

「あんなのせいだよ。美作百合子の正体が、変態痴漢レズ女だったなんて！」

「だからこそそのあの作風、とは思わない？」

「そ、そりゃあ……」

確かに、美作百合子の小説の多くは女の子の同性愛ものだ。それ故の固定ファンも多い。

「でも、だからって痴漢行為はないでしょ！　あなたの小説、全部純愛ものじゃん」

「だけど、セックス描写はあるでしょ」

「そりゃあそうだけ……」

確かに、手をつないだりキスだけにとどまらない作品も多い。そういえば、ある作品にはセーラー服のスカーフで両手首を縛って……というシーンもあって、そのエロティックさにドキドキした記憶もある。でも、それはすべて双方の合意の上の行為だった。公美さんがあたしにするような、強制猥褻とは違う。

「でも、人気作家・美作百合子がレズ痴漢の常習犯だなんて、知られたらまずいんじゃない？」

「ちよつとまずいわね」

その割には落ち着いた口調で、あたしは少しむつとした。ここで、少しでも狼狽えてくれれば

可愛げもあるというのに。

「このネタ、週刊誌にでも売っちゃおうかなあ。スクープだよな。いくらくらいになるかなあ？」

「売りたいければ、売れば？」

公美さんはあくまでも強気だった。

「君も一躍有名だね。レズビアン作家・美作百合子につけ狙われた巨乳女子高生、って。写真週刊誌にカラーで載れるわよ」

「うあ……」

いかにもありそうな話だった。

週刊誌がこの事件を面白おかしく記事にするとしたら、当然、その被害者にもスポットが当てられることになる。それが、あたしのような可愛い女子高生だったらなおさらだ。

あまり変なことでも有名になるのは困る。週刊誌を見た変なストーリーカーにつきまとわれることになるかもしれない。

世の中、痴漢やレイプされても泣き寝入りする女性が多い理由がわかったような気がした。

どうやら、公美さんを脅すのは諦めた方がよさ

そうだ。あたしは少し作戦を変えることにした。

「ま、まあ……、公美さん次第じゃ黙っていてもいいけどね」

公美さんがふつと笑う。あたしの考えなんて見透かしたように。

「なにか、交換条件でも？」

「……ロマネ・コンティ、ご馳走して」

とりあえず、最初に思い付いたことを口にした。相手は年収ン千万。数十万円のロマネ・コンティくらい、おねだりしても罰は当たるまい。

「じゃ、私からもひとつ条件」

「なに？」

「ロマコン付きの豪華な食事の後の、熱ーいキス」

「う……」

一瞬、言葉に詰まった。しかし、以前の条件ではバージンと引き替えだったロマネ・コンティが、キスひとつで飲めるのなら……。

「き、キスだけ？」

「『熱ーいキス』だから、少しは触る」

「少しだけ？」

「少しだけ」

「し、縛ったり、お尻に指入れたり、変なおもちや使ったりしない？」

「絶対しない」

「……なら……いいよ」

変な話だけれど、あたしは公美さんを信用していた。

二人きりになったら、公美さんは「絶対に」触ったりキスしたりしてくる。あたしがどれほどイヤと言っても、それは間違いない。今だって、あたしを助手席に乗せて車を走らせながら、左手はあたしの太股を撫で回しているのだから。

だけど、こうしたことを「絶対する」のと同じくらいの確率で、「絶対しない」と約束したことは守るはずだった。

* * *

その夜。

あたしは夢心地で家に着いた。

最っ高のフルコースと、ロマネ・コンティ。

普通に生きていたら、一生味わえないんじゃないかというくらいの素敵な経験だった。

いつまでも余韻に浸っていて、ふと気付くと家のソファで公美さんに抱きしめられていた。あたしも、公美さんの身体に腕を回した。

唇が重なる。

柔らかな感触。

久しぶりのキスは、学園祭以来だ。

舌が入ってくる。あたしも舌を伸ばして応える。

柔らかくぬめった粘膜が絡み合う。

「ん……うん……」

口をぴったりと塞がれて、息ができないほどに濃厚なキスだった。

密着した身体。冷房の効いた部屋では、その温もりが心地よい。

酔いが回っているためだろうか。キスだけであたしの顔はかあっと熱くなって、下半身がむずむずしてくる。口と……そして下半身の口から、熱

い涎が滴っていた。

「ん、ふわぁ……」

公美さんの唇が離れる。唾液の透明な糸が二人の唇をつないでいる。

あたしは大きく息をついて、潤んだ瞳で公美さんを見上げる。優しい笑顔が目映った。

「もっと、キスして欲しい？」

「こくん、とあたしはうなずいた。

自分でもその気になつて居る時のキスは、柔らかくて、暖かくて、とても気持ちがいい。

約束通りロマネ・コンティをご馳走してもらったんだから、キスくらいいくらでもさせてあげちゃう。

うっん、違う。今は、あたしもキスしたい、キスして欲しいって思っている。

だから何度も何度も唇を重ねて、公美さんの唇や舌の、柔らかくて滑らかな感触を楽しんだ。

いつの間にか、公美さんは片手であたしを抱きながら、もう一方の手を胸の上に置いていた。

ゆっくりと、優しく動く指。柔らかく形を変え

るあたしの乳房。

それでも、あたしは抗わなかった。目を閉じて、公美さんの愛撫に身を委ねていた。

それが数分間続いた後、耳に熱い息が吹きかけられた。

「服……脱がしてもいい？」

あたしは目を開いて公美さんを見た。

「……あたしの裸、見たいの？」

「見たいのも事実だけど、それよりも直に触りたいの。だめ？」

「……いいよ。今日だけは……ね」

「ありがと」

今日買ってもらったばかりの、まるで良家のお嬢様みたいな雰囲気のスーツが脱がされていく。ドライブの途中、昨日のサイン会の話になって、その時笙子が着ていた服が素敵だったという話をしたら公美さんが買ってくれたのだ。

そういえば、「女性に服を贈るのは、それを脱がすため」なんて諺があったっけ。いや、これは諺じゃないか。中国の故事……でもなくて。まあ、

別にどうでもいいことだけだ。

そんな関係ないことを考えているうちに、あたしは下着姿にされていた。まったく見事な早技という他はない。きつと、こういうことには慣れているのだろう。

服を脱がし終わった公美さんは、あたしのお腹の上にキスをした。そのまま少しずつ上に昇ってきて、胸の谷間を通り抜け、鎖骨へと移動していく。

「や……あんっ！」

唇が触れるか触れないかというその微妙な距離がくすぐつたくて、あたしは身体を擦らせた。

公美さんの手が、あたしの背後に回される。ブラのホックの部分に指をかけたところで動きを止め、真っ直ぐにあたしを見た。

その視線が「ブラを外してもいいか？」と訊いているような気がして、あたしは小さくうなずいた。とたんに、締め付けがなくなつて胸が楽になる。

露わにされた乳房を、公美さんの手が包み込む。

今度は両手で、両方の胸をいっぺんに。

親指と人差し指で乳首を摘んで、残り三本の指で乳房を揉む。

あたしの身体がびくつと震えた。そこは固くなつて、自分でも意外なくらい敏感になっていた。「……ん、あん」

公美さんの顔が近付いてくる。胸の先端に唇が触れる。そのまま、乳首は口の中に含まれてしまった。

「は……あ、あ……」

強く吸われる。先端に血液が集まつて、そこはいつそう固く敏感になつてしまう。

舌先が触れる。最初はつつくように。それから、乳首を舌の上で転がすように。

軽く、本当に軽く噛まれる。その微かな痛みを、あたしの神経は快感と受け止めていた。

「あっ……あん！ん……ああん、あん！」

優しい愛撫に応えて、切ない声が漏れる。

普段の自分の声よりもオクターブの高い、鼻にかかった甘い声。

乳首がスイッチになっっているみたいに、そこに刺激が加えられるたびにあたしはエッチな声を上げた。

「ねえ、下も触っていい？」

「え……」

躊躇したのは一瞬だけだった。次の瞬間には首を縦に振っていた。

あたしの意識は、ただ快楽を得ることだけに向けられていた。

まだパンツに隠されているあの部分が、熱く濡れているのがわかる。今そこを触れられたら、きつと気が遠くなるほど気持ちのいいことだろう。ずっと胸を弄んでいた手が、ゆっくりと下がっていく。胸からお腹へ、下腹へ、そしてパンツの上へ。

「はああつ！ あつ！」

薄い生地の上から割れ目をそつとなぞられただけで、あたしは短い悲鳴を上げて身体を仰け反らせた。脊髄にビリッと電流が流れたように感じた。

一瞬の衝撃の後で、身体の奥からまた熱いもの

が流れ出してくる。そこはもう本当に、お漏らししてしまったみたいに濡れている。

「下も脱がすよ？」

「……うん」

あたしは素直にうなずいて、軽く腰を持ち上げた。湿った小さな布が、するりと脱がされる。

これで本当に、全裸にされてしまった。身にもとっているものといえばソックスだけだ。

「……あ、待って」

脚を開かせようとする公美さんの手に、あたしは初めて逆らった。

「こら。ここまで来て抵抗するな」

「だって……」

それが嫌だったわけじゃない。ただ、あたし……すごい濡れちゃってるもん」

「それが見たいんじゃない。君が感じやすいのはわかってるんだから、今さら恥ずかしがらなかつたって」

「そうじゃなくて……ソファ……汚しちゃう」

決して、オーバーな話じゃない。

あの、学校の屋上でした時。終わった後で、あたしが座っていたコンクリートの上に残った染みの大きさを見て、思いつきり赤面してしまった。

同じことをソファの上でしたら、跡がお母さんに見つかってしまいかもしれない。簡単な染み抜きで落ちればいいけれど、ソファのクリーニングなんてこつそりとできることではない。

あれだけ感じていた状況下で、こんな冷静な判断ができた自分がちよつと可笑しかった。

「そつか……跡が残るのはまずいか」

公美さんも愛撫の手を止めて考える。

「でもさあ。マジな話、こんな中途半端で終わりにたくないんだけど。君だって、もつと気持ちよくなりたいでしょ？」

「うん……まあね」

あたしだって、いよいよこれからが一番いいところで終わって欲しくない。どうせここまですてしまったんだから、ちゃんと最後までいかせて欲しい。

「うんと、気持ちよくしてくれるんだよね？」

「もちろん。私の指と舌がどれほど気持ちのいいものか、君もよく知ってるでしょ」

公美さんは、お下品にも中指を立ててみせる。

あたしは小さな笑い声を立てた。

「だったら、さ……」

まだ、ちよつとだけ躊躇していた。

これ、言ってもいいものだろうか。

取り返しのつかないことをしているような気がするが、何を今さらという気もする。

「……」

「……ベッド、行こ？」

「やっぱり、言ってしまった。」

ベッドの上で、裸で公美さんと抱き合ったりしたら、本当に最後の最後までされてしまうような気もする。だけど今のあたしは、どこか「それでもいいや」って気持ちになっちゃってしまっていた。

ベッドという単語に、公美さんも笑みを浮かべた。あたしの背中と太股の下に腕を入れる。

「抱いていってあげる。掴まってて」

「……ん」

公美さんの首に腕を回すと、あたしはそのまま抱き上げられた。いわゆる「お姫様だっこ」の形で、自分の部屋まで運ばれていく。

ベッドの上にそつと横たえられると、また、胸がドキドキしてきた。公美さんを家に上げるのは三度目だけど、自分の部屋でエッチなことをしたことはない。少なくとも、あたしの意識がある時には。

しばらく、横になったあたしを品定めでもするかのように見下ろしていた公美さんが、ベッドに上がってくる。一度隣に添い寝してから、あたしの身体に覆い被さってきた。

唇にキス。続いて首筋に、鎖骨に、胸に、お腹に。

徐々に下に下がっていく。行き着く先は一つしかない。

「ひゃっ……あんっ！」

唇よりも先に、指がそこに触れた。熱を帯びてトロトロにとろけている、あたしのエッチな部分に。

割れ目を開いて、指の腹で擦って、クリトリスを指先でつついて、軽くつまんで。

そうした動きの一つ一つに反応して、あたしの身体がベッドの上で弾む。

「気持ちいいでしょ？」

「うん……うん！」

「もつと？」

「もつとお……ふ、ああん！ あ　っ！」

指が、入ってきた。

一センチ入って、五ミリ戻って。それを繰り返しながら少しずつ奥に進んでくる。

「ふう……あつ、あつ……あんっ！　ああっ……

ああん」

指の動きに合わせて、あたしのおそこも窄まったり弛んだり。柔らかくほぐれた粘膜が、公美さんの指に絡みつく。

「すごあい、こんなに熱くなって、どんどん溢れ出してきた。指一本なのに、こんなに締め付けちゃって」

「やあ……言わないでえ……あ、ん！　あんっ」

たった一本の指とはいえ、あたしにとっては充分すぎる大きさだ。自分の胎内にある異物の存在が、はつきりと感じられる。

「や、あ……動かさないでえ……」

一番奥まで辿り着いたところで、公美さんは小刻みに指を前後させはじめた。微かな痛みと、その何十倍もの快感があたしを襲う。

ぐちゅ、ぐちゅ、ぴちゃ、ぺちゃ。

湿った音に、長靴で泥濘の中を歩いた子供の頃の記憶が甦る。指の動きは小さなものの筈なのに、あたしの身体はそれくらいに大きな音を立てていた。

「ふあ……あつ、んあ……あんっ、んん……」

ああっ、あんっ！ あんっ！ あんっ！

指の動きだけで、あたしは間もなく達してしまっただけだった。なのに、公美さんの顔がその湿った部分に近付いていく。

小さな茂みを越えて、そして

「やああっ！ あああんっ、あああ　っ！」

舌が触れた。

先刻、乳首に対してそうしていたように、あたしのクリトリスを口に含んで舌で執拗に責めたてる。

指は、深々と挿入されたまま。

「だめっ、だめえっ！ あつ……やつ……あんっ、ああんっ！ しんじゃっ……おかしくなっちゃっ……っ！」

身体の内側と外側から、同時に加えられる快楽。複数の箇所への同時の愛撫って、得られる快感の量は足し算じゃなくて掛け算なんだ……って、朦朧とした意識の中で思った。

気が狂いそうなほどの愛撫から、無意識に逃れようとするあたしの身体を、公美さんの手がしっかりと掴まえる。もう一方の手と口は、あたしを狂わせるために動き続けている。

「だっ……あああんっ！　だ……めえっ！

ああ　っ！」

「ん……ん……」

最後の一瞬、舌がさらに強く押し付けられて。指が、ぐいっとなじ込まれて。

「あああんっ！ あああんっ！ ああああっ！
あああ　　っ！」

絶叫して肺の中が空っぽになる寸前、あたしの意識はぱんつと弾けて飛び散った。

* * *

どのくらいの時間、朦朧としていたのだろう。
はつきりとものを考えられるくらいに復活した
時には、汗が冷たくなっていて、あたしは公美さ
んの腕の中で寝ていた。

にこにここと微笑んであたしの顔を覗き込んでい
る公美さんと目が合う。なんだか恥ずかしくなっ
て、ぷいっつと顔を逸らした。

「どう、気持ちよかったでしょ？　これまで一
番、感じさせてあげられたと思うんだけど」

耳元でささやかれると、背筋がぞくぞくする。

「……………うん」

あたしは渋々うなずいた。認めたくなくなつて、
思いつき感じてしまったことは隠しようがない。

ベッドカバーはお尻の周りがまだ湿っていて、
はつきりと跡が残っている。

「しばらく会えなくて寂しかった分、堪能してく
れた？」

「うん……………って、なに言ってるのよ！」

あたしはがばつと起き上がった。

「寂しいわけがないじゃない！　こっちは、痴漢
に遭わずにせいせいしてたんだから！」

顔を真つ赤にしてそう言うと、公美さんはなに
が可笑しいのかくすくすと笑っている。

「君もしぶといね」

「え？」

「ここまでして、あれだけ感じていたのに、まだ
私に降参していない」

「と、当然でしょ。あんたは変態の痴漢。あたし
はその可哀想な犠牲者。それだけの関係よ！　今

日、ここまでさせてあげたのは、ロマネ・コン
ティのお礼。それだけ！」

「ホントにしぶとい。普通、これだけやったら私
の虜になるところだけ」

「……………」

実際には、もう虜になりかけているのかもしれない。最初の頃は本気で抵抗していたけれど、最近ではそんな気がなくなっているのだ。ただ、人前でしたり、あまりにも変態的な行為さえされなければいいかな、と思い始めている。

あたしはもう一度、まじまじと公美さんの顔を見た。

やっぱり美人だった。それも、お高くとまっっているような、取っつきにくい美人じゃない。愛嬌のある親しみやすい美しさ、とでもいうんだろうか。

スタイルもいいし、頭もいいし、話してても楽しいし、お金持ちで色々とご馳走してくれるし。

その上エッチがすごく上手で、とても気持ちよくさせてくれる。

どうして、彼女を拒まなければならないのだろう。冷静に考えると、わからなくなってしまう。

強いていえば、最初の出会い方がよくなかったことと、まだ同性ということに抵抗があること。

そして、公美さんがいったいどういうつもりであたしにつきまといてくれているのか、その真意を計りかねているためだろう。

「どうしたの？」

あたしがじつと見つめていると、公美さんは指先であたしの乳首をつんつとつついて言った。そのまま掌で乳房を包み込んで、身体を密着させてくる。

「ちょ、ちょっと……………」

あたしは戸惑いつつも、抵抗はしなかった。公美さんがもう一度するつもりなのか、単に身体を寄せ合っていただけなのか、判断がつかなかった。

「も、もう一回……………するの？」

「したい？」

「べ……………べつに」

それは、強がりでもなんでもない。かつてないほどの絶頂を迎えた後で、身体には心地よい倦怠感と満足感が残っていて、物足りないなんてことは全然ない。

しばらく公美さんと会わなかったせいか、実は最近、ひとりエッチの頻度が増えていたのだけれど、そのもやもやとした気持ちもすっかり消え去っていた。

それでも、もうしばらく愛撫を続けられたら、きつとあたしの身体は反応してしまうに違いない。

「あ、あたしは別に。したいのは公美さんの方でしょ」

「まあね」

公美さんは素直にうなずいた。

「先刻の君、すごく可愛かったんだもの。もう一回見たいなあ、って。……いい？」

いい？ って訊きながら、いつの間にか手が脚の間に入り込んできて、指先が小刻みに動き始めている。

どうしよう。

あの快感をもう一度味わいたいような。

でも、なんだか怖いような。

このまま、もう少し話をしていたいような。

絡み合う複雑な感情に、あたしは大きな溜息を

ついた。

「あーあ……美作百合子先生の正体が、こんなエッチな人だったなんて」

「そういえば君、私のファンなんだよね。これはもう、私のこと愛しているっていつてもいいわよね」

「どうしてそうなるのよ！」

あたしは素敵な小説を書く美作百合子のファンだけど、決して、痴漢常習犯である里原公美のファンではない。

「……そういえば公美さんは、どうして作家になったの？」

「そうねえ……なんとなく、気付いたら作家になつていた……かな」

あたしへの愛撫は続けながら、公美さんは言った。

「なんとなく……で、なれるものなの？」

「ね、『二度目の桜』って、読んでくれた？」

「え？ もちろん」

最初に、笹子が貸してくれた本だ。公美さ

ん……美作百合子のデビュー作である。

「あれはね、高校の時の実体験がモチーフなの」

「え……？」

「昔から文章を書くことは好きだったからね。後でそのことを小説風にまとめて、なんとなく目に付いた新人賞に応募したら、運良く入選してしまっただけ」

「え……だって……」

公美さんは、微かに寂しげな笑みを浮かべていた。見慣れないそんな表情に、あたしの鼓動は急に速くなった。

今まで知らなかった、公美さんの一面を見たよ
うな気がした。

あたしは公美さんを、いつでも脳天気なお気楽倒錯性欲女だと思っていた。と言ったら本人は気を悪くするだろうが、それが事実だ。

だけど

「……ところで」

耳元で、公美さんの声がする。

「もう一度、してもいい？」

「……もう、してるじゃない」

先刻から、指の動きは止まっていない。いつしかあたしの胎内温度は上がり始めていた。

「それでも一応、今日は許可を得ておこうかと」
どうして今日に限って、そんなに行儀よく、優しくしてくれるんだろう。おかげで拒むことができなではないか。

「……公美さんがどうしてもっていうんなら、もう一回くらい……いいよ。まだ、お母さん帰ってくる時間じゃないし」

「どうしても、したい。君がこんなに素直に受け入れてくれるチャンスは滅多にないもの。だから……いいわね？」

こくん、とあたしはうなずいた。

唇が重なられ、指が動きを速めていく。

ぴく、ぴくん。

あたしの身体が小さく震えはじめる。

本当に、こうしているとただのお気楽エッチなレスビアンなだけれど。

だから、にわかには信じ難いだけれど。

だけど

公美さんが、「実体験」と言った美作百合子の
デビュー作『三度目の桜』は、本当に辛く切ない
悲恋の物語だったのだ。

夏休みも残り少ない、ある日。

あたしは生まれて初めて、男の子とデートしていた。

きっかけは、親友の真澄の紹介だった。「彼氏の友達が、ハトのこと紹介して欲しがっているんだけど、どお？」と。

こうしてお誘いは珍しいことではない。これまでも何度かあったけれど、いまいちピンと来るものがなくて断っていたのだ。

今回、承諾した理由はひとつ。ちょっと、生活を変えた方がいいのではないか、このままではよくないんじゃないか……そう思ったから。

このままでは、あたしも同性愛にのめり込んでしましそうな、そんな不安があった。

以前のように公美さんを拒めなくなってきたり、聖さんのことが気になったり。

だんだん、同性に惹かれてきている自分に気付いてしまった。

よくない傾向だ、と思う。笙子みたいに「相手が女性だって構わない」と開き直ることは容易ではない。今時の健全な女子高生としては、やはりちゃんと、同じ年頃の男の子とお付き合いするべきじゃないだろうか。

いつまでも食わず嫌いはよくない。とりあえず手始めは真澄の紹介で、真澄とその彼氏も同行してのWデートだった。

* * *

名前は、近藤正樹くんという。真澄の彼氏、平沢くんのクラスメイトだそう。うちの学校の近くにある男子校の二年生。

あたしは、ひどく緊張していた。

真澄に連れられて待ち合わせ場所へ向かう時から、心臓はドキドキ、掌にじっとりと汗をかいていた。

別に緊張するほどのことではないと、いくら自分に言い聞かせてもダメ。今時、奥手すぎると言

われるかもしれないけれど、男の子とデートなんて初めてなのだ。

近藤くんの第一印象は、すらりと背が高い人。バスケ部だそうだ。

男の子の評価基準というのはいまいちよくわからないけれど、多分、なかなか格好いいんじゃないかと思う。「近藤くんって格好よくてモテるらしいよー」と真澄は言っていたが、決して誇大広告ではないようだ。

爽やかな笑顔、っていうんだろうか。雰囲気は軽すぎず堅すぎず、比較的親しみやすいタイプかもしれない。少なくとも、顔を合わせた瞬間に回れ右したくなるようなことはなかった。

ちようどお昼時だったので、まずは四人でハンバーガーショップで昼食。それからゲームセンター、そしてカラオケ。

高校生らしいデートコース、っていうんだろうか。公美さんとのデートみたいに、高級フレンチも高いワインもお寿司も縁がない。だけど本来、普通の女子高生としてはこちらがあるべき姿であ

り、ロマネ・コンティ付きのフルコースをご馳走してもらえるあつちが異常なのだ。

かなり時間が経っても、あたしの動悸は治まる様子になかった。緊張のあまり息苦しくなっとうまく喋れないくらいだ。自分でも、ここまで男の子に免疫がないとは思わなかった。

真澄と彼氏の沢田くんは、あたしたちに見せつけるようにべたべたしている。他に人目のないカラオケボックスの中では、ほとんど抱き合うようにしていたくらい。あたしがあんなことをしたら、心臓が破裂してしまうかもしれない。

そろそろ晩ご飯にしようか……という頃になると、本格的に具合が悪くなっていた。カラオケボックスの中って、あまり空気がよくないせいかもしれない。

外に出た時には、吐き気すらこみ上げてきた。緊張のためだけとは思えない。なにか悪いものでも食べたのだろうか。

「ハトちゃん、なんだか顔が青いけど大丈夫？」隣を歩いている近藤くんが訊いてくる。

手をつないで前を歩いていた真澄と沢田くんが振り返る。

「うん……平気」

そう、答えようとした。

けれど突然の激しい嘔吐感に襲われて、声が出なかった。額に脂汗が滲み、目の前が暗くなる。

立つていられなくて、あたしはその場にうずくまっただ。

「あれ、美鳩ちゃん？」

失神しそうになるあたしの意識をつなぎ止めたのは、そんな、聞き覚えのある声だった。

公美さんだ。友達なのか、それとも恋人なのか、同世代の女性と並んで歩いている姿が目に入った。

「どうしたの？ 顔が真っ青よ」

「ちよつと、吐き気が……」

口を押さえながら、なんとかそれだけを答える。公美さんの手が肩に触れた。

「あんまり、大丈夫そうじゃないわね。……車ですっていつてあげようか？」

込み上げてくる酸っぱいものを堪えながら、あ

たしはうなずいた。体調不良の原因はわからないけれど、どう考えてもこのままデートを続けていられそうな状態ではない。

公美さんは真澄たちと二言、三言話して、真澄が通りがかったタクシーを停めてくれた。真澄や近藤くんへの挨拶もそこにタクシーに乗せられる。隣に公美さんが座ると同時にドアが閉まり、タクシーは走り出した。

あたしは、ゆっくりと深呼吸した。座っているせいか、いくらか楽になってきた。

公美さんが、タクシーに乗る前に自販機で買ったらしいスポーツドリンクを渡してくれた。その冷たさが喉に心地よくて、吐き気は急速に治まっていた。

「ふう……」

大きく息をつく。

身体が少し楽になると、急に眠たくなってきた。今日は一日緊張して、精神的に疲れてしまったから。

中身が半分くらい残ったペットボトルを公美さ

んに返して、あたしは訊いた。

「……………いいの？ デートだったんでしょ？」

一緒にいた女性を後に残して、公美さんはあたと一緒にタクシーに乗ってしまった。これって、まずいのではないだろうか。

しかし公美さんは、なんだか嬉しそうに訊き返した。

「あ、妬いてくれるの？」

「……………ばか」

「変に気を回さないの。彼女は担当の編集さん。仕事の打ち合わせをしたの。私は美鳩ちゃん一筋よ」

ちよん、と人差し指で頬を突つかれる。

「……………うそばかり」

あたしはそれ以上話す気力もなく、公美さんに寄りかかるようにしてうつらうつらしはじめた。疲労感で身体が重かったけれど、吐き気はすっかり治まっていた。

* * *

「……………あれ？」

意識がはつきりすると、ベッドに寝かされている自分に気がついた。

だけど、なにか様子がおかしい。

はっと気付いた。ここは、あたしの寝室ではない。

「……………ここ、どこ？」

「私のマンション。こっちの方が近かったから」

「く、公美さんの部屋っ？」

いきなり大ピンチ、貞操の危機だ。けどまだ、逃げ出すほどの元気はない。

抵抗できない状況で公美さんの部屋に連れ込まれたなんて。

ああ、もう。十六年間守ってきたバージンよさようなら、って心境。

「どうする？ もう遅いけれど、このまま泊まってく？」

壁に掛かっている時計を見ると、もう夜中だった。これから駅に向かってても終電にはぎりぎり間

に合うかもしれないけれど、今の体調で駅まで走って、家に帰ってお風呂に入って……と費やす時間を考えると気が重い。

とはいえ。

このまま公美さんの部屋に泊まったら、自分からお皿の上に乗って「どうぞお召し上がりください」と言っているようなものではないか。

でも、公美さんが弱っているあたしを襲うようなことをするだろうか。

……するだろうな、公美さんなら。

「……あたしの具合が悪いのいいことに、部屋に連れ込んで変なことする気なら、本気で軽蔑するよ」

「しないわよ。弱っている美鳩ちゃんよりも、元気な美鳩ちゃんの方が可愛いもの。そうねえ、せいぜいキスクらいかな。それ以上はねえ……したくないといえば嘘になるけど、今夜中に上げなきゃならない仕事があつてね」

公美さんが机を指差す。見ると、パソコンの電源が入っていて、あたしも使っているワープロソ

フトの画面が表示されていた。

「ホントに？ 絶対？ 約束する？」

「今夜は約束する。その代わり、元気になったらまた遊ぼうね」

「ん……、じゃあ、泊まってく」

あたしはうなずくと、のろのろと身体を起こした。かなり汗をかいたらしく、身体がべたべたする。

「シャワー、借りてもいい？」

「ええ、お風呂も入れるよ」

公美さんは真新しいバスタオルと、パジャマと下着を持ってきてくれた。

だけど。

下着は中が透けそうなレース製で、隠す範囲が妙に狭い、セクシーな……というかエッチなデザインだった。ひよつとして、前に公美さんが言っていた「あたしに穿かせようと思って用意したエッチなパンツ」とはこのことだろうか。

それに、パジャマは上着だけ。

「……下は？」

念のため訊いてみると、公美さんは笑って言った。

「女の子が、パジャマの上だけを着ている姿って可愛いじゃない？」

「……まあ、いいけど」

パジャマの下だけよりは、上だけの方がまだましだろう。公美さんのサイズだから、あたしが着ると一応下も隠れる程度には大きめだ。

こちらとしては、泊めてもらう立場なのだから、ちよつとくらいエッチな姿をサービスしてあげるのも仕方がない。

あたしは諦めてバスルームへと向かった。

一人暮らしのマンションのバスルームとしては結構広い。新しいお湯を張ったバスタブに身体を浸した。

温めのお湯が心地よい。なにかのハーブの入浴剤の、ほのかな香りが漂っている。

汗とともに、今日一日の疲労が流れ落ちていくような気がする。

あたしは、ふうつと大きく息を吐きだした。

心臓の鼓動が、少しだけ速くなっている。まだ、完全に気を許したわけじゃない。公美さんはあ言っていたけれど、やっぱり何かかれてしまうかもしれないという不安はある。

だけど今のかすかな不安は、デートをしていた時の不快な緊張感とはまったく違っていた。

もしかしたら、それをまったく期待していないといったら嘘になるかもしれない。

キス、プラス くらいのことならいいかな、なんて。

まさか、そんなことはないと思うけれど。それでも万が一のことを想定して、つい、全身すみずみまで念入りに洗ってしまった。

お風呂から上がって、新品のバスタオルで身体を拭いて。

ちよつとエッチなパンツとパジャマを身に着けた姿を、脱衣所の鏡に映してみた。パジャマは少し大きめだから、胸元が広く開いて、胸の谷間がはっきりと見えてしまう。それに、パジャマの裾から伸びた脚もすごくエッチな光景だ。これじゃ

あまるで、誘っているみたい。

だけど寝室に戻ると、公美さんはパソコンに向かって真面目に仕事をしていた。キーボードを叩く音だけが響いている。

その背中を見ながら、あたしはベッドにもぐり込んだ。公美さんは一瞬だけこちらを振り返って、小さな声で「おやすみ」と言ってくれた。

「……おやすみ」

あたしも小さな声で応えて、鼻まで毛布の中にもぐり込む。

初めての、公美さんのベッド。そう思うと少し緊張する。

いったいこのベッドには、これまで何人くらいの女の子が連れ込まれたのだろう。

いったいここで、どんな痴態が繰り広げられてきたのだろう。

考えると、興奮して眠れなくなりそうだった。

その疑問を無理やり頭から追い出す。少なくともあたしの鼻には、公美さんの匂いしか嗅ぎとれなかった。

目を閉じる。

リズムカルなキーの音だけが聞こえてくる。

それを子守歌に、いつしかあたしは心地よい眠りに落ちていた。

* * *

香ばしいコーヒーの香りで目を覚ました。

いつの間にか、朝になっていた。窓の外の日差しが強さを考えると、朝早く……という時刻ではないようだ。

「おはよう、よく眠れた？」

椅子に座ってコーヒーを飲んでいた公美さんが、カップを手渡してくれた。机の上に、白い磁器のポットが置かれている。

公美さんは昨夜と同じ服で、少し髪が乱れていて、目が赤かった。

徹夜で仕事していたのだろうか。なんとなくけだるい雰囲気漂っていて、妙に色っぽい。

あたしは変にドキドキしてしまって、それを気

取られないように、うつむいて手の中のカップを見つめた。小さな茶色の水面に、あたしの顔が映っている。

「し……仕事は終わったの？」

「うん、つい先刻ね。ね、美鳩ちゃん、今日ヒマ？ どこか遊びに行こうか？」

「それより、眠った方がいいのでは……」

徹夜で仕事していた公美さん。あたしが起きてからだけでも、もう五回も大きな欠伸をしている。こんな状態の公美さんの運転でドライブなんて、考えただけでも怖い。

「……そうだね」

公美さんも眠そうに応える。

「じゃ、一緒に寝ようか」

「それ、『寝る』の意味が違うのではっ？」

「細かいこと気にしない」

あたしの手からカップを取り上げた公美さんは、それをサイドテーブルの上に置いて覆い被さってきた。為す術もなく、ベッドに押し倒されてしまふ。

「ちょ……ちょっと、公美さん！」

そんな、眠いのを我慢してまであたしを襲わなくても。

「キス、してもいい？」

耳たぶをくすぐるようにささやかれる。

「え？」

「キ、ス。ほら、昨夜は結局しなかったじゃない」

「ああ……」

そういえば、エッチなことはしないけれどキスはするって宣言してたっけ。

そのことは了解していたけれど、こう堂々とあらたまって訊かれては、なんだか気恥ずかしい。でも、まあ。

昨夜は色々とお世話になっちゃったし。

まあ、感謝の意味でのキスくらいなら……ね。

「……うん」

あたしはうなずいて目を閉じた。間をおかずに唇が重ねられる。

柔らかな唇の感触。

唇を割って侵入してくる濡れた舌の感触。

とろけてしまいそうなほどに気持ちがいい。

胸の上に置かれた手。

あたしの両脚を割って、敏感な部分に押し付けられていた公美さんの脚。

やっぱり、すごく気持ちがいい。

あたしは、公美さんの身体に腕を回した。

しっかりと抱きしめる。

公美さんと身体を重ねることは、本当に気持ちがいいことだった。

「ハト、身体の具合はいいの？」

翌日、真澄や聖さんと街へ出かけた時、真澄が心配そうに訊いてきた。

「ん、もう平気。ごめんね、先に帰っちゃって」

「近藤くんも心配してたよー。ね、今度はいつ会う？」

「ん……ごめん。もう、会わないや」

「えー、どうして？ 近藤くん、ハトのことすごく気に入ってたのに」

信じられない、って口調で真澄は言った。

どうしてって訊かれてもちよっと困る。近藤くんのこと、どこが嫌いってわけじゃない。ただ、もう一度会いたいって気持ちにならないだけなのだ。

「もお！ ハトっていつもこうなんだから」

「……ごめん」

「え、なにになに？ 何の話？」

いきなり、聖さんが話に割り込んでくる。例に

よって背後から、あたしの胸を揉みながら。

真澄が、一昨日のことを簡単に話した。聖さんは何故か、面白くなさそうな顔になる。

「ちよつと真澄、私を差し置いてハトを男とデートさせるなんてひどいんじゃない？ 可哀想にねー、ハトちゃん」

背後から、あたしの肩の上に頭を乗せて頬ずりしてくる。

「よし、じゃあ今度、口直しに私とデートしようね？」

勝手に話を進める聖さんを、真澄は呆れ顔で見ている。

だけでももちろん、あたしはOKした。見知らぬ男の子よりは、聖さんと遊んでいる方がずっと気が楽だった。

* * *

そして。

聖さんとのデートは、やっぱり楽しかった。

映画と、ゲームセンターと、ウィンドウショッピング。

夕食はいつものような割勘のファーストフードではなく、小洒落たイタリアレストランでご馳走してもらって、なんだか本当にデートみたいな気分。

楽しい、本当に楽しい一日だった。

夜の街を、二人手をつないで歩いて帰った。今夜は聖さんもあたしの家に泊まることになった。いた。

お風呂に入って、夜中過ぎまでビデオを観ながら他愛もない話をして。

そろそろ眠くなってきたかな、という頃。

不意に、聖さんが言った。

「ハト……」

「ん？」

「キス、してもいい？」

「え？」

突然のことにびっくりした。言ったのが公美さんなら「またいつものこと」で済む話だけど、ま

さか聖さんがそんなことを言うなんて。

また、冗談かと思った。だけどあたしを見ている聖さんの表情は、そうは言っていないかった。

いつものふざけた笑顔を作るのに失敗して、真剣な、そしてどこか思いつめたような表情をしていた。

いったい、どういっつもりなのだろう。まるでわからない。

あたしが戸惑っていると、急に聖さんの口調が変わる。

「ああ、ごめん。冗談だから、忘れて」

だけど、それは嘘だった。冗談なんかじゃない理由はわからないけれど、本能的にそう思った。

そして、考える。

聖さんとキスするのって、どうなんだろう。

いや？

ううん、いやじゃない。

だから。

「嘘つき」

あたしは小さな声で言った。聖さんの表情が強張る。

「……冗談なんかじゃ、ないんでしょ？ どうして誤魔化そうとするの？」

「どうして、って……。だって私、女の子が好きなんだもん。普通は、そんなの変だと思ってしまうよ。」

聖さんつてば、なんだか泣きそうな表情をしている。

「私は昔からこうだからね、いまさら後ろめたい気持ちなんかはない。わかってくれない人に何を言われたって平気。それでも……それでも、ハトに「気持ち悪い」なんて思われるのだけは耐えられない」

「聖さん……」

「ハトと初めて同じクラスになった時……一目惚れ、だった。なんて可愛い女の子なんだろう、って。顔も、仕草も、すごく可愛くて、抱きしめたら柔らかくて気持ちよさそうで。……キスとか、もつと……エッチなこととか、したいって思っ

た」

聖さんの告白を聞いているうちに、心臓の鼓動が速くなってきた。顔が、熱く火照ってくる。

これって真正銘、愛の告白ではないだろうか。だから、「冗談めかしてハトに抱きついたり触ったり……バカみたいでしょ？ こんな……だけどさ……」

「……いいよ」

あたしは、聖さんの台詞を途中で遮った。そうしないと、聖さんが泣き出すんじゃないかと思っただから。

「別に、同性愛が気持ち悪いなんて思わない。あ、たし、キャラ文庫もルビー文庫も読んでるし、あ、あたしの知り合いにも、何人がそーゆー人がいるし」

公美さんとか、笙子とか、宮本さんとか松宮先輩とか。

同性が好きなこと以外は、みんな普通のいい人たちだ。気持ち悪いなんて思わない。まあ、公美さんは「いい人」じゃないかもしれないけれど。

ううん、痴漢で変態じゃなければ、公美さんだっ
てきつといい人だ。

「だから……いいよ。キス、してもいい……しよ
う？」

あたしは自分から、聖さんの隣へ移動した。
ぴつたりと身体をくっつけて寄り添う。聖さんは、
ぎこちなくあたしの肩に腕を回してきた。

「……本当に、いいの？」

喜びを押し隠しているような口調で訊いてくる。
聖さんの手が頬に触れる。

「……ん」

あたしは目を閉じて上を向いた。

痴漢の変態さんとだつて何度もキスをしている
のだ。聖さんとのキスを拒む理由はない。

聖さんはあたしのことが好きで、あたしだつて
聖さんのことは、恋愛感情とは別物かもしれな
けれど、大好きなのだ。

聖さんの体温が近付いてくる。

唇が触れた。柔らかな感触。

あたしのファーストキスは公美さんで、そして

二人目のキスの相手もやっぱり同性。

ただどあたしは、そのことを少しも嫌だとは
思っていないかった。

ためらいがちに、舌が挿し入れられる。あたし
の反応の伺うように。

あたしも少しだけ口を開いて、舌を伸ばしてそ
れに応えた。

口の中で密着する二人の舌。温かくて、柔らか
くて、とても気持ちがいい。

肩に置かれた聖さんの腕に力が込められて、あ
たしを抱き寄せる。あたしも聖さんの身体にそつ
と腕を回した。

Tシャツとパジャマという薄い生地を通して感
じる相手の温もり。これは初めての経験だった。

公美さんと抱き合った時、向こうはちゃんと服を
着ていたから。

長い、長いキスだった。頭がぼうとしてくる。

息が苦しくなつて意識が朦朧たもつとしてきた頃、よ
うやく二人の唇は離れた。

あたしは聖さんの顔を見るのが恥ずかしくてう

つむいた。それでも、腕は聖さんの背中に回したままだ。

「聖さん……」

「ん？」

「聖さんは、あたしのことが……その、好き……なんだよね？」

「……うん、大好き」

「じゃあさ、あたしを恋人にしたいとか……そういうこと、思うわけ？」

もしもここで聖さんが「うん」と答えたら、あたしもOKしてしまうかもしれない。この場には、そんな雰囲気は漂っていた。

少なくとも今は、あたしも、それでもいいと思っていた。頭の片隅に「変態の公美さんなんかより、聖さんの方がずっといい」なんて考えがちらりと浮かんだ。

「ハトの恋人、か……そうだね、なりたかったね」

あたしは「おや」と思った。聖さんは何故か、過去形で答えた。あたしのが好きなのは、現

在進行形だと思ったのに。だから、キスしたいなんて言い出したのだろうに。

「……でもさ、なれないんだ。私、二学期から転校するの」

「…………え？」

突然のことに、一瞬、言っていることの意味が理解できなかった。何秒かたって、ようやく言葉が頭の中に染み込んでくる。

「ええええっ！ て、転校っ？」

あたしはびっくりして叫んだ。初耳だった。寝耳に水、とはまさにこのことだ。

「て、転校って、引越して？」

「そう。親父の仕事の関係でね」

聖さんは寂しげな雰囲気を漂わせて苦笑する。

「そんな……引越して、どこに？」

「ロサンゼルス」

「……は？」

ろさんぜるす……？

それもまた唐突であまりにも予想外の単語で、意味を理解するのに時間がかかった。

「ろ、ロサンゼルスって！ あの時、アメリカの？」

「うん」

「そんなんっ！ それじゃあ、週末に会いに行くこともできないじゃない！」

「……だから、ハトと恋人同士にはなれないって。何年かは戻れないらしいからね。向こうで大学に行くつもり」

「そんなん……」

あたしは、少なからぬショックを受けていた。いや、聖さんと恋人になれなかったことがショックだったのではなくて、聖さんがいなくなってしまう、ということに。

一番仲がよくて、頼りになる友達だったのに。

こんなに突然に、いなくなってしまうなんて。信じられない。

二学期から……って。

夏休みはもう何日も残っていないのに、あまりにも突然すぎる。

「どっして？ どっして、今まで黙ってたの？」

「……なんか、言えなかった。これでお別れだった、変にしんみりするの私らしくないし。ホントは、何も言わずに転校しようかと思ってたんだけど、やっぱり、最後にちゃんと、ハトとの思い出を作りたかった。だから……今日は楽しかったし、すごく、嬉しかったよ。ありがとう、ハト」

聖さんの言葉が、頭の中でぐるぐると回っている。

信じられない。信じられない。

聖さんと、もう会えないだなんて。

一緒にいるとこんなに楽しいのに。

こんなに好きなのに。

大切な、大切な友達なのに。

だから……。

「想い出って……。キス、だけで……いいの？」

気がつくとき、そんなことを口走っていた。

「…………え？」

聖さんは、目をまんまるに見開いてあたしを見た。

あたしは急に恥ずかしくなって、真っ赤になって俯いた。

「だから…………その…………聖さん、先刻言っただけじゃない。あたしと、エッチなことかしてみたいって。その…………だから…………なんて言うかな。聖さんさえよければ、だけど。お、お餞別？ っていうか…………」

「ハト…………そんなこと、軽々しく言うもんじゃないの」

聖さんは真面目ぶって言うけれど、口元が笑いを堪えている。

「したくないの？」

「…………したい。すっごくしたい。でも…………いいの？」

唾を飲み込んで訊いてくる聖さんに、あたしは

こくんとうなずいた。

聖さんが同性だって、恋人じゃなかったって、そんなこと関係ない。

同性で、恋人でもなんでもない公美さんと、すでに何度かエッチなことをしている…………いや、されているのだ。大好きな聖さんとすることに、なんの抵抗があるだろう。

聖さんとはもう会えない。会えたとしても、それは何年も先のこと。

そう考えたら、あたしだって聖さんとの素敵な想い出が欲しかった。たとえ今夜一晩限りの関係だって、変態の痴漢さんに身体を許すよりはよっぽど健全だ。

こんな時、女同士って便利だと思った。

男女間のこととは違って、間違っても妊娠の心配とかはないし、本来の意味での「挿入」がないから、どこまでの行為をすればセックスしたことになるのか、その線引きが曖昧だ。だから、スキップの延長として身体を重ねることができる。よゆうな気がする。

あたしは、公美さんとの行為を思い出ししてみた。それは、すごく気持ちのいいことだ。

痴漢とか、駅のトイレとか、そういうたアブノーマルな状況でなければ、嫌悪感も全然ないし、素敵なことだと思う。

ましてや、相手はある意味両想いの聖さんである。

裸になって、抱き合って、触られたりキスされたり。そのくらいのことをしてたって、全然かまわない。

「あ、あたしバージンだし、あんまりハードなのは困るけどさ。でも……あの、あたしのこと、ずっと忘れずにいて欲しいし、あたしも、聖さんのこと忘れたくないし。だから……」

「だから、一生忘れられない思い出を作ろう？」

聖さんが耳元でささやく。微かに触れた唇の感触に、あたしはぞくぞくした。

「ハト……」

「……聖さん」

どちらからともなく、顔を近づけていく。

また、唇が重ねられる。

先刻のキスとの違いは、聖さんの手があたしの胸の上に置かれていること。女の子としては大きな聖さんの手が、乳房を包み込んでいる。

指先でつつくような刺激に、乳首がつんと固くなって、パジャマの薄い生地を持ち上げる。そこを手のひらで優しく擦られて、痺れるような快感に小さく震えた。

あたしは最近、乳首がすごく感じるようになっていた。エッチなことを憶えはじめた頃のクリトリスよりも、よほど感じてしまう。女の子の身体って、経験を積むほどに、どんどん感度がよくなっていくのだろうか。

「あ……んっ」

重ねた唇のわずかな隙間から吐息が漏れる。あたしの反応を楽しむように、聖さんの愛撫が強くなってくる。

聖さんは顔中にキスの雨を降らしながら、パジャマのボタンを外して直に胸を触ってきた。

つんと立った乳首が摘まれて、軽く引っ張られ

る。左右に捻られる。指先で弾かれる。

その度にあたしは鼻にかかった甘い声を上げて、聖さんを喜ばせた。

聖さんの顔が下がっていく。首筋、鎖骨、そして胸へ。

あたしの身体に押し付けられた舌が、カタツムリが這ったような痕を残していく。

「ハトの胸ってホント素敵だなあ。こんなに大きくて、形が綺麗で、張りと弾力があって、これぞ理想のおっぱいって感じ」

聖さんは嬉しそうに言って、何度もキスしたり、頬ずりしたりする。

「キスマーク、つけてもいい？」

「え？」

「キスマーク。何日か痕が残るけど、いい？ハトの身体に、印を残しておきたい」

「あ、……うん、いいよ」

胸にキスマークをつけられて、もしもそれを公美さんに見られたりしたら、どうなるだろう。

だけど、別に構わないって思った。それで公美

さんが怒ろうと傷つこうと、あたしの責任じゃない。今のあたしには、聖さんの愛の証をつけてもらうことの方が大切だった。

「ん……」

胸に唇が押し付けられて、強く吸われた。これまでされたことがないくらいに強く、痛みすら感じるほどに。

そのままの状態がしばらく続いて、ようやく離れたと思ったら、少し離れた場所でまた同じことが繰り返される。

鈍い痛みをともなうその行為が、あたしにたまらない快感を与えていた。なんて言ったらいいのだろう、本当に「愛されている」っていう気がする。

三つ、四つ。胸の上に、小さな朱い楕円形の印が増えていく。

だんだん、頭がぼうつとしてきた。顔が火照って熱いほどだ。

パンツの中が、溢れるほどに濡れているのがわかる。そこははしたないほどにだらだらと涎を垂

れ流して、聖さんに愛撫されることを待ち望んでいた。

「せい……さんっ！」

あたしは、聖さんにぎゅっとしがみついた。もう、我慢ができなかった。公美さんにさんざん弄ばれて開発されてしまった女の子の部分は、もっと直接的な快楽を望んでいた。

「下も……触って」

聖さんはあたしの胸に吸いついたままうなずくと、パジャマのズボンの中に手を入れてきた。

「ふ……あ」

思わず、溜息に似た声が漏れる。

「ハトのここ、熱くなってる」

一度、手のひら全体でパンツの上からその部分を包み込むようにして、それから割れ目に沿って指を滑らせる。

「あ……ううんっ……んふっ」

意識してやっているわけじゃないのに、唇から漏れる声はとても甘ったるくて、切なげだ。

涙が出そうなほどに、気持ちよかった。

割れ目に押しつけられた指がゆっくりと動くたびに、全身の毛が逆立つような気がした。

「は……ああ……んん。く、うん……」

ぎゅっと目を閉じて、歯を食いしばって、絶え間なく襲ってくる快感に耐える。そうしていなければ、おかしくなってしまうそうだった。

だけど、不意に指の動きが止まった。目を開けると、すぐそこに聖さんの顔があつて、楽しそうにあたしを見つめていた。

「聖さあん……」

「ハトつてば、すっごく感じやすいんだ。もう、

パンツもぐっしよりだよ」

「やあ……」

「脱がしちゃっても、いい？」

「え……」

あたしは少し躊躇した。ここまで来ても、その部分を聖さんに見られるのはやっぱり恥ずかしい。

でも、見てもらいたい。そんな相反する想いもある。聖さんに、あたしのすべてを見てもらいた

い。

「……ん」

小さくうなずくと、聖さんは慣れた手つきで素速くあたしのパジャマを脱がしてしまった。なのに肝心のパンツの方は、もったいつけるようにゆっくりと下ろしていく。時間をかけられた分だけ、あたしの羞恥心が膨らんでいく。

「や、あ……」

最後の一枚を脱がした聖さんが、足首を掴んで脚を開かせようとするので、あたしは慌てて手でそこを隠した。

そこはぐつしよりと濡れていて、触るまでもなくわかるくらいに熱い蜜が溢れだして、お尻の方まで流れている。

こんなところを聖さんに見られるのは、すごく恥ずかしい。公美さんの場合は向こうがずっと年上だし、無理やり「されている」という雰囲気もあつたけれど、同い年の、クラスメイトの目に曝すというのはやっぱり気分が違う。

恥ずかしいところを隠して縮こまっているあた

しを見下ろしながら、聖さんも自分で服を脱いでいった。すごく、綺麗な身体だった。マネキンのように均整のとれた理想的なプロポーションに、あたしは見とれてしまった。

「ハト……隠しちゃだめ。見せて」

パンツ一枚を残したところで、聖さんが言う。

「だって……恥ずかしいよ」

「私も、見せてあげる」

なんのためらいもなく、聖さんは最後の一枚を脱いでしまった。

修学旅行のお風呂以外で、クラスメイトの下半身を目にするなんて初めてだ。公美さんとした時だって、向こうが服を脱いだことはない。

ヘアは、すごく薄い。いや、すごく丁寧にお手入れされているようだ。幅の狭い小さな逆三角形は、あたしのそれよりもひと回り面積が狭い。一昔前の、きわどいハイレグ水着も平気で着れそうだ。

聖さんは、仰向けになっているあたしの頭の横で膝立ちになって、脚を開いてみせた。赤い生肉

の色をしたそこは、濡れて艶やかに光っている。

それは、信じられないくらいにエロティックな光景だった。

「ね？ ハトとエッチしてるから、こんなになってるの。ハトのも、見せて」

「ん……」

聖さんが足元へ移動する。

やっぱり恥ずかしかったけれど、聖さんがここまでしている以上、いつまでも隠していることもできない。あたしは手をどけて、おずおずと脚を開いた。ここまでの愛撫でぐっしりと濡れてしまっているところを、聖さんの前に披露する。

聖さんは嬉しそうに目を細めた。

「すごく綺麗。小ぶりで、淡いピンク色で。可愛いね、とつてもハトラしいや。それに、溢れるくらいに濡れてる。私とのエッチでこんなに感じてくれる。それって、すごく嬉しいよ」

「そう……なの？」

「うん。だから、もっともっと感じさせてあげるよ」

「あ」

あたしの太腿に手をかけてさらに脚を開かせると、聖さんはその中心に顔を近づけてきた。

「あ、ん」

茂みの上に、キスされてしまう。そのまま、ミリ単位で下へ移動していく。

「ふひゃあ……っあんっ」

直に、キスされてしまった。熱く濡れた粘膜の上。

柔らかな唇の感触は、指とはまた全然違う。触られた部分がとろけてしまいそうだ。

「いい匂い。ハトの匂いだ」

「やあんっ」

あたしが恥ずかしがるのをわかっていて、そんなことを言う。クリトリスや割れ目の中に、何度も唇を押しつけてくる。

「ふわああ……あああっ、ひっ、いいんっ」

唇よりも柔らかくて、ぬめりを帯びて、温かいものが押しつけられた。一瞬遅れて、それが聖さんの舌だと気がついた。

指でその部分を広げて、舌を押しつけて全体を舐め上げてくる。その強い刺激に、あたしの上半体は大きく仰け反った。

「はあっ、あああっ、はあんっ、ひゃああっ！」

だらしなく開いた口から断続的な悲鳴が漏れる。脊髄を貫く鋭い快感に、涙が溢れてきた。

聖さんの舌が、敏感な部分をくまなく舐め回している。

強く、優しく。

ゆっくりと、速く。

舌先でくすぐるように、全体で押しつけるように。

一瞬ごとに変化する愛撫。

あまりの快感にあたしは気が狂いそうで、暴れて逃れようとするのだけれど、聖さんの手に下半身を押さえつけられてはそれも叶わない。むしろ動くことで、自分に加えられる刺激をより強くしてしまうだけだった。

「気持ちいい？」

「いいっのっ、イイのおっ！ すっいいっ……す

ごおいつ！」

「もつと、気持ちよくなるう。二人で一緒に」

「え……あ」

聖さんは上半体を起こすと、大きく広げられたあたしの脚の間に身体を入れてきた。自分も脚を開いて、あたしの片脚を抱えて、二人の下半身が交差するような形になる。

まるで、男女のセックスみたいな体勢だ。だけでももちろん、女の子同士では相手に挿入する器官はない。すると、この体勢でできることという

と……。

「ひゃっ……」

あの部分に、柔らかなものが押しつけられた。肌とは違う、ぬるぬるとした感触だ。

それでわかった。二人の、女の子の部分を触れ合わせようというのだろう。

「ふうっ…… ああんっ！」

聖さんが、腰を押しつけてくる。二人とも十分すぎるくらいに濡れているみたいで、ぬちゃぬちゃと湿った音がした。

「は…………、あつ…………んっ。ふあ…………はあっ！」

女の子の身体の中でいちばん敏感な粘膜同士が密着し、擦れ合う。舌よりももつと柔らかく絡みつく。

男の人がするみたいに、聖さんが腰を前後に動かしている。溢れだす蜜でその部分の摩擦係数は限りなく低いはずなのに、悲鳴を上げるほどの快感が襲ってくる。

「はああっ、あんっ！ はっ…………ひああっ、ああ っ！」

「んっ…………く、ああ…………んっ、んっ…………ふあっ」
聖さんも切なげな喘ぎ声を上げながら、さらに腰の動きを加速していく。顔は汗びっしょりで、痺がぼたぼたとあたしのお腹の上に落ちた。

ベッドが、ぎしぎしと軋んでいる。

聖さんが腰を押しつけてくるたびに、あたしの胸が不安定に前後に揺れる。聖さんの胸も、リズムカルに上下に弾んでいる。

「ハトツ！ はとお…………っ！」

ある時は大きくゆっくりりと、ある時は小刻みに

素速く。聖さんの動きは多様に化する。それでも全体としては、快樂の頂へ向けてその動きは加速度を増しつつあった。

「いいっ…………聖さん…………聖さあんっ！」

「わ、私…………っ、いつ…………イクっ、いくうっ！」

「あああっ、ああ っっ！」

二人とも、ほとんど同時に甲高い悲鳴を上げた。普段はどちらかといえばハスキーな聖さんの声とは思えないくらい、オクターブが高かった。

目の前でフラツシユでも焚かれたみたいに、意識が真っ白になる。どさりと覆い被さってきた聖さんの身体に、無意識のうちにしがみついた。

* * *

荒い息づかいが、ふたつ重なっている。

重なった二人の肌はどちらも熱く火照って、びっしょりと汗をかいていた。

あたしは絶頂の余韻に浸って、まるで濃い霧の中を歩いているような感覚だった。聖さんの身体

の重みがなければ、自分がどこにいるのかもわからなくなっていたかもしれない。

ぼんやりとした意識の中で、あたしは今の行為を反芻していた。

すごく、気持ちよかった。

経験を積むごとにどんどん感じるようになっていくあたしだけど、今日でまたひとつレベルアップしてしまったような気がする。

しかも、今日の相手は公美さんじゃなくて聖さん。

あたしはここにいない公美さんに対して、奇妙な優越感を覚えていた。相手が公美さんじゃなくてもちゃんと感じるんだぞ、ざまあみろ　そんな気持ちだ。

最近、少し怖くなっていたのだ。

男の痴漢に遭ったら吐くほど気持ち悪いのに、どうして公美さんにされるのは、あんなに気持ちがいいのだろう、と。

ひょっとして、あたしは公美さんのことを好きになっちゃってしまって、だから感じてしまうのだ

ろうか、と。

だけど、聖さんとのエッチでもちゃんと感じる。公美さんの愛撫に全然負けていないくらいに感じてしまった。

だからひと安心……と思いかけて、大変な勘違いに気がついた。

あたしは、それが恋愛感情かどうかはともかくとして、聖さんのことは大好きなのだ。これはつまり、公美さんのことも聖さんと同じくらいに好きということになるのだろうか。

冗談じゃない。あたしはその考えを頭から振り払った。

「ハト……」

呼吸が落ち着いた聖さんが、ちゅつと軽くキスしてくる。あたしも自分から首を伸ばして、お返しにキスをした。

「楽しんでくれた？」

「……すっごく、感じちゃった。もう……こんな初めて」

あたしは正直に答えた。頬がぽつと熱くなった。

「ハトつてば、すつごく感じやすいんだもん。可愛かった、想像していたのよりもずつと」

「……想像？」

「うん。今だから言うけどね、しょっちゅう、ハトのこと考えながらひとりエッチしてた。ハトのことオカズにするのが、一番興奮するんだもん」

「もお、聖さんつてば」

「ふうつと頬を膨らませる。だけどこれは怒ったふり。あたしも聖さんのことを考えながらしたことがあるのだから、おあいこだ。」

「今まで上に覆い被さっていた聖さんが、あたしの横へと移動する。ぴつたりと寄り添って、腕枕してもらつような形になった。」

「公美さんとはこんな体勢になったことがなかったから知らなかったけれど、裸で肌を触れ合わせるの、すごく心地よいことだった。」

「いつまでもこうしていたい、と思う。恋人同士つて、こんな感じなのだろうか。」

「暖かな陽だまりで昏寝している時のような、柔らかな充実感。」

「どのくらい、そうしていただろう。」

「ね、ハト？」

「聖さんが不意に口を開いた。」

「……ん？」

「いつの間にかうとうととしていたのか、あたしの声は少し寝ぼけていた。」

「まだまだ、夜はこれからだよな？」

「……え？」

「聖さんの手が胸の上に置かれる。ぼんやりとした頭でも、その意図はすぐに理解できた。」

「……また、するの？」

「いや？」

「ううん、全然」

「嫌じゃないどころか、ぜひともして欲しいくらいだ。聖さんが相手なら、あの気が遠くなるような快感を何度でも味わいたい。」

「それに、聖さんとする機会はもう当分ないだろうから。」

「そこでふと、いいことを思いついた。聖さんもきつと、喜んでくれるんじゃないだろうか。」

胸から下半身へ移動しようとしていた聖さんの
手を押さえて、あたしは言った。

「……………あ、あたしが……………して、あげようか？」

「え？」

聖さんは驚いた顔で訊き返した。

「だから、その……あたしが『攻め』って、どう？」

「ハトが？ してくれるの？ いいの？」

「……ん」

こくん、とうなずいた。

これまであたしは、いつもされる側だった。

公美さんにも、聖さんにも。

触られたり舐められたり、それはすごく気持ちよくて感じてしまう。

だから、好きな人にも気持ちよくなって欲しい。

気持ちよくしてあげたい。

そう、思った。

聖さんにも、あたしの愛撫で感じてもらいたい。慣れないあたしがどこまでできるか、ちよつと不安ではあるけれど。

「嬉しい、ハト」

「で、でも、したことないからさ。気持ちよくしてあげられるかわかんないけど、あんまり期待しないでね。それでもよければ……」

「ハトにしてもらえる、って考えただけでいいちやいそうだよ、私」

「……頑張るから」

くすつと笑って、聖さんが仰向けになる。その上にあたしが覆い被さる。いつもとは逆の位置関係に違和感を覚えた。

期待に満ちた瞳が、あたしを見つめている。嬉しそうに。誘うように。

ゆつくりと顔を近づけていって、唇を重ねた。自分から進んで舌を入れる。聖さんの舌が絡みついてくる。

恐る恐る、胸に手をやった。聖さんの胸もかなり大きくて、小さなあたしの手には余るくらいだ。聖さんは長身だからあまり目立たないけれど……それとも目立たない理由は、いつも、小柄なのに胸が大きいあたしの傍にいるからだろうか。

そうつと揉んでみる。ひとりエッチで自分の胸

を触るのは、やっぱり微妙に感触が違う。

しばらくその感触を楽しんでから、右の胸に唇を押しつけた。

乳首を口に含む。吸う。唇で噛む。

その小さな突起は、すぐにつんと固く尖ってきた。そのことを確認してから、軽く、うんと軽く歯を立てる。

「あ……、んっ」

聖さんの唇から微かな声が漏れる。甘い声。切ない声。

聞いていると、胸がドキドキする。もっと聞きたくなる。

右胸への舌と唇による愛撫を続けながら、左胸に置いた手も動かす。

少しずつ、聖さんの声が大きくなってくる。あたしは、お母さんのおっぱいを飲む赤ん坊のように、熱心に吸い続けた。

ちらりと聖さんの顔を見ると、目を閉じて、眉間にしわを寄せて、切なげに口を半開きにしている。

あたしの拙い愛撫で感じてくれている。

そのことが、とても嬉しかった。

もっと、もっと、してあげたい。

もっと、もっと、感じてもらいたい。

胸を愛撫していた左手を、ゆっくりと下へ滑らせていった。小さな茂みの向こうにあるぬかるみは、もうとろとろにとろけていて、指先で触れただけで聖さんは声を上げた。

「気持ち……いい？」

「いい……イイ……指、入れて……」

「ん……」

熱く溶けた女の子の中心に、中指をもぐり込ませる。そこは柔らかなカスタードクリームみたいな感触で、簡単にあたしの指を呑み込んでいった。柔らかくて熱い、内臓の感触。自分以外のそこを触るのは初めてだ。ひとりエッチの時よりも、指はスムーズに入っていく。

中指が根元まで胎内に埋まっている。指先が、つるんとした固い感触の子宮口に触れた。

「聖さんって……バージンじゃない……よね？」

「……うん」

「いつ？」

「中二」

「早いね」

少しびつくりした。でも、聖さんならきつと、中等部の頃から大人っぽかったのだろう。

あたしは指を優しく抜き差ししながら質問を続けた。

「相手は？」

「……」

ここまできると、さすがの聖さんも恥ずかしそうに口をつぐんでしまった。指の動きを少し乱暴にする。

「あつ、ああつ！」

「相手は？」

「……近所に住んでた、女子大生。あ……小さい頃から、実の妹みたいに可愛がってくれて……」

「その人とは、どうなったの？」

あたしが知らなかった、聖さんの初めての人の

だけど、今の聖さんに特定の恋人がいるなんて話

は聞いたことがない。

「大学卒業してすぐに、男と結婚した。……あれはちょっと、裏切られた気分だったな」

「……ふうん」

みんな、いろいろな過去があるんだ。聖さんも、笙子も、そして公美さんも。

「その後も、何人かと付き合ったり、セックスしたりしたけどね……あ、でも、今はハトのことが一番好きだよ！」

慌ててフオローする聖さんの様子に、思わずくすくす笑ってしまう。

「あたしが一番ってことは、二番、三番がいるんだ？」

「あ、いや……」

「まあ、聖さんってば浮気者」

わざと怒ったように膨れて、中指に加えて人差し指も中に入れて激しく動かした。

「ああつ！ あああ つ！ でも、あ、ハトが……ダントツトップだからあつ！」

必死に言い訳する聖さん。でも、そんな聖さん

の気持ちは嬉しい。

尋問のために少し乱暴にしていた指の動きを、また優しくする。

「あたし、聖さんのそーゆーところも嫌いじゃないよ？」

あたしは身体の位置をずらして、指の抽送を続けながら、その部分に唇を押しつけた。舌を伸ばして、舌先でクリトリスをつつく。

「あっ……ああっ……んっ！」

聖さんは、感じてくれている。すごく濡れていて、指を抜き差しするのに合わせて溢れだしてくる。

ふと、悪戯を思いついた。

溢れてお尻の方まで流れ出している蜜を、薬指にたっぷりと塗りつけて、その指でお尻の穴をくすぐった。聖さんの身体がびくつと震える。

指先を押しつけて、小さな円を描くような動きで中に押し込んでいく。

「やっ……そんなとこっ……あっ、んんんっ！」

何をされているのが気づいた聖さんが、身体を

強張らせる。第一関節までもぐり込んだ薬指が、

ぎゅうつと締め付けられた。硬いゴムのような弾力で、あたしの指を追い返そうと抵抗している。

それでもあたしは、溢れるほどの潤滑液の助けを借りて少しずつ指を奥へ挿れていった。

「や……痛……あ、は……ああっ！」

ぎゅう、ぎゅう。

断続的に、お尻の穴が収縮を繰り返している。

力が弛んだ一瞬の隙に、指をミリ単位で進めていく。公美さんに何度もされていることだから、その辺の加減はわかっていてもつもりだ。

さすがの聖さんも、お尻は慣れていないみたいだった。恥ずかしそうに、両手で顔を覆っている。それでも、本気で嫌がってはいないようだ。

薬指も根元近くまで入ったところで、小さく動かしてみた。前に入れたままの中指や人差し指も一緒に。

薄い肉壁を隔てて、それぞれの指が動いているのがわかる。聖さんは悲鳴のような声を上げ、身体がベッドの上で弾んでいる。

あたしは少しずつ、指の動きを速くしていった。第一関節まで引き抜いて、また奥まで挿入して、また引き抜いて。

「あ　っ！　ああ　っ！」

聖さんの悲鳴は止むことがない。激しく身体を擦って、自分から腰をくねらせている。

前も、後ろも、あたしの指を締め付けてくる。溢れだした蜜が、じゅぶじゅぶと泡立っている。

「あああっ！　イクッ！　イクうっ！」

「いつて。あたしの指でいつて！」

残像が残るほどのスピードで指を動かす。

「あっ、あああ　っっ！」

膣壁が、小刻みな収縮を繰り返す。

聖さんの身体は大きく仰け反って、ベッドの上で弾んだ。

* * *

聖さんは虚ろな瞳で天井を見上げ、荒い息をしている。

汗ばんだ胸が、大きく上下している。

あたしは俯せになつて頬杖をついて、そんな聖さんを見おろしていた。

初めて知った。

自分の愛撫で相手が　好きな人が感じてくれるのつて、すごく楽しくて、嬉しい。

感じている聖さんつて、すごく綺麗で、可愛いかった。普段はすごく格好いい聖さんなのに、あたしの愛撫で感じてくれていた時は、とても可愛かった。

もっとしてあげたい、もっと感じさせたいつて。そう思った。

公美さんや聖さんにされていた時、あたしもこんな風だったのだろうか。

今なら、さも楽しそうにあたしを苛めていた公美さんの気持ちも、少しわかるような気がした。

「ふわあ……すっごく、よかった……」

ようやく回復してきた聖さんが、ごろりと転がって俯せになった。隣に寝ていたあたしと密着する体勢で頬ずりしてくる。

「ハトって上手だね」

「え、そ、そお？」

こんなことで褒められても、嬉しいような恥ずかしいような複雑な気持ち。

「初めてなんて思えないよ。すごいこと知ってるし。お尻があんなに感じるなんて知らなかったな」

「あ、あの……」

あたしは赤面した。お尻……は、やりすぎだったかもしれない。公美さんが当たり前前のようにしていたから、自分がそれで感じてしまったから、つい聖さんにもしてしまった。

「公美さんに教わったの？」

「っ！」

なにげない口調で言われて、一瞬息が止まった。

「従姉なんて嘘でしょ？ あの人も、ハトのこと好きなんだ」

「ど、ど、どーしてっ？」

あたしはどもりながら訊き返した。どうして知っているのだろう。

「同類はね、見ればわかる」

「わ、わかるのっ？」

「……なんてね、実は本人に聞いたんだ」

「あの、お喋りが！」

思わず、枕を力いっぱい殴りつけた。こんな恥ずかしいこと、よりによって聖さんに知られてしまうなんて。

「学園祭の時にね」

ああ、やっぱりあの時、二人きりにするんじゃないかった。今さら言っても後の祭りだけど。

「学園祭の時にさ、キス、しようとしたんだ」

「公美さんが？」

やっぱり心配していた通り、聖さんに手を出していたんだ。あの浮気者が。

ところが。

「ううん、私が」

聖さんが首を横に振る。

「素敵な人だからさ、なんとなく、ね」

そう言っつて、目を細めて笑っている。

「な……なんとなく、でキスする人なの？ 聖さ

んってば」

「……まあ、相手によつては」

あたしが詰問するような口調になつていたためか、いくぶんばつが悪そうに答える。

ちよつとシヨックだった。

そりゃあ聖さんは、一見すごく軽い感じの人だけど、それはポーズで、ふざけているだけだと思つていたのに。

実は本当に軽い人だったなんて。

「だから、人気のない第二校舎に連れて行つてね、並んで話をしていて、隙を見てチュツとしようかと」

「……聖さんって」

「でもね、断られちゃった」

「え？」

あの公美さんが、そんな、鴨がネギと豆腐と土鍋を背負つてきたようなシチュエーションを見逃すとは思えないけれど。

「公美さんてば『今は美鳩ちゃん一筋だから』ってさ。ハトを陥とすまでは、絶対に浮気しないっ

て、願掛けてるんだって」

「ウソ……でしょ？」

「ホント」

「ホントに？」

「ホント」

あたしは何度も念を押した。

こんなこと、にわかには信じられない。

ちよつとどころではなくシヨックだった。

聖さんが、ちよつと気に入つた相手にすぐちよつかいを出す浮気な性格で、公美さんがあらし一筋の一途な人だったなんて。

もう、わけがわからない。頭の中がぐちゃぐちゃだ。

「それで……、公美さんからどこまで聞いたの？」

「ぜ、ん、ぶ」

「全部つて……」

「毎朝、電車の中で何をやってるかとか」

「あうう」

あたしは頭を抱えて呻いた。

よりによって、一番知られたくないことを。自分の犯罪歴を暴露するなんて、公美さんも何を考えているのだろう。

「ハトが最近艶っぽくなってきたのは、そのせいだったのか」

聖さんは納得顔でうなずいている。

「いや、あの……」

「最近さあ、登校してきたハトが、妙に可愛いんだよね。目が潤んでいて、頬が紅潮して。まるで私を誘惑してるみたいで、何度、衝動的に押し倒しそうになったことか」

「あうう……」

「ま、あの人ならハトを任せてもいいか。素敵な人だもん」

「な……、勝手に決めつけないでよ!」

聖さんが勝手に話を進めていくので、あたしは大声を上げた。

「なんであんな奴……。あたしにだって、今年中にちゃんとしたカッコいいカレシを作ろうっていう野望があるんだから」

このまま、公美さんの世界に引きずり込まれちゃいけない。聖さんとならそんな関係になってもいいかなって、ちょっと思ってしまったけれど、それはともかく。

やっぱりちゃんとした彼を作って、普通の健全な女子高生ライフを送るべきだと思う。この間のデートは体調不良で失敗したけれど、今度こそは。なのに聖さんってば。

「そりや無理でしょ」

って鼻で笑い飛ばしてくれた。

「どーして? あたしってそんなにイケてない? 自分じゃ、悪くないと思ってんだけど」

「そーじゃなくて」

聖さんは人差し指の先で、あたしのおでこをつついた。

「男性恐怖症のハトちゃんが、いきなり彼氏を作ろうって無理でしょ?」

「え?」

あたしは驚いて聖さんの顔を見た。いきなり、何を言い出すのだろう。

男性恐怖症？ あたしが？

きょとんとしている、聖さんも不思議そうな表情であたしを見た。

「まさかハト、自分で気づいてないの？」

「え……う、うん」

「この間のデートは何？ あんた、吐いてたそうじゃない」

「あれはたまたま体調が悪くて……」

あたしの弁解に、聖さんはどこか呆れたような、そして同情するような表情を浮かべる。

「あのさあ……。ハトつてば、道歩いてて男の人とすれ違っただけで、端から見ているはつきりわかるくらい身体が強張ってるよ？」

「そんな……ウソでしょ？」

「自分で意識してないんなら重傷だわ。何か、イヤな経験でもあるの？」

「さあ……別に心当たりはない、けど」

確かにあたしは、男性に対して免疫はない。中学からずっと、私立の女子校なのだから。だけどそれをいっただら、中等部から持ち上がりのクラス

メイトの約半数も条件は同じはず。

だとすると、父親がいないせいだろうか。両親が離婚したのは小学生高学年の時。それ以降はずっと、身近に男性がいなかったことになる。そのため、特に男性に免疫がないのかもしれない。

男性恐怖症だなんて、考えもしなかった。けど、言われてみれば思い当たるフシもないわけではない。

この間のデートもそうだし、公美さんに触れるのは平気……というかすぐく気持ちいいのに、男の人の痴漢に遭うともものすごく具合が悪くなる。痴漢に触られるのが気持ち悪いのは当然だと思っていたけれど、公美さんに触れることに嫌悪感を感じない以上、あたしが駄目なのは「痴漢」ではなくて「男性」なのかもしれない。

「ま、いいか。理由なんかどうだって」

考え込んでいるあたしに、聖さんが抱きついてくる。そのまま、ほっぺにキスされた。

「男性恐怖症のおかげで、ハトはこんなに可愛いのに彼氏がなくて、私とこうしてられるんだ

から。あーあ、公美さんに取られるのはやっぱり悔しいなあ。この先何年も傍にいられないから、仕方ないんだけど」

聖さんはあたしをぎゅうつと抱きしめて、顔を胸に埋めるように擦りつけてくる。

「ね、私が帰ってきたら、またデートしようね。たとえその時公美さんとラブラブでもさ、ちょっとくらい浮気したっていいでしょ？」

「ん……ま、ね」

聖さんつてば、相変わらず軽いノリ。でも、変に深刻になるよりも、この方が気楽でいい。

「その時には、本場仕込みのテクニックでヒイヒイ言わせちゃうから」

「……なんの本場なんだか」

二人で顔を見合わせて、くすくすと笑う。

あたしを抱きしめていた手が、お尻の方へと下りてくる。

そのまま、なし崩し的に第三ラウンドが始まってしまった。聖さんは一回目以上に激しくあたしを攻めたてて、終わった後には二人とも疲れ切っ

ていて、裸のまま抱き合って唇近くまで眠っていた。

今日から新学期。

久しぶりの学校。

だけど、夏休み前とはひとつ違うことがある。

学校へ行っても、もう聖さんはいない。一昨日、

成田空港まで見送りに行った。

次に会えるのは、ずっと先のことだろう。もし

かしたらお正月には一時帰国するかもしれない、

とは言っていたけれど。

一番仲のよかった友達がない教室。

ひとつだけ、使われない机がある教室。

そのことを考えるだけで、憂鬱な気分になって

くる。あたしは溜息をつきながら、久々の朝の電

車に乗った。

「おはよ。久しぶり」

いきなり、耳元でささやく声。

肩に置かれる手。

背中がぞくぞくする。

いつものように微笑んでいる公美さん。だけど、

それに対するあたしの反応は少し違っていた。

わざと不機嫌そうな表情を作って、そっぽを向

くか嫌みのひとつでも言う。それがいつものあ

たしの態度。

なのに今朝はどうしたわけかそれができなくて、

顔が真っ赤になって、黙ってうつむいてしまった。

何故だろう。公美さんの顔を見るなり、あの、

聖さんと過ごした夜の記憶が鮮明に甦ってきたの

だ。

あたしに触れる聖さんの手の感触、唇の感触、

重なり合う肌の感触。あまりにも生々しいその記

憶に、顔が熱く火照ってしまう。

赤い顔を見られたくなくて、あたしは公美さん

に背中を向けた。

「どうしたの？」

不自然な反応を訝しく思ったのが、背後から公

美さんが訊いてくる。あたしは首を左右に振った。

「……なんでもない」

「なんでもない、って雰囲気じゃないけど」

「……ホントに、なんでもない」

どうしてだろう。

公美さんの顔がまともに見られない。

どうして、だろう。

どうしてこんなに後ろめたくて、罪悪感を覚えるのだろうか。

まるで、浮気をした後で本命の恋人と会ったような気分。実際にそんな経験があるわけじゃないけれど、なんとなくそんな気がした。

どうして。

公美さんなんて、恋人でもなんでもないので。

むしろ、聖さんの方が本命っていつてもいいのに。

どうしても、公美さんの顔を見ることができなかった。

公美さんはいつもものように、あたしの背後にぴったりとくっついてくる。

だけど最初に肩に触れたとき、触ってこない。

ただ、そこに立っているだけ。

背中に公美さんの体温を感じながら、あたしはかすかな物足りなさを感じていた。

別に、痴漢されたいわけじゃない。けど、あつて当然のはずのものが無いというのは、やっぱり拍子抜けしてしまう。

そんなことを考えていると、不意に耳元でささやかれた。

「美鳩ちゃんの浮気者」

びくっ！

一瞬、全身が強張った。

反射的に振り返って、目が合ってしまった。

しまった、と思った時にはもう遅い。頬があつと熱くなる。あたしはそのままうつむいた。

「聖子ちゃんに電話で自慢されちゃったわ」

「あ……」

聖さんってば、どうして。

もう、おしゃべりなんだから。

今は太平洋の向こうにいるはずの人を、ちょっとだけ恨んでしまう。

「美鳩ちゃんってば、すっごく積極的で激しかったそうじゃない？ 私の時は抵抗するくせに」

どこことなく拗ねたような、子供っぽい口調だっ

た。

「あ、あの……」

「しかも、タチもやったんだって？ 私にはなんにもしてくれないのに」

ねちねちと続く公美さんの嫌味。冗談めかした物言いではあつたけれど、結構しつこい。

「ご、ごめんなさい」

あたしはいたたまれなくなって、まだ降りる駅じゃなかつたけれど、ちょうどドアが開いていたのをいいことに電車から飛び降りた。

公美さんが追ってくるかと思つたけれど、そんな心配はない。

背後でドアが閉まる。

走り出す電車を見送りながら、なんだか泣きたくなってきた。

どうして、こんな気持ちになるのだろう。

今朝のあたしは、いったいどうしてしまったんだらう。

ひとつ、大きな溜息をつく。

ここで次の電車を待つ、という気分ではなかつ

たので、あたしは駅を出て歩き出した。学校まではあと一駅、歩けない距離じゃない。

一人で歩きたい気分だった。

どんよりと曇つた今日の空と、同じ色の心。

何度も溜息をつきながら、とぼとぼと歩いていく。

ぼつり、と鼻の頭に冷たいものが当たる。

雨はすぐに本降りになってきたけれど、あたしは濡れるのも構わずに、傘もささずに歩き続けた。

* * *

翌日。

あたしは、熱を出して寝込んでいた。雨に濡れて風邪をひいてしまったようだ。

外は、昨日から降り続けている雨に風が加わつ

て、ひどい嵐になっていた。天気予報を見ると、小型の台風が速度を上げて接近しているらしい。

ビュウビュウと鳴る風の音。

がたがたと揺れる窓。

こんな状況で寝込んでいると、よりいっそう陰鬱な気持ちになってしまふ。

「……美鳩、具合はどう？ なにか、欲しいものでもある？」

夕方、出勤前のお母さんが、遠慮がちに部屋の扉をノックした。あたしは返事をせずに、眠っているふりをしていた。

もう一度ノックがあつて、やがて、お母さんの気配は遠ざかっていった。

はつきり言つて、あたしとお母さんはうまくいつていない。普段、ほとんど口もきかない。

理由はよくわからないけれど、あたしはお母さんのことが嫌いだった。お母さんも、あたしに対してどこかよそよそしい接し方をする。

卵が先か、鶏が先か。どちらから始めたことなのか。

正確には憶えていないけれど、ギクシヤクしはじめたのは小学生の頃、両親が離婚した頃か、その少し前だと思ふ。

きつと、離婚のゴタゴタがきつかけなのだろう。

その頃の記憶はあまり残っていない。

お母さんが出かけて家にひとりになると、少し気が楽になった。二人の時は、家の中に奇妙な緊張感が漂っている。

喉が渴いたので、起き上がってキッチンへ行った。食欲がなくて、今朝から食事はほとんど食べていない。スポーツドリンクだけでカロリーを補給している。

ちらつと外を見ると、雲が低く立ちこめて、夕方といつてもまだ早い時刻なのに空は真つ暗だった。

街路樹が、今にも折れそうなほどに大きく揺れている。

雨粒がばらばらと窓を叩いている。

見ているだけで、怖くなってくるような光景だ。すぐに、ベッドに戻った。

ベッドに戻つて、眠ろうとした。

眠つてさえいれば、嫌なことは忘れていられる。怖い嵐のことも、お母さんのことも、公美さんのことも、聖さんのことも。

ここ数日、あたしのテンションは下がりっぱなしだった。聖さんの転校が、予想以上に堪えていた。

昨日、聖さんのいない教室は、夏休み前とは別な空間のようだった。

仲のいい友達は何にもいる。だけどやっぱり、聖さんは特別だった。

今なら、その理由もわかる気がする。

聖さんは、「友情」ではなく「愛情」であたしと接してくれていたから。

だから、他の友達とは違っている。

聖さんと、……そして公美さんは、その点で他の友達とは違う、特別な存在だった。

* * *

いつの間にか、眠っていたらしい。

熱のせいかな、ひどくうなされて、目が覚めると身体中汗びっしょりだった。すごく嫌な夢を見ていたような気がするけれど、それがどんな夢だったか。

たかほは思い出せなかった。

これだけ汗をかいたのに、まだ熱は下がっていないようだった。頭が朦朧としている。

枕元の時計をちらりと見る。真つ暗な部屋の中でぼんやりと光っている数字は、もう夜の十時を過ぎていた。

外は相変わらずの嵐で、窓ががたがたと鳴っている。

あたしは頭まで布団を被って、ベッドの中で丸くなって震えていた。

どうしてだろう。

どうして、こんなに怖いんだろう。

もう、嵐を怖がるような子供じゃないのに。

震えが止まらない。

夜の嵐が、怖くて怖くて仕方がない。

風の音に、か細い嗚咽の音が混じる。いつの間にか、あたしは泣いていた。

小さな子供のように、一人の夜が怖くて泣いていた。

嫌だ。

一人でいたくない。

誰か、傍にいて欲しい。傍にいて、あたしを守って欲しい。

守って……？

いったい、なにかから守るといふのだろう。

思考が支離滅裂だ。

頭がずきずきと痛んで、順序だてて落ち着いて考えることを邪魔している。

「やだ……いや……、お母さん……」

子供のような、情けない泣き声。いくら呼んでも、お母さんが助けってくれるわけがないのに。

そう。

お母さんは助けしてくれないんだ。あたしが泣いていても。

あたしがどんなに辛い思いをしていても、助けはくれない。

だから、ここで泣いてちゃいけない。

そう、一人でいちゃいけないんだ。

「っ！」

あたしは跳び起きると、部屋の明かりをつけた。

もう一度時計を見る。

まだ、最終電車には間に合う。

大急ぎで服を着て、お財布だけを持って家を飛び出した。

家にいたくなかった。嵐の夜に一人でいるのは耐えられなかった。

外はひどい風と雨で、傘なんてほとんどなんの役にも立たなかつた。風を受けて飛ばされそうになるだけだ。

徒歩数分の駅まではずっと向かい風だった。そのせいか、それとも熱のせいか、普段の三倍くらいの時間がかかった。

傘をさした意味はほとんどなくて、駅に着いた時には下着まですぐ濡れで、髪はくしゃくしゃになっていた。

駅員さんの他は誰もいない、人気のない駅。こんな夜はみんな、家でおとなしくしているのだから。

切符を買ってホームへ出る。熱のせいで立っているのが辛くて、すぐにベンチにうずくまった。

自分の身体をぎゅっと抱きしめる。

震えている身体。

雨に濡れて寒いから？

熱のせい？

それとも、まだ治まらない恐怖感のため？

いったい、なにを怖がっているのだろう。

子供みたいに、一人でいるのを怖がっているなんて。

馬鹿馬鹿しい、と思っても、恐怖感が拭えない。

どうして？

どうして……それは考えちゃいけない、そんな気がする。

だけど、考えずにいられない。

そうだ。あたしは子供の頃もそうだった。お母

さんのいない夜を怖がっていた。

どうして……？

だめ。考えちゃいけない。

思考の糸がごちゃごちゃに絡まる。

頭が痛い。

頭が痛い。

心臓が頭の中にあるみたいに、ずきんずきんと脈打っている。

あたしは、それ以上の思考を諦めた。同時に、眩い光が視界に飛び込んでくる。近づいてくる電車のライトだ。

電車の中も、ほとんどお客さんの姿はない。

貸切りのような車内で、あたしは端の席に座った。あたしを中心にシートが濡れて、黒っぽい染みが広がっていく。

電車がガタンと揺れて動き出す。

身体に力が入っていないから、あたしの身体も揺れる。そして、視界も揺れる。

外は真つ暗でなにも見えない。ただ、窓に叩きつけられる雨音が聞こえるだけ。

目的地まで二十分ほど、あたしはただぼんやりと、真つ暗な窓を見つめていた。

* * *

電車を降りて駅を出ると、外は相変わらずの暴

風雨だった。

歩き出してすぐに、傘をさすことを諦めた。一瞬で壊れるか、飛ばされるか。どっちにしろ、傘をさしていたところで濡れることに変わりない。

横殴りの雨の中、あたしは走り出した。

あたしを助けてくれる人。

傍にいてくれる人。

優しく抱きしめてくれる人のところへ。

熱のせいで、風のせいで、何度もよろけて転んでしまう。

既になぞ濡れの服が、さらに泥だらけになってしまふ。

それでも構わずに走り続ける。

雨が目に入って、まともに開けていられない。

それ以上に、溢れ出る涙の方が多い。

あたしは、泣きながら走っていた。

何をやっているのだろう。

家を飛び出した段階から、すでに理性的に考えでの行動ではない。

本能のままに、心の命じるままに走っていった

あたしは、やがて、夢遊病者のように朦朧とした足取りで、その建物に着いた。

まだ新しい、お洒落な外装のマンション。最近ちよつと古びてきた感のあるうちとは大違いだ。きつと価格も億単位なのだろう。

入口は閉まっていた。

その横にあるテンキーと、細いスリット。セキリテイもしっかりしている。

お財布の中に入れてあったカードキー、絶対に使うことなどないと思っていたキーを差し込む。

熱に犯された頭で暗証番号を思い出すのには、少し時間がかかった。

よろめきながら中に入る。

身体が妙にふわふわして、歩いている感覚もなかった。

なにも考えられない。

視界が暗くなってくる。

もう、自分が何をしているのかすらわからないままにエレベータのボタンを押して

意識があったのは、そこまでだった。

すごく、怖い夢を見た。

思い出すのもおぞましい、悪夢。

「いい子にしてるのよ。お母さんはお仕事だから」

そう言っつて、頭をなでて出かけていくお母さんを、あたしは泣きそうな顔で見送っていた。

どうして、行ってしまうの？
どうして？

あたしよりも『お仕事』のほうが大事ななの？
いやだ、置いていかないで。

何年も前から、幾度となく見てきた夢だった。

一人の夜、嵐の夜には必ず見る夢。

だけど、目覚めた時には絶対に憶えていない夢。
起きている時のあたしは、忘れていた夢。

ずっと、封印してきた記憶。

なのに……

いやだ、行かないで。

あたしを一人にしないで。

お母さんがいなくなると、あいつが来るの。

お願い、行かないで！

言えなかった言葉。

言えば、お母さんが悲しい顔をするから。

だから、言えなかった。

黙って、耐えているしかなかった。

思い出してしまった。

今まで経験したことのない高熱が、閉ざされていた記憶の引き出しをこじ開けてしまった。

これは、夢じゃない。

現実にあったことの記憶。

お母さんがいない夜に、あたしの部屋へ入ってくる男。

単なる夢であれば、どんなによかっただろう。

だけどそれは、現実にあったことなのだ。

* * *

「っ」

あまりの眩しさに、一度開いた目をすぐにぎゅっと閉じた。

涙が滲んでくる。

それからもう一度、ゆっくりとまぶたを開けた。明るい陽射しが差し込んでいる部屋。

逆光になって、公美さんがあたしの顔を覗き込んでいた。

心配そうな表情が、一瞬だけ安堵の色を浮かべ、そして少し怒ったような顔へと変化する。

「……公美さん」

「びっくりしたのよ。来るなら来るで、どうして先に電話しないの。第一、こんなひどい熱で昨夜みたいな天気に出歩くなんて！」

公美さんは人差し指であたしの額を軽くつついて、それから同じ位置に唇を押しつけてきた。

「心配したんだから」

「……ごめんなさい」

唇が冷たく感じたのは、まだ、熱があるためだろうか。

「これ、飲みなさい。まだ食べ物を受け付けないだろうけど、少しでも水分と栄養を摂らないと」

パック入りのスポーツドリンクが差し出される。高熱で大量の水分を失った身体には、口の中に流れ込んでくる冷たい液体がなによりも嬉しかった。

時間をかけてパック一個分を飲み干すと、公美さんが額を押しつけて、かすかに微笑んだ。

「熱も、いくら下がったみたいだね」

「ん……そうかも」

確かに、身体に力は入らないけれど、昨夜よりはずつと気分はいい。それが熱が下がったためなのか、それとも会いたかった人に会えたからなのかはわからない。

あたしは、公美さんのベッドに寝かされていた。濡れた服は脱がされて、公美さんのものらしい大きなパジャマを着せられていた。もちろん、上だけ。

「やっぱり、解熱剤が効いたかな？ 座薬のやつが、いちばん効きが速いんだよね」

「ざ……座薬っ？」

あたしの顔が真っ赤になったのは、まだ下がりがきつていない熱のせいではない。つまり公美さんは、意識を失っているあたしのお尻に、その……つまり、いろいろと……まあ、そんなことをしたわけだ。

「もう少し寝てなさい。後で、家まで送っていつてあげるから」

「……うん」

「だけど、さ。……どうして？ なにもこんな熱のある時に、しかも昨日みたいな天気の日に来なかつたって」

「……」

あたしは口をつぐんだ。

一瞬、身体が硬直する。

あの、夢の記憶が甦ってきた。

「……怖かったの」

「え？」

「一人でいるのが、怖かったの。一人でいたくなかつたの。だって……だって……」

涙が溢れそうになった。

身体が震えているのがわかる。

暖かなベッドの中にいるのに、ひどい寒気を感じていた。

「美鳩ちゃん……」

まぶたの上に、そつと手が置かれる。公美さんの手の上に、あたしは自分の手を重ねた。

「ほら、目を閉じて。もう一眠りした方がいいよ」

「……いや、眠りたくない」

「美鳩ちゃん？」

公美さんが訝しげな声を漏らす。

「……あの」

公美さんの手に視界を塞がれた形のまま、あたしは言った。

「……あのね」

「ん？」

「思い出しちゃった……思い出しちゃったの。――」

生忘れていたかったのに。あたし……」

多分、公美さんの顔を見ながらでは言えないことだった。

「あたし、きつともうバージンじゃないの」

「……」

ぴくん。

公美さんの手が、かすかに動いたような気がした。

「……美鳩ちゃん」

「あたし……小学生の時に、お父さんに……」

「美鳩ちゃん！」

かすかに狼狽したような声。まぶたの上に置かれた手に、少しだけ力が込められる。

「……お母さんは知ってたんだよ。前から、あいつがあたしにいたずらしてたことを。それなのになにも言ってくれなかった。あたしのこと守ってくれなかった。だから、あいつは図に乗って……」

あの夜……」

「いいから。もう言わなくてもいいから！」

不意にまぶたが軽くなって、代わりに、ぎゅっ

と身体を抱きしめられた。

頬に、公美さんの顔が押しつけられる。

「もういいの。そんなの、忘れちゃいなさい。想い出は、楽しいことだけ取っておけばいいんだから」

「だつて……」

それ以上、何も言えなかった。

公美さんの唇が、あたしの口を塞いでしまったから。

「ん、ん……」

いつもより少しだけ、乱暴なキス。苦しいくらいに強く抱きしめられている。

いつまでも終わらない、長いキスだった。

唇の柔らかさと甘さが、強張ったあたしの心を少しずつ融かしていく。

「嫌なことなんて、忘れてしまえばいい。私が、楽しいことや気持ちいいことをいっぱいしてあげるから」

「でも……さ」

あたしには、その好意を素直に受け入れること

ができない。

「いいの……？ あたし、聖さんのことが好き。

公美さんのことも……多分ちょっと好き。でも……」

でも。

「……あたし、男が生理的にダメだから、そうなのかな？ だとしたら、すごく相手に失礼なことだよ……ね？」

「ばか」

公美さんは笑って、あたしの頬を指でつついた。

「そんなこと、あるわけないじゃない。美鳩ちゃんは、単に私の魅力にメロメロになっちゃっただけ。それだけよ」

「……自信過剰」

ちよつとだけ呆れて、ちよつとだけ嬉しくて。

あたしも口元をほころばせる。

「本当のことじゃない。今ここで証明してみせようか？ 美鳩ちゃんは今もう、私なしではいられない身体だって」

あたしを抱きしめていた腕が解けて、胸に手が

当てられた。パジャマの上から、包み込むように揉まれてしまう。

「ちよつ……ちよつと待ってよ！」

パジャマのボタンを外しはじめた手を、あたしは慌てて押さえた。

「そんな、いきなり……」

「だめ、今日はもう待たない」

公美さんが意地悪な笑みを浮かべる。

「私だって、いつまでも我慢できないわ。ねえ美鳩ちゃん、君、自分のしたことがわかってる？」

「え？」

「そんな弱っている時に、私に会いに来てくれた。私を頼ってくれた。その上、こんな無防備な姿をさらして……『どうぞお召し上がりください』って言うてるようなものじゃない」

「べ、別にあたし、そんなつもりじゃ……」

「ウ・ソ・つ・き」

パジャマの前がはだけられ、胸が露わにされる。そこへ、公美さんが唇を押しつけてくる。

「もう、私のものになってもいいって、思ってる。

でしょ？」

「そ、そんなこと……」

反論するあたしの声には、力がなかった。

公美さんの言うことは、多分、ある程度は当たっているから。

だからといって、今すぐ公美さんにすべてを許してしまつつもりもなかった。全然、心の準備ができていないし、公美さんを百パーセント信頼しているわけでもない。まだ、決心はついていないのだ。

「なにを言つても無駄。どうせ今の美鳩ちゃんには抵抗する体力もないんだし、やりたい放題でわけ」

「やだあつ！ そんな……」

公美さんの唇が、あたしの乳首を軽く噛む。そのまま、舌先で先端をくすぐる。

少し前まで胸を弄んでいた手は下へ移動して、パンツの中にもぐり込もうとしていた。

「だめっ、ダメだってばっ！ ……やっ……あ
んっ！」

公美さんの身体を押しつけようにも、腕に全然力が入らない。

ささやかな抵抗を無視して、公美さんの中指が、あたしの女の子の部分に触れてくる。

「ね、今日は……やめて？ ほら、あたし、病人だし……」

「その、弱っているとこもそそののよね〜」

「あ、あのっ、すごく汗かいちゃってるし、シヤワ〜も浴びてないし……」

「美鳩ちゃんの匂いだもん、全然OK」

「そんなあ……」

このままでは、本当に最後までされてしまう。

今さら、それを拒む理由はないのかもしれないけれど、やっぱり「心の準備」は必要だ。こんな、なし崩し的にされたくはない。

「お願い……今日は、やめて……お願い！」

「でも、ここはそうは言っていないし」

「やあんっ！」

いちばん敏感な部分で、公美さんの指がこちよこちよと動く。確かにそこは、愛撫に対して反応

しはじめていた。

だけど。

身体はOKでも、心の方はそうは言っていない。

「公美さん……お願い。」、「この次……風邪が治って、この次ならいいから！」

とにかくこの場を逃れようとして言った。それが本心かどうかというのは別問題だ。

「……ホントに？」

公美さんが疑わしそうな目を向ける。

「ホントホント。今度ここに来る時は、ちゃんとお風呂に入ってオシャレして、可愛い下着も着けてくるから……ね？」

あたしは精一杯可愛い顔をして、絶るような目で公美さんを見た。

「じゃあ、今日は見逃してあげる。約束よ？」

「う、うん！」

ぶんぶんと頭を振るあたしに、公美さんはチュツとキスをした。

大変な約束をしてしまったけれど、まあ、抜け道がないわけではない。

今度ここに来る時、とあたしは言った。当分、公美さんのマンションには近寄らないつもりだった。

もちろん、永久に逃げ切れるとは思っていないけれど。

あたしは昼過ぎまで公美さんの部屋で眠って、その後、公美さんが車で家まで送ってくれた。

別れる時に「この次こそ……約束よ？」と、何度も念を押していたのが可笑しかった。

ただ一人になって冷静に考えてみると、とんでもない約束をしてしまったような気がする。

そのことを考えるたびに、頭がかあつと熱くなってしまう。

そのせいなのかどうか、夜からまた熱が上がって、あたしは再び寝込むことになった。

その翌日

昨日、熱のある時に家を抜け出したりしたせいだろうか、お母さんが仕事を休んで、一日中看病してくれた。

相変わらず、どこかよそよそしい雰囲気ではある。

その理由を思い出してしまったために、お母さんと目を合わせるのが少し辛かった。

母親として娘を守れなかった罪の意識が、お母さんを嘔んでいる。

謝るうえにも、肝心のあたしはそのことを記憶から追い出している。

忘れているなら、そのままにしておいた方がいい。だけど、罪の意識は消えない。

あたしの顔を見ることは、お母さんにとっても辛いことだったのだ。

自分が愛して伴侶に選んだ相手が、実の娘に性的な悪戯をしていた。そのことを知った時、お

母さんはどう感じたのだろう。

きっと、いろいろな葛藤があったに違いない。

どうしたらいいのか悩んでいるうちに、その行為は最後の一线を越えてしまった。

そして、両親は離婚した。

……最後にお母さんは、あたしを守る道を選んでくれたのだ。

「……熱は、ずいぶん下がったみたいね」

夕食のお粥とデザートのお母さんを食べ終えて、また横になったあたしの額に、お母さんが手を乗せる。

どうして風邪の時にはモモ缶なんだろう……と、

どうでもいいようなことを考えていたあたしは、ふと気づいた。

お母さんに触れられたのは、ずいぶん久しぶりのような気がする。

なんだか、懐かしかった。

「明日もう一日、寝てなさい。……私も、家にい

るから」

「でも、お店は……？」

「二日くらい、私がいなくても平気。若い子たちだけでもちゃんとやってくれるわ」

お母さんは、新宿でスナックを経営している。

『ママ』が二日も続けて休むなんて、お店にとっ
てはいいことじゃないと思うんだけど。

「お店といえば……あなた、美作百合子先生みまさかゆりこの
ファンなんだって？」

「えっ？」

突然、お母さんの口から意外な名前が出てきて、
あたしは大きな声を上げた。

美作百合子先生……公美さんのペンネーム。ど
うしてお母さんが、その名前を知っているのだろ
う。

「サイン会に来てくれてたって、話してたわ」

「……お母さん、公……み、美作先生のこと、
知ってるの？」

「時々ね、お店に来てくれるお客さんなの。いろ
いろ話をしている、あなたのことも話したんだけ

どね。ほら、あなたの名前ってちょっと珍しい
じゃない？ それで、以前話題に上ったことが
あったんだけど」

「……」

「この間お店に来た時、サイン会に来てくれ
たって仰ってたわ。名前を見てすぐにわかつた
て」

知らなかった。

公美さんが、お母さんのスナックに行ってたな
んて。

それも、常連さんだなんて。

そんなこと、公美さんは一度も言ったことがな
かった。そもそも、あたしはお母さんの店だ
て教えたことはない。ただ、水商売で夜中過ぎな
きゃ帰らない、としか言っていない。

なのに、どうして。

まさか……

まさか。

あたしは、ひとつの可能性に思い当たった。

「……ね、く……美作先生が最初にお店に来た

のって、いつ？」

「え？ 今年になってからよ。ほら、以前からよくうちいらしていたミステリー作家の近藤滝雄先生が、作家仲間を何人か連れてお見えになったことがあって、その時にけっこう話が合ってたね、以来、一人でも時々来てくれるの」

「今年になってからって……、正確にはいつ頃のこと？」

「たしか五月……ゴールデンウィークが明けた後だったわ。あなたが美作先生のファンだって知っていたら、最初にサインをもらってきてあげたのね」

五月、おそろく中旬。

卵が先か、鶏が先か。

公美さんがあたしの前に初めて姿を現したのは、今年の五月下旬だ。

偶然だろうか。それとも……

あたしが考え込んでいると、お母さんが言った。

「ねえ、美作先生と会ってみたくない？」

「え？」

「サイン会なんかじゃなくて。先生に直に会って、お話ししてみたくない？」

「あ……」

お母さんは、あたしと公美さんの関係を知らない。

だから、あたしが喜ぶと思って言ってくれている。

少し強張ったような笑顔で、あたしを見ている。それで、わかってしまった。

お母さんはずっと、あたしに謝りたかったんだって。あたしに謝罪して、許してほしいかって。

だけど、あたしはお母さんのことを無視し続けていて、あの事件のことは記憶から追い出してしまっていた。

あたしとお母さんの間には、ただ、修復できないギクシャクとした関係だけが残っていた。

美作先生の話は、願ってもない「あたしに話しかけるチャンス」だったのだろう。

お母さんの切ない思いが伝わってきて、胸が

ぎゅうつと締め付けられるような気がした。

「今度、先生にお話ししてみるわ。前もって先生が来る日がわかっていれば、その日にあなたもお店にいらっしやいよ」

必死に機会を作ろうとしている。これが、母子の関係を取り戻す最後のチャンスとばかりに。

「……高校生はスナックに行っちゃいけないんだよ」

あたしは冗談めかして言った。笑おうとしたけれど、お母さんと同じように少し引きつった笑みになった。

「……もちろん、学校にはねなきやいいんだけどね」

お母さんの笑顔が、少しだけ柔らかくなった。

* * *

困ったことになった。

あんな約束をしてしまった以上、しばらくは公美さんと会わないようにしようと思っていたのに、

そうもいなくなってしまうた。

会って、いろいろと話したいことがある、訊きたいことがある。

できれば、お母さんのお店で会う前に。

仕方なく、風邪が治った次の土曜日に、公美さんの家へ行った。

もちろん今日は、公美さんにお母さんとのことを問いただすのが目的で、あの『約束』を果たすためではない。

だけど、一応。

家を出る前に、念入りにシャワーを浴びた。

一番お気に入りの下着を着けた。

少し、お化粧もした。

服は、以前口マネ・コンティをご馳走になった日に、公美さんに買ってもらったものを選んだ。

……別に、期待しているわけじゃない。

一応、念のため、万が一のため。

そして、公美さんのマンションを訪れた。

ドアの横のインターホン。

二度、三度と深呼吸して、ボタンを押した。

応答があるまでの数秒間が、すごく長く感じた。心臓が、大きく脈打っている。

土曜日の午後、マンションの廊下はしんとして、自分の鼓動の音が聞こえそうな気がした。

『はい、どなた？』

インターホンから聞こえてくる、公美さんの声。あたしは大きく息を吸い込んで、その割に小さな声で言った。

「……あたし」

同時に、ドアの向こうからドタバタという足音が近づいてきた。

ドアが勢いよく開いて。

いきなり中に引つ張り込まれて。

力いっぱい抱きしめられて。

唇を奪われた。

「ああ、もう、待ち遠しかったわ」

公美さんの手は、もう、あたしの胸を弄んでいく。あたしは慌てて公美さんを引き剥がそうとした。

「ちよ……ちよっと待ってよ！」

「待てな〜い」

「……だからって、玄関でってことはないでしょー！」

「じゃあ、すぐにベッドへ……」

「ちよっと待ってー！」

公美さんの身体を無理やり押し返して、できるだけ強い口調で言う。それでようやく、公美さんもあたしの話聞く気になったようだ。

「ここまで来ておいて、今さら怖じ気づいたわけじゃないんですよ？ 私、もう我慢できないわ」

「……我慢してよ。その前に、ちゃんと説明して」

「なにを？」

「言うまでもないでしょう？」

公美さんは一瞬だけ、小さく首を傾げた。その顔にはすぐに理解の色が浮かび、困ったように苦笑いしてぼりぼりと頭を掻いた。

「ひよつとして……ばれちゃった？ お母さんと話したんだ？」

「……ん」

あたしは小さくうなずいた。公美さんはあたしの肩に手を置いて、リビングへと招き入れる。

廊下を歩きながら、あたしは訊いた。

「公美さん、最初から確信犯だったんだよね？」

たまたま電車で見かけた可愛くて胸の大きな子……じゃなくて、あたしが岡村美鳩だから、あんなことしたんでしょ？」

「お母さん、なにか言ってた？」

あたしをソファに座らせて、公美さんは飲み物の用意をしていた。キッチンから、リビングにいるあたしに向かって話しかけてくる。

キッチンまで声が届くように、あたしは少し大きな声で応えた。

「あたしがサイン会に来てたって！」

「それだけ？」

「最初にお店に来たのは五月だって。これはあたしの予想だけど、五月の、初めてあたしと会った日の直前じゃない？」

「……降参、白状するわよ」

リビングに戻ってきた公美さんが、テーブルの

上に、わずかに金色がかった炭酸飲料を満たしたグラスをふたつ置いた。公美さんの嗜好から察するに、中身は多分シールド　リングから作った発泡酒　だろう。あたしはグラスをひとつ手に取った。

公美さんもソファに腰を下ろす。テーブルを挟んだ向かいではなく、あたしの隣に、ぴったり寄り添うように。

「……で？」

「美鳩ちゃんの推理は……そうね、ひとつ間違ってる」

「どこが？」

「あの電車で出会ったのは、確かに偶然じゃない。君が岡村美鳩だから。でも、痴漢したのは、可愛くて胸の大きい子だったからよ」

「……？」

「最初にお店に行った日にね、なんだか意気投合して、閉店時刻を過ぎても二人で飲んでたの。その時にね、君の話題が出たんだ。酔っていたからね、泣きながら話してくれたよ。高校生の娘に嫌

われていること、そしてそれは自分の責任だ
て」

その場面を思い出しているかのように、公美
さんはゆつくりと言葉を紡ぐ。

「確かに……ね、ちよつとショックな出来事
よね。最初は、作家の端くれとして興味を持った。
美鳩みくって名前も素敵じゃない？ なにか小説の題
材になるかなって、そのくらいの気持ちだった」

「それで……駅で、張り込んでたの？」

「おおよその家の場所と、通っている高校は聞い
てたから、どの駅からどの路線を使うのかはわ
かっていた。あとは簡単、君、顔はお母さん似だ
ものね」

公美さんがわざわざ「顔は」と断つたのは、体
型が似ていないから。お母さんの胸は、むしろ平
均よりも小ぶりだ。

「……で、今はそんなことはどうだっていい。

「……で、君はどうしてそんな顔をしているのか
な？」

公美さんは悪戯っぽく言って、人差し指であた

しの頬をつつく。それは、あたしが不機嫌そうな
顔をしているから。

「怒ってる？ 黙ってたから？ それとも、単に
小説のネタにするために君をつけ回したと思っ
てる？」

「違うんですか？」

「それは誤解よ」

公美さんの笑顔は、優しげだった。とても、嘘
を言っているようには見えない。

「確かに、ね。電車で出会ったのは、君が岡村美
鳩だから。だけど痴漢したのは、君が可愛くて胸
の大きい子だったから、よ」

言いながら、公美さんの顔が近づいてくる。肩
に、腕が回された。

耳に、唇が押しつけられる。

「駅で君を見た瞬間ね……一目惚れ、だった。モ
ロに好みのタイプで、気がついた時には触ってた。
そうしたら、反応もすごく可愛いじゃない？」

耳たぶをくすぐるようにささやかれる。くす
ぐつたくて、あたしは身体を擦ったけれど、公美

さんの手はあたしの肩をしつかりと抱いていた。

「なんだか、身体の芯が熱くなってくる。エアコンが室内を適温に保っているはずなのに、あたしは汗ばんでいた。」

「公美さんって……」

「ん？」

「あ、あたしの、どんなところが……好きなの？」

「可愛いところ」

公美さんは即答する。

「顔も、スタイルも、感じやすいところも、感じている時の声や表情も、全部可愛い」

「答えながら耳にキス。ほっぺたにキス。だんだん、唇に近づいてくる。」

「ただどあたしは、公美さんの答えに満足していませんでした。」

「……それってなんだか、エッチだけが目的みたい」

「そんなことないわ。ただ、セックス抜きの恋愛ができるほど純情ではないっていうだけのこと」

「……ごめん」

あたしは首を左右に振った。

「あたし、まだ公美さんのこと信用できない。だって公美さん、多分ウソついてる」

「うそ？」

「なんのこと？ っていう公美さんの表情。ただ一瞬、視線が泳いだ。」

「公美さん、あたしにウソついたことはない。だけれど……今のは違う。なにか……ウソっていうか、隠し事してる」

「はつきりとした根拠があるわけではない。強いていえば、女の勘。」

「公美さんがあたしにつきまとっていたのには、何かもうひとつ、強い動機が必要だと思った。そうでなければ、納得できない。」

「なにかを、隠している。だからあたしは、公美さんの言葉を信じることができない。」

「あたしのことを好きって言う言葉、それは嘘ではないだろう。けれどその言葉の陰に隠されているなにかがある。」

公美さんは、困ったような表情であたしを見て
いる。あたしも、視線を逸らさなかった。

やがて、公美さんが根負けした。

「……………降参、今度こそ、本当に」

ふっと、諦めに似た笑みを浮かべる。

だから、油断してしまった。次の瞬間、ぎゅつ
と抱きしめられて唇を奪われていた。しかも、舌
まで入ってくる。

「んっ……………んん……………っ！」

一分近くじたばたと暴れて、ようやく解放され
た。と思つたら、公美さんの手はあたしの太腿へ
移動していた。

「……………公美さん」

「でも、これ言つたら美鳩ちゃん怒りそうだも
の」

「言わなくたって怒るよ」

「……………似てる、んだ」

「え？」

これも、また、不意打ちだった。突然の言葉に、
あたしは戸惑った。

「美鳩ちゃん……………私の初恋の相手に、似てる」

「初恋の……………って、え？ でも、え？ だって」

しばらく呆然としていて、ようやく我に返った。
今の公美さんの発言の、おかしなところに気がつ
く。

「公美さんの初恋って……………あの、高校の時じゃな
いの？」

美作百合子のデビュー作の元になった経験。女
子校で出会った、美しい上級生との恋物語。

公美さんは、実体験だと言っていた。物語の中
では、二人ともそれが初恋だった。

だけど、ヒロインの恋人だった美しくて大人っ
ぽい上級生と、どちらかといえば童顔のあたしと、
いったいどこが似ているというのだろう。

あたしがそのことを指摘すると、公美さんはし
てやつたりという笑みを浮かべた。

「似てるわよ。立場を逆にすれば……………ね」

「逆？」

「必ずしも、ヒロインが私とは限らないで
しょ？」

「え……、あつ！」

やられた、と思った。

あの本の著者が公美さんで、それが実体験だからといって、ヒロインが公美さんとは限らない。

あたしは、その可能性を見落としていた。

公美さんの役どころは『ヒロインが憧れた上級生』なのだ。それを、相手の視点から小説にしたのだ。

小柄で童顔という設定のヒロインなら、確かに、あたしと似ているかもしれない。

「ドキッとしたよ。あの子の、妹かなにかかと思っただ」

「あたし、姉も従姉もない」

「うん。だから、こんな偶然があるんだって驚いた。そして……思っただ。今度こそ、この子を私のものにしたって」

「公美さん……」

ようやく、納得がいった。

公美さんがあたしにこだわった理由。

あたしのことを好きになった理由。

そして、それを今まで黙っていた理由。

好きだった誰かに似ているから、好きになる。

自分のモノにならなかつた、その人の代わりに。

普通の女の子にとって、それは多分、あまり嬉しいことではない。

だから公美さんは、秘密にしていたのだろう。

けどあたしは、不思議と、そのことを不快には感じていなかった。

どうしてだろう。自分でもよくわからない。

ただ、なにが目的なのかわからなかつたこれまでに比べると、疑問が解けて、妙にすっきりした気持ちになっただけだ。

「怒っていないの？」

「別に」

正直に伝えると、公美さんはほっとしたようなそれでいてどこかがつかりしたような、不思議な表情を見せた。もしかしたら、やきもちを妬いて怒って欲しかったのかもしれない。やきもちを妬くのは、相手のことが好きな証だから。

「じゃあ……正式に、恋人になつてくれる？」

「それとこれとは別。その件については……保留、かな？」

「保留……なのね、否定じゃなくて？」

「ん、一応ね。すぐに否定するのも悪いし」

ここで即座に否定するほど嫌いじゃない。ただ、素直にうなずく気になれなかったのも事実だ。

正直なところ、彼氏イナイ歴十六年のあたしには、恋人つて言われてもいまいちピンと来ない。

仲のいい友達と恋人との境界はどこにあるのだろう。同性であれば、それはなおさらわからない。

「じゃあ……さ」

公美さんが、あたしの顔色をうかがうように言う。

「あの、約束は……？」

「約束？ なんのこと？」

「美鳩ちゃん！」

白々とぼけると、公美さんはいきなりあたりを押し倒した。

「ずるい！ 約束したのに！」

「でもなあ、どうしようかなあ……」

公美さんが泣きそうな表情を浮かべているので、つい意地悪を言いたくなる。

もちろん、本気ではない。

今日は家を出る時から、それを覚悟して来ているのだ。

自分から進んで、されたいわけじゃない。ただ、約束は約束だ。

それに、いまさら特別なことではないだろう。

公美さんには、これまででもいろいろとエッチなことをされている。それに、あたしはもう……

バージンではないのだ。別に、一度くらい最後までさせてあげること自体に問題はない。

そして。

本音を言えば、あたしも、したくなってきていた。

ずっと、公美さんと寄り添って座っていたためだろうか。身体が火照って、女の子の部分が潤いを増しているのがわかる。

身体が疼くって、こんな感じなのだろうか。公美さんに触って欲しい、気持ちいいことをして欲

しい　だんだん、そんな想いが強くなってくる。

ソファの上であたしを押し倒した公美さんは、顔中にキスの雨を降らせて、服の上から胸を揉んでいる。ブラジャーの中で、乳首が固く尖るのを感じる。

「正直に言いなさい。美鳩ちゃんだって、したいんでしょ？」

「……あつ！」

胸を愛撫していた手に力が込められて、それが気持ちよくて、声が漏れてしまった。

「嘘ついたってわかるんだから。もう、したくてしたくてたまらなくなってるでしょ？」

「ち……がう、もん」

口先だけの否定は、もちろん公美さんには通じない。

スカートをまくり上げられて、パンツの上から割れ目を撫でられて、それだけであたしは、イキそうなほどに昂っていた。

じわっと、身体の奥から蜜が溢れだしてくる。

お気に入りの下着に、エッチな染みを作ってしまう。

う。

もう、止められなかった。

身体が、快感を与えられることを望んでいた。胸も、下半身も、じんじんと熱くなって、しかもそれが加速度的に強くなってくる。

したい。

エッチしたい。

触って欲しい。感じさせて欲しい。

今まで感じたことのない、強い欲求だった。あたしは、公美さんにぎゅっとしがみついた。

「ヘンだよ……今日のあたし、なんかヘンだよ……。すごく、したくなっちゃってる」

「それは、美鳩ちゃんが私のことを大好きだからよ」

「ちがう……もん。そんなんじゃないもん！」

首をぶんぶんと振る。

認めたくはない。そんなの、認めたくない。だけど、この激しい衝動はなんなのだろう。

確かに、公美さんに愛撫されるのは気持ちいい。

あたしの身体はそのことを知っている。だからと

いって、本格的に触られる前からこんなに熱くなるなんて、今までになかった。

あまりにも不自然だ。

公美さんの言う通り、あたしは、そんなにも公美さんのことが好きなのだろうか。そんなはずはない、と思いたい。

「……ヘンだよ。あたし、ヘンなの……どうしちゃったの？ 公美さぁん……あたしに何したの……？」

「……」

一瞬、公美さんが視線を逸らした。

「……って、なんでそこで黙るのよっ？ ホントに、何かしたの？」

「あは」

公美さんがぺろつと舌を出す。

「先刻の飲み物の中に、ちよつと……ね」

「っ！」

それはつまり、媚薬とかなんとか、そんなものを入れたということだろうか。

だから、こんなにも身体が火照っているのだろ

うか。

「なっ、なっ、なっ……」

驚きと怒りのために、なかなか言葉がでてこない。

「なんでっ、なんでそんなことっ？」

「だって、ほら。万が一、美鳩ちゃんが約束を破った時のための保険というか……」

「ばかつ！ もう！」

迂闊だった。いつもは正面から実力行使の公美さんが、こんな裏技を使うなんて。

あたしのグラスはすっかり空になっている。

「……って、どんな薬がどのくらい入っていたのだろう。」

「それもこれも、美鳩ちゃんのためよ」

公美さんは悪びれずに言う。

「どこがっ！」

「美鳩ちゃん、私に気持ちイイこととして欲しいと思っっている。だけど、素直にそれを認めることに反発を覚えている。だから、言い訳できるようにしてあげたの。クスリを盛られて、自分の意志

とは関係なしに身体が疼いて仕方がない、だから仕方なく私に抱かれる。不可抗力ってこと。それなら、君も納得できるでしょ？」

「納得できるわけないじゃん！ まったく、なに考えてるのよ！」

「どうやってたら、美鳩ちゃんとイイコトできるか……それしか考えてない」

また、強く抱きしめられた。

胸が圧迫されて、乳首が刺激されて、痺れるほどに感じてしまう。

「う……あ、ば……かあ」

「いつまでもこのままじゃ、辛いでしょう？ 私が、楽にしてあげる。うんと気持ちよくさせてあげる。だから、おとなしく言うことききなさい」

呪文のように、耳元でささやく声。

抗いがたい魅力を秘めた声。

もう、抵抗はできなかつた。

公美さんの言う通り、理由ができてしまったから。

こんなに欲しくなっているのは、薬のせいだから。

ら。公美さんが無理やりしたこと、あたしの意志じゃないから。

だから今だけは、公美さんの誘惑に負けても仕方がない。

「……公美さんのバカ！ ……させてあげる……させてあげるから、うんと気持ちよくして！」

あたしも公美さんに抱きついて、自分から唇を重ねていった。

そして十分後

あたしはもう、先刻の自分の選択を後悔していた。
た。

やっぱり、あんなこと言っただけじゃなかった。公美さんみたいな変態さん相手に。

その時あたしは、全裸でベッドに横たわっていた。
た。

ただ裸にされているだけではない。腕は背中に回されて、上半身はロープで縛られている。

肌に、ロープが喰い込んでくる。ただでさえ大きな胸が、上下から圧迫されてさらに盛り上がっている。

「あ……んくっ……」

あたしは切ない吐息を漏らした。妖しげな薬で火照った身体は、こんな陵辱さえ快感と受け止めてしまう。

きつく縛られたロープが与える鈍い痛みすら、気持ちよかった。まるで、力いっぱい抱きしめら

れているような心地よい圧迫感がある。

公美さんにはこれまでも、変態ぽいことをされたことがある。だから、縛られるくらいなら、かろうじて許容範囲内だ。

だけど

もう一つのことは、どうかと思う。

必死に閉じようとする脚を無理やり開かせて、公美さんが裸体を入れてくる。

今まさにあたしを犯そうとしている公美さんは、男性器を模した器具　デイルドーとかいっただろうが　が生えたパンツを穿いていた。

これは、ちよつと怖い。

あたしは男性恐怖症だし、公美さんの指や舌がすぐ気持ちいいことは知っているけれど、こんなものは初体験だ。

無機的な「器具」ということであれば、以前ローターで攻められたことはある。けどサイズが全然違うし、中途半端に生物的な形状が、かえって不気味さを醸し出している。

あたしとしては、せめて今日のところは、普通

に指や舌でして欲しかった。この間、聖さんとした時のように。

「ただ公美さんは、どうしてもあたしを「犯したい」のだそう。その動機は、聖さんとした以上のことをしなきゃ気が済まないという、子供っぽい対抗心だ。」

「それは、まあ、理解できなくもない。少しくらい怖くても、我慢してもいいかと思う。」

「ただ……」

「ひとつだけ、無視できない問題がある。」

「あ、あたし……突然、乱視になっちゃったかなあ？　なんだか……二本、に見える……んだだけ？」

「あたしは引きつった笑みを浮かべて言った。公美さんが「冗談」で済ませてくれる淡い期待を抱きながら。」

「ただ公美さんは、魔性の笑みを浮かべてあたしを見下ろしていた。」

「そうよ？　美鳩ちゃん、『お尻』も好きでしょ」

「う？　これで、前と後ろを同時に犯してあげる」「いやあああつっ！」

「あたしは慌てて身体を擦った。」

「いやあつ、ねえ……せめて普通にしてお」

「涙を浮かべて懇願する。お尻が気持ちいいことは知っている。だけど、あんなに大きなものを挿れられるなんて、考えただけでも怖いのに、しかも前と後ろの同時になんて。」

「ねえ、お願い。それだけは……」

「い、や」

「公美さんは一言で切って捨てる。」

「そもそも私たちって、出会いからして普通じゃなかったんだから、初体験はこのくらいやらないきゃ刺激的じゃないでしょ？」

「そんな刺激いらないっ！」

「必死の抵抗も虚しく、あたしの太腿を両腕で抱え込んだ公美さんは、腰を前に突き出してくる。」

「やっぱり失敗だった。」

「いきなり、こんなことになるなんて。」

「縛られて、お尻とヴァギナを同時に犯されるな」

んて。

いきなり、こんな変態的なエッチだなんて。

やっぱり公美さんって、根っからの変態さんなのだろうか。

あの小説が実体験だというなら、高校時代の公美さんはとてもお淑やかで奥ゆかしいお嬢様だったはずなのに。この人ってば、いったいどこで道を踏み外してしまったのだろう。

「さあ、美鳩ちゃん、覚悟はいい？」

「だめっ！ 全然ダメ！」

ぶんぶんと首を振る。だけでもちろん、そんなのなんの役にも立たない。

あそこに、ディルドーの先端が触れた。ローションを塗ってあるのか、ひんやりと冷たく濡れた感触がある。

そして、お尻にも同じ感触が。

「ひっ……」

反射的に、身体が強張る。下半身に力が入ってしまう。

「力を抜きなさい。じゃないと痛いよ」

「そんなこと言ったって……」

意識して抵抗しているわけじゃない。だけど、反射的に下半身に力が入ってしまう。括約筋がきゅうつと収縮して、異物の侵入に抗っていた。

力を抜いた方が痛くない、それはわかっている。頭ではわかっている、身体がいうことを聞くとは限らない。

「……はい、深呼吸」

あたしの頭を撫でながら、公美さんが言う。

その言葉に従って、大きな深呼吸を繰り返す。

吐いて

吸って

吐いて

吸って

「……って、やあああっ！」

少しだけ緊張が解けた……と思った瞬間、公美さんは腰をぐいっと前へ突き出してきた。

大きなディルドーの先端が、あたしの中に押し込まれる。

「やああっ！ いやあっ、痛いっ！」

力いっぱい悲鳴を上げた。なにしろ、手加減なしに一気に奥まで突き入れられてしまったのだ。

あそこも、お尻も、限界ぎりぎりまで拡げられている。下半身を裂かれるような痛みが走る。

「あああ　っ！　いやっ、やだっ！　痛あ……
いつ！」

涙が出るほど痛かった。

収縮力の強いお尻の括約筋を、無理やり拡げられる。苦しさを伴った鈍い痛み。

そして前は、文字通り引き裂かれるような鋭い痛み。

……って、前？

どうして？

「痛い……よお……、どうして……？」

「そりゃあ、初めてでこんな大きなモノを挿れられたら、痛いに決まってるじゃない」

「でも……あ、あたし……初めてじゃ……」

初めてじゃない　そう、言おうとした。その前に、公美さんに唇をふさがれた。

「初めてよ。これが、美鳩ちゃんの初体験……そ

ういうことにしよう？」

「でも、だって……」

「小学生の時の、一度きりなんでしょ？　だって、処女膜の傷だって治って再生しちゃっやうよ」

「え……？　そう……なの？」

「そう。だから、美鳩ちゃんはバージンってわけ。それを破られちゃったんだから、痛くて当然」

「……そ、そんなあ」

公美さんってば。

公美さんってば……。

「それがわかってたなら、もっと優しくしてよ！

こんな乱暴に……」

あたしは泣きながら叫んだ。だけど公美さんはしれっとした顔で言う。

「だあって、美鳩ちゃんの泣いている顔も可愛いんだもの」

「ばかあつ、嫌い！」

ぷいっと顔を背けようとする。だけど両手で顔を掴まれて、またキスされてしまう。

「大好き」

「うるさ……あぁっ！」

公美さんの腰が、前後に動きはじめる。とたんに、あたしは文句を言うどころではなくなってしまうた。

あたしの身体を貫いた、プラスチックとシリコンでできた二本の杭。それが与える刺激は、あまりにも荒々しかった。

一本は、あたしのバージンを引き裂いて、膣内をいっばいに満たしている。

もう一本は、直腸の奥深くまで届いている。

薄い肉壁を隔てて、それぞれがあたしの中で暴れている。

「あぁっ！ やぁぁっ、あぁっ、あつぐうう……あぁっ！」

繊細な粘膜が擦られる激しい刺激。頭がぐちゃぐちゃで、それが前なのか後ろなのかすらわからなくなってしまう。

無理やり掘げられる痛み。

引き裂かれた粘膜の傷を擦られる痛み。

一番深い部分を突き上げられる、内臓にずんと響くような痛み。

そして、苦しいような圧迫感。

「あぁ……あ、はぁぁ……う、ううう……くうんっ！」

涙が止まらない。

だらしなく開いた口からは、涎が溢れている。

痛みと苦しさで身体を振りたくなくなるけれど、そんなことをしたら自分自身により強い刺激を与えられることになってしまう。あたしはピンで縫い止められた昆虫採集の標本みたいに、下半身を貫かれたまま身動きできずにいた。

だけど公美さんは遠慮なしに腰を前後に揺すつて、あたしから無理やり嗚咽を引き出そうとしている。

それとも、これでも遠慮しているつもりなのだろうか。以前友達に見せてもらったアダルトビデオに比べると、ずいぶんゆっくりした動きのような気がする。

もちろん、これ以上速く動かれたりしたら、あ

たしは本気で悲鳴を上げるだろう。呼吸に合わせ
て往復しているような、ゆっくりとした今のペー
スが、なんとか我慢できる限界だった。

「可愛いわよ、美鳩ちゃん」

公美さんが紅潮した顔で言う。

「やああ……いやあ」

「前も、後ろも、ぎゅうぎゅうに締めつけてる。
ちよつと、血が出ちゃってるわね」

「やだあ……やだつてばあ……」

「でも、すごく濡れてる。こんなに太いのをくわ
え込んで、褌が絡みついてきてる。下のお口が、
涎を垂らしてるわ」

「ああんっ、言わないでよあ……あうっ、ん
んっ」

公美さんつてば、やつぱりサドだ。

あたしを泣かせて、苛めて、楽しんでいる。

痛くて、苦しくて、恥ずかしくて。あたしが泣
いているのに、公美さんはずっとも気持ちよさそ
うにしている。

「ああ……いい、すごくイイ」

「やつ……ああつ！ だつ、めえ……あくうつ！
ふ……あつ！」

自分も気持ちよくて歯止めが効かなくなってきた
のか、公美さんの動きが激しくなってくる。あ
たしの中に激痛が走る。

「やああつ！ あああんっ、あああつつ！」

「みく……ちゃ、ああ つつ！」

突然、公美さんがあたしの上に倒れ込んだ。突
汗ばんだ肌が密着する。

「……え？」

一瞬、なにが起こったのかわからなかった。突
然のことに、あたしは痛みも忘れてしまった。

耳元で、荒い息づかいが聞こえている。

これつて、まさか……。

「あ……はは……いつちゃった」

「ええ？」

あたしは目を丸くした。いくらなんでも、早過
ぎやしないだろうか。

公美さんがあたしを貫いてから、まだほんの二、
三分しか経っていないはずだ。

「……もう？」

「だって……」

公美さんは気まずそうに視線を逸らす。

「ずっと、したいしたいと思っていて美鳩ちゃんと、念願かなってようやくエッチできたんだもの。我慢できなかつたわ」

そう言つて、ちゅつと唇を重ねてくる。

「美鳩ちゃんと知り合つてから、他の女の子とは一度もエッチしてないのよ。以前は『新宿の美少女キラー』とまで呼ばれたこの私が。もう、限界まで溜まつていた」

「……そんなに我慢しないで、他の女の子とエッチすればよかつたじゃない」

「そんなことしたら、美鳩ちゃんがやきもち妬くでしょ？」

「ううん、全然」

即答すると、公美さんは唇を尖らせてあたしの頭を小突いた。

「意地悪な子ね、もう」

「それより……終わつたんなら、これ、抜いて

よお」

あたしの下半身は、まだ、二本の dildo に貫かれたまま。動きが止まっても、無理やり拗げられる痛みは残っている。

「なに言つてるの。まだまだ、これからよ」

「ええっ、だって！」

「一度だけ、なんて約束はしてないわよね？」

「そんなあつ！」

じたばたと暴れるあたしの肩を、公美さんは両手でしつかりと押さえつけた。上半身は縛られたままだから、これでは抵抗することもできない。

また、公美さんが動きはじめる。

腰が、リズムカルに前後する。

「やっ、ああつ、だめっ！ あつ……ああつ、くっ……うんっ！」

「……今度は、美鳩ちゃんが気持ちよくなるまで続けるからね」

「や……そんなあ……ああんっ！ やああんっ！」

公美さんの手が、あたしの足首を掴む。

両脚を、大きく開かされてしまう。

「ほおら、美鳩ちゃんの恥ずかしいところが丸見えよ」

「やだっ……あんっ、あっ、やああ……」

「太いモノを、根元まで呑み込んでるの、わかる？」

言いながら、ぐいっとな腰を突き出してくる。

「あうっ……ううんっ、はああ」

ズンツ……って、奥に当たるのを感じる。胃が、お腹の下から突き上げられるみたい。

痛いつていうよりも、苦しい感じ。

お尻の穴が広げられる鈍い痛みは相変わらずだけれど、破瓜の痛みは薄れつつあった。痛みを感じる神経が麻痺してしまったのかもしれない。

そして、少しだけ。

少しだけ、気持ちよくなってきた。

リズムカルな抽送に合わせて漏れる声が、だんだん、甘くなってきた。

深々と貫かれているあそこが、蜜を滴らせているのを感じる。

乳首が、固くなってる。

あたしにとっては激しすぎるはずの乱暴なセックスなのに、それでも、身体は感じ始めていた。

一度そのことを意識してしまうと、それから先は加速度的に快感が強まっていく。

「ああんっ……あっはあ……んんっ、んんっ……くうん、あんっ」

一往復ごとに、微妙に角度を変えて前後する公美さんの腰。まるでポンプみたいに、あたしの中に快感を送り込んでくる。

いっばいに快感を詰め込まれた身体は、風船みたいに膨らんでいくような気がした。

だって、ほら。

なんだか、頭がふわふわする。

なにかに掴まっていないと、どこかへ飛んでいってしまうそう。

公美さんに抱きつきたかったけれど、腕は背中側で縛られている。あたしは他にどうしようもなくて、脚を公美さんの腰に絡ませた。

両脚でしっかりと、公美さんを掴まえる。

「んっ……んあぁっ……うんっ、あふうん……
あぁんっ」

「気持ち、いいの？」

耳たぶを噛みながら、公美さんが訊く。

あたしはがくがくと頭を振った。

「うん……いい、イイの……気持ち、イイ
の……」

素直に、そう言えた。

だって、今日はちゃんと言い訳があるから。

公美さんに、エッチな薬を飲まされちゃったか
ら。

だから、お尻まで犯されて感じちゃったとして
も仕方がない、あたしのせいじゃないんだって。

だから、素直におねだりすることができた。

「ねえ……もっと……もっとお、気持ちよくなり
たいの」

そんな懇願に応えるように、唇が重ねられる。

あたしは自分から舌を伸ばした。

ぎゅっと、抱きしめられる。

密着した体勢で、公美さんの腰が小刻みに動い

ている。擦りつけるように、中をかき混ぜるよう
に。

「イイ……イイの……あぁんっ、イイツ！」

あたしも、公美さんの腰に回した脚に力を込め
た。

一番深い部分までつながって。

一番深い部分をかき混ぜられて。

あたしの、一番深い部分まで愛撫されている。

「ひい……いいっ！ あっ、あっ、あはあっ！」

「美鳩ちゃん……美鳩ちゃん！」

公美さんの汗が、ぼたぼたと降りそそぐ。

もう、限界。

一瞬だけ息を止めて

「……あぁっ、あぁぁっ！ あぁぁあ　っ！」

あたしは、すべてを解き放った。

* * *

「ふやぁぁ……」

頭の中に白い靄がかかったような感覚。

それは、どのくらい続いていたのだろう。

「だんだん、意識がはつきりしてくる。」

いつの間にかロープも解かれていて、あたしは公美さんに抱きしめられていた。

「あたし……：：：？」

「十分くらいかな。気持ちよかった？ 初めてで失神するくらい感じちゃうなんて、私のテクニクもたいしたものね」

「……なに言ってるのよ。薬のせいじゃない」

あたしはわざと冷たく言った。

変な薬を飲ませて犯したんだから、あんなに感じてしまったのも公美さんの手柄ではない。そう、思っていた。

「だけど。」

「薬って、なんのこと？」

公美さんが悪戯な笑みを浮かべる。

「なにして、だって、先刻……」

「あれ、ウソ」

「う、ウソって……っ」

「いくら私でも、本命の女の子を落とすのに反則

はしないわよ」

「じゃ、じゃあ……：：：：：：：：：：：：：：：：：：：：？あ、身体が熱くって、すごくしたくなっただのは？ 初めてののにこんな感じちゃったのは？」

「私の、愛とテクニクの勝利ね。つまり君は、初体験で、一緒にお尻まで犯されて、それでも自分からおねだりして失神するくらいに感じちゃったってわけ」

「……っ」

あたしは、二の句が継げなかった。

酸欠の金魚みたいに、ただぱくぱくと口を動かすだけ。

「だって、そんな。」

薬のせいだから、あんなことされて感じてしまっても仕方ないんだって、そう思ったのに。

「だけど実は、薬なんか飲まされてなかったなんて。それなのに、信じられないくらいに感じてしまった。」

縛られて。

前はおるか、お尻にまで太いモノを挿れられて。それなのに、感じてしまった。

そんなのって……そんなのって。

「まあ、美鳩ちゃんが失神するほど感じちゃうのも当然だけどね。愛する人にされることなら、どんなことだって気持ちイイもの」

あたしの困惑をよそに、公美さんはけらけらと笑っている。

「だけど、公美さんの意見は自惚れも甚だしい。

「なにが『愛する人』よ、バカ」

「私のこと、愛してないの?」

「どーゆー勘違いをすれば、あたしに愛されてるなんて思えるわけ?」

この人、自分がこれまであたしに対してなにをしてきたか、憶えていないんだろうか。

「じゃあ美鳩ちゃんは、好きでもない相手にお尻まで犯されてイっっちゃうようなインランなんだ?」

「……ち、違うもん!」

あたしは頭を左右に振った。それだけは、認め

ることはできない。

「だけど、あたしが公美さんを愛してるなんて。

それも認めない。

今となつてはさすがに、公美さんのことが嫌いとは言わない。だけど、恋愛感情を持っているかとなると話は別。

多分、違う。

だって。

公美さんと最後までエッチした後でも、あたしの、公美さんに対する感情が変わったようには思えない。

普通、本当に好きな人と結ばれたら、きっと、もっと感動というか満足感というか、そんな想いがあるはずじゃない?

激しいエッチで肉体的にはくたくただけど、精神的にはいつもの、強引に痴漢された後とあまり変わらない。

だからきつと、『愛してる』わけじゃないんだって。

そう思った。

「ほんつつとにしぶといね、君。いい加減、私の彼女になっちゃいなさいよ。そうしたら毎日、もつと気持ちイイこととしてあげるのに」

手のひらであたしの胸を弄びながら、公美さんが言う。

「いりませんよっつ、だ」

あたしはべっつと舌を出した。

「あゝあ、こんなはずじゃなかったのになあ。最後までやつちやえば、もう身も心も私のものだと思っただのに」

「あたしは、そんな簡単に落ちる女じゃないもん」

「聖子ちゃんには簡単にさせてあげたくせに」

「それは……まあ、その人の普段の行いというか、誠意の問題でしょ」

「性意？ それなら溢れるほどに……」

「だからっ！ そゝゆゝところがイヤ！」

「……仕方ない。じゃあ、もう一回」

公美さんの身体が、あたしの上に覆い被さってくる。

「ど、どうしてそうなるのよっ？」

「だから、うんと感じさせて、もう私なしじゃいられない身体にしてあげる」

「いやああっ！」

指が、敏感な部分に触れてくる。

もちろん、抵抗しようとした。

だけど公美さんのテクニクは、それを許さなくて。

あたしの身体はまたすぐに、快樂の虜になってしまった。

……そして。

結局この日は一晩中、何度も何度も。

「いつそ殺して！」って泣きたくなるくらい、めちゃくちゃに感じさせられてしまった。

次の日の朝は腰に力が入らなくて、起き上がることもできなかった。

実際に経験するまで、あたしは、公美さんと最後までしてしまふことが怖かった。

そうしたら本当に、公美さんの虜になってしまふんじゃないかって。

メロメロになって、自分が自分じゃなくなってしまふような気がして。

それが怖かった。

身体を許さなければ、最後の一線を越えなければなんとかなる　ずっと、自分にそう言い聞かせていた。

だから

公美さんにバージンをふたつも捧げてしまつて……否、奪われてしまつて、これからどうなつてしまふかと不安だったけれど。

結局のところ、二人の關係に大きな変化は生じなかつた。

正式に公美さんの恋人になる話は、その後もずっと保留にしたままだ。

公美さんは週に二、三回、あたしと同じ朝の電車に乗ってくる。

そして、抵抗してもやっぱり触られてしまう。時々、一緒に食事したりする。

週末はたまに、一緒に出かけたりする。

これらのことは、前からしていたことだ。

ドライブとかで二人きりになると、キスされたり、触られたりする。

これも結局、以前と同じことだった。

ただひとつ、ちよつとだけ変わったこと。

月に一、二回、あたしは公美さんの部屋に泊まる。実際には、強引に泊まらされると言う方が正しい。

もちろん寝るのは一緒にベッドで、最後までさせてあげ……いや、されてしまふ。

いっぱい、いっぱい、感じさせられてしまふ。

それが、公美さんに対する感情になんらかの変化をもたらすかと思つたけれど、やっぱりなにも変わっていないみたい。

以前と同じ「痴漢とその被害者、だけどなんと

なく友達」という関係を維持している、と。

あたしは、そう思っていた。

実はそれが間違いだって気づくまでには、三月以上かかった。

あれからも時々会っていた笙子と話していた時に、気づかされてしまった。

その時、笙子には公美さんとの関係を全部話したんだけど。

笙子はいつも通り、お嬢様らしい静かな笑みを浮かべていたけれど、同性愛の先輩として、ズバリと核心をついてきた。

つまり……

あたしは、ずっと前から。

多分、朝の電車で会うようになって間もない頃から。

公美さんのことが、好きだったんだって。

そう指摘されて、だけどあたしは反論できなかった。

にこにこ微笑んでいる笙子を前にして、ただ真っ赤になってうつむいていた。

多分、きっと。

自分でもわかっていたのだろう。

ただ、認めたくなかっただけなのだ。

よりによってクリスマスイブ　それは公美さんの誕生日　の直前に、そんなことに気づいてしまったあたしは、途方に暮れてしまった。

気づいてしまった以上は、このままというわけにはいかない。

きちんと「お付き合い」の返事をしなきゃいけない。

だけどやっぱり、それをあたしの方から言うのって、なんだか悔しい気がする。

公美さんはあたしに痴漢して、強引に、エッチなことをいっぱいして。それなのに結局あたしを手に入れてしまうなんて。

やっぱり悔しい。

あたしって、変なところで負けず嫌いだと、今さらのように気づいた。

だから。

言葉に出してはなにも言わないことにした。

ただ黙って公美さんのために、誕生日とクリスマスを兼ねたプレゼントを買った。

以前、公美さんの口からちらりと聞いて、なんとなく記憶の片隅に残っていたもの。

本屋で立ち読みした本の中で、偶然目に入ったもの。

お店の人に相談して、捜してもらった。

あたしにとってはずいぶん高かったけれど、今回だけは特別だからとお年玉貯金も少しおろして。

ワイン好きの公美さんのために買った、一本のワイン。

きつと、喜んでくれると思った。

きつと、なにも言わなくてもわかってくれただろう、と。

フランスはブルゴーニュ地方の秀逸な生産者、

コント・ジオルジュ・ド・ヴォギユエが作り出す中で、一番人気がある赤ワイン。

公美さんが初めてご馳走してくれたワイン『ボンヌ・マール』と同じ村で生まれる。

シャンポール・ミュジニー・レザムルーズ。

その名前の意味は 『恋人たち』。

閲覧に関する注意事項

このPDFファイルは、画面での閲覧、紙への印刷の両方に適合するようにレイアウトされているため、閲覧時にはちょっとした工夫が必要です。

モニタ上での閲覧

モニタ上で読む場合、ブラウザやアクロバットリーダーのサイズを横長にして、ちょうど半ページが画面に収まるようにしてください。すると、Enterキー(Returnキー)で半ページずつ読み進めていくことができます。

画面解像度が高い場合(1280×1024以上)、ウィンドウサイズをできるだけ大きくして、1ページ単位で表示することもできます。その場合は、表示モードをデフォルトの「幅に合わせる」から「全体表示」に変更します。

なお、モニタ閲覧には旧タイプのレイアウトの

方が適しているかもしれません。(その代わり、旧レイアウトは印刷向きではないのです)

どうしても旧レイアウトで読みたいという方は、北原宛にその旨メールでお知らせください。個別に対応いたします。

印刷しての閲覧

印刷して読む場合、用紙サイズはB5を使用します。

印刷実行前に、アクロバットリーダーのプリンタ設定を確認してください。

高性能のレーザープリンタを使用する場合、プリンタの「2ページ印刷」の機能を用いた方が、実際の本に近い文字サイズで読みやすいかもしれませんが、(縮小してB6用紙に印刷するのでも可)

アクロバットのバージョンが4の場合、印刷が極端に遅くなる場合がありますが、これはソフトの仕様によるものと思われるのでご了承ください。